始

特276
65

特276
65

特 276
65

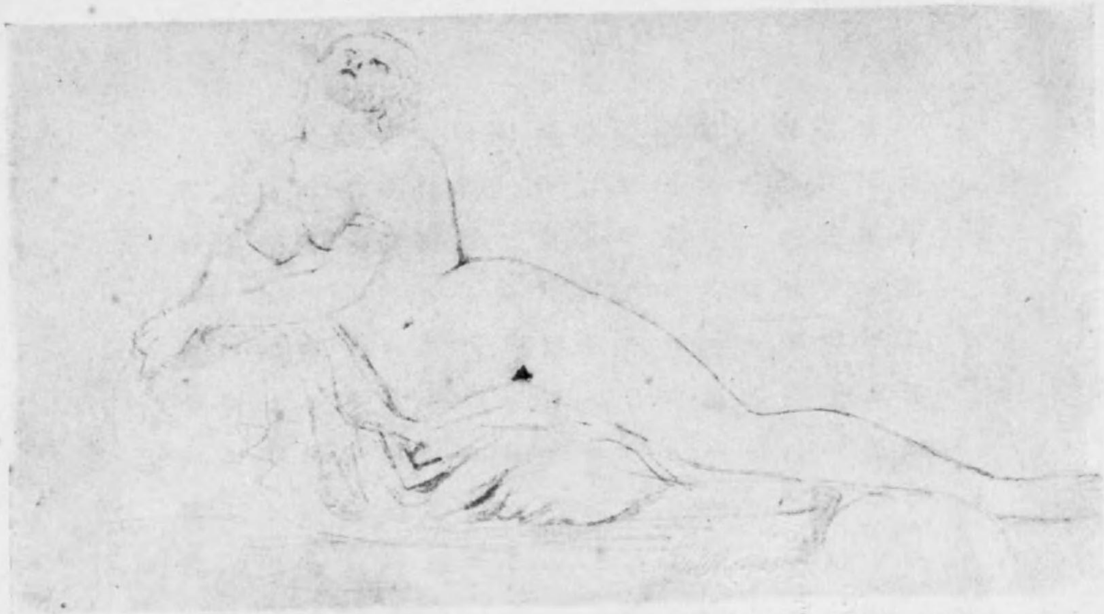
希臘美姫傳

世界奇書
異聞奏聚
第七卷

大隅爲三譯

國際文獻
刊行会
發行

公叫を護保のンーノチルバりと上墳スクニア　スーレクりベ



故山本芳翠氏手寫

スイラ

古代彫刻
ヴェルサルエイユ藏

548-35

序

世界文化の泉源たる希臘精神を實際に表現した三人の女性。それは光りと理想に生き美と調和の鄕國に咲いたヘテーラ階級のサッフォ、アスパシア、ライスによつて代表される。(サッフォはサフオーと發音すべきではないが、吾人にとつて語呂の惡い前者を避けて本文中にはサフオーとした)紀元前七世紀に生れた女詩人サフオーは決して美しい女ではなかつた、が希臘の古代文學に一つの詩形まで印した程の女性であり、

其古郷レスボスで數奇を極めた生活は、彼女のはげしい情熱の所産であつたに相違ない。本書はその文體から想像すると後代の詩人が彼女のうたつた女神アフロヂテーの頌詩からヒントを得、彼女の全生涯を一層詩化した跡がある。彼女の實際生活が本書に見るやうなものでなかつたことは種々の文獻に據つて立證し得るけれども、希臘原本から伊太利譯した本書のテキスト Le aventure di Sapho, poetessa di Mitylene, traduzione dal greco, del cerebre V. A dinorante in Roma の文派が如何にも

古代の純朴な味ひに滿ちホメーロス、ヘロドートスの作風さへ偲ばれひきつけられるものだ。よつて本書の底本となし自由譯を試みた。玉を瓦とした譏は勿論まぬかれぬ。

アスパシアは佛國翰林院會員アンリ・ウェセー氏の書に據つた。此處で述べたいことは本文中ウェセー氏の言葉によつて盡くされてゐるから無理に蛇足を附け加へぬこととする。

ライスの項は佛人デベー氏の書によつた。原本は吾人の尊敬する前の帝國大學哲學科

の教師ラファエル・フォン・コーベル氏の愛讀書である。ライスを先生の哲學なり生活に關聯して考ふる時、ライスは未だ吾人の心の裡に顯現し、力ある教訓を與へるやうに思ふ。

昭和二年十二月九日

譯者識

希臘美姫傳

目次

サフオー

第一章……二

第一節　モヌメント……二

第二節　風待ち……五

第三節　惠みの壺……一二

第四節　フアオンの變身……一七

第五節　サフオーの生立ち……二一

第六節　ミチレーネの神祭……二五

第七節　花束……三一

第八節　晩餐……三五

第九節　ロードペ……四〇

第十節　姉妹……四七
第十一節　アフロヂテーの憤怒……五二
第十二節　その夜……五九
第十三節　祈願……六四
第十四節　奇遇……六七
第十五節　珍客……七六
第十六節　父の慈愛……八二
第十七節　父の歸宅……八九
第十八節　ロードベの勸告……九四
第二章……九六
第一節　クレオニーケの眠り……九六
第二節　ピチアの洞窟……九九
第三節　水占……一〇五
第四節　魑魅魍魎……一一一

第五節　夜深の家出……一一六
第六節　船出……一一九
第七節　航海—上陸……一二三
第八節　見知らぬ人……一二七
第九節　歡待……一三〇
第十節　會食……一三六
第十一節　夜の散策……一三八
第三章……一四二
第一節　無闘心……一四二
第二節　夜の對話……一四四
第三節　物語り……一四九
第四節　詩……一五九
第五節　凶報……一六七
第六節　不思議の再會……一七二

第七節　置手紙……一七八
第八節　斷食……一八〇
第九節　出立……一八三
第十節　聖僧……一八四
第十一節　投身……一九〇
アスパシヤ……一九五—二一二
ライス
第一章……二一三
コリントスのライス、其幼年時代（常闘に差す開運の曙光）
第二章……二一三一
ライスの花園——その夜會
第三章……二一三八
ライスの夜會に於ける歡談の主題——ゼウキレス及びスコパスの美人標準論
第四章……二五一
哲學者キセノクラテースの冒險
第五章……二六三
彫刻家ミロンのライス招宴——悲劇作家エウリピデスの事
第六章……二七九
リディア王子アルサムベース——ライスを想ふ其の愛情——彼女の王子奉迎宴
第七章……二九八
サルヂスの旅——音信
第八章……三〇七
サルヂスを後に——エレウシス神祭——祭司の情炎——レオンチデース將軍——ライスの逃走——コリントス着——市民奉謝の盛宴——美人掠奪——レオンチデースの愛——將軍の求婚
第九章……三三七
饗宴
第十章……三九七
入牢——裁判

第十一章……四一八
ライス、コリントスを去るに決す——デイオゲーネスの彎男——熊のエウリピデス
第十二章……四二九
ライスのアムベラキア到着——アリスチツポス及クレオンの來訪——舊友——コリントスの使者エオダマス
第十三章……四五五
レオンチデースの死
第十四章……四六一
ライスの歸國
補遺——彼女の面影……四六三
第一節　シムポジオン……四六三
第二節　名言——機智——皮肉……四七五
第十五章……四八三
ライスの悲戀——悲嘆と死

——終——

希臘美姫傳

カワヤー

Οἷον το γλυκυμαλον ἐρευθεται ἀκρῳ ἐπ' ὑσδῳ,
ἀκρον ἐπ' ἀκροτατῳ. λελα ́ οντο δε μαλοδροπηες,
οὐ μαν ἐκλελαθοντ', ἀλλ' οὐκ ἐδυναντ' ἐπικεσθαι.

ΣΑΠΦΩ

梢の梢のそのまた梢に,
紅さして熟める林檎のごと.(くはし乙女は)
そは摘む人の忘れしものか
否,否,及ばぬ枝の高さに.(意譯)

サフオー

サフオー

第一章

第一節　モヌメント

詩にも戀にも、あれ程名高いサフオーの故郷は何處か？

父はスカマンドロニーモス、母はクレースとて、先づ不足無い程の活計、レスボスの島蔭、ミチレーネの片ほとりに彼女は呱々の聲を上げた。……と謂ふ說が、最も有りさうな事でもあり、最も確からしい、とは思はれるが。——

彼女の評判が大きいにつけ、其生ひ立ちの曖昧模糊が酷く眼に立つ。孰れの書を繙いても、作者が違ふと其兩親の名迄異る。先づ父の名が、シモン・エフオニーモス、カモン・エウリグノース、エウクリトス・エタルコス、種々樣々。——吾等は最も眞に近いとして、ヘロドートスの說に從はう。が、皆樣、

斯うも有名な家族の名が、斯うも知られて居ないことに驚かれる勿。例へば、詩聖と呼ばれるホメーロスの氏も素性も、……（渾沌、と申します、雲漠々、）生國も、誕生も、年齢さへも分つては居りませぬ。さうして其千古の大文字が、亡ぶことなきパピロスに彫り付けられてあるわけでも無いに、あはれ這の旅詩人の、市から市へと繰返した夥しい詩の記憶は、希臘全土の人の心に殘された。

——話は逸れた。

這麼ことだけは認められる。

サフオーが盛に詩作して居た時代の朧げながら分つてゐる事。で、種々の意見を寄せ集めて見ると彼女は大體アルケーオスの同時代の人であらうと想像し得られる。さうして、彼女の作詩を見やうとするには古代文學者の作品中に散見する斷片を拾ひ集める他は無いが、併し其處から、酌めども盡きぬ詩の泉に行き着く道が見出されやう。

如何かして彼女の實蹟を知り度いものと彼方此方を旅した自分は、レスボスに來てひたと漂泊の杖を休めた。其處で私は、彼女の遺跡を搜し當てた。其地で私は、著しい彼女の生涯に何かしら新しい光明を與へ得る恒久物（モヌメント）を發見したのだ。——レスボス最古の碑銘や、其處の最初の住民が殘し

た方言混りの手記文や、ずつと〳〵溯つた時代の詩やなどが、その山中に靜かに保存されてゐたのである。――斯うした詩は、古い其頃の人達が集會の折々につけ、歌ひ歌はれたものであつた。

さて、

是等凡ては、今私が始めやうと急ぐ物語りの土臺となつてゐるのである。さらば、旅人が未知の港に船寄せて目新しい異國の風物に胸ときめかす心もて私の話を進めて行かう。

第二節　風待ち

夢を產む南國の日ざしが紺碧の海にちらくらと光るレスボスの島は息詰るやうな野花の香ひが重くおどんで、應と呼べば應と答へさうな帆船の影が眩しい金色に椽取られて辷つて行く。其島のミチレーネといふ一つの港にフアオンとなん云へる若者が居た。父は澤山の船の持主である。年齡の頃は廿歲位でもあらうか、是として目に立つ所が無く、圖拔けた力も無ければ別して美しいといふでも無し、風彩もさして上らず勿論非難する程の男でもないから、大方は看過してしまふであらう。

フアオンは父の持船に乘り込んでレスボスからキオに行つて居た。が、最早商用も終つたので、再び故鄕に船を出さうと彼は今、海邊に立つて順風の來るのを待ち受けてゐる。――そよとの風も其處には無い。

「駄目だなあ……是れあ……」

大層に風いでしまつた海は、鏡のやうにとろりとして、黑い程に澄み切つた大空を映す。帆といふ。帆は用ゐられない。舵方は心配げに腕を拱んで、這の天候を什うだらうかしらと考へる。深い〻〻碧の空、……遥い何處かにぽつちりと雲が無いか、……海の上に、小魚の跳る程な輕い速でも

無いかしら、微風の起る兆として、何でも好い一寸でも動くものが無いものかと、兎見斯う見して案じてゐるが、凡て々々、希望は消えた。

時々は、輕い微風がだらりと垂れた巾廣い帆布を膨らせて彼等の心に希望を持たせる。

「ほう……出たぞ……」

歡びに充ちた聲を揚げて、水夫等は、錨を上げたり、纜を解いたり、勇ましく出帆の用意を爲る。

が全く出來心の微風は、夫つきりふうつと、後の無い吐息のやうに戰ぎ止んで、以前にも增した懶い凪ぎ。水夫の大部分は、倦怠し切つて、日燒けの見える逞しい體軀を横にしたり、寢そべつたり垂れた帆の影に遣り場の無い日中の眠りをむさぼるのである。

フアオンは、腰掛けてゐた岸に起ち上つて、其處らに見える奥深い洞窟の中に涼味を求めやうと身仕度を爲た。

うんざりしてゐる其倦怠のなぐさみにか、又は、待ち望む海の微風を得るためにか、そこはかとなく彼はポセードンとテチスの神に、動かない四邊の眺めに溶ける緩い〳〵祈の歌を口ずさむ。

その時であつた。

海の眞中にぽうと立つ、思ひがけない水蒸氣の夢にも似て、唯ふうわりと、彼の眼の前に現れた

……天界の女性か？　其處には足音も響かなければ、さやと衣摺れの音も無かつた。さうして女。……フアオンは先づ、這の日中の靜寂に、空想の幻影を見ると思つた。

が、降つて涌いたやうな其女性は、透明な霧の中から拔け出すやうに靜かに夢の階段を下る……女だ。……而も、若く美しい手弱女、確かに。

フアオンは、音も無く現れた彼女の姿を、自分の眼を確かめるやうに聽りと見て、先づ驚いた。

さうして次には欣んだ。

「美しい女の方、……何をお索ねになるのです。……」

彼は急いで起ち上ると、

「さあ、……這の窟穴の中に御掛けなさい。……燃えるやうな太陽の光は、其麼にも嫋やかな貴女の御身體を解體します。」

「お構ひ無くば……」

と、淑やかに彼女は其處に座を取る。さうして、何とも言ひやうの無い、人を惹き付けるやうな愛嬌を滴らせて彼の方へと身を傾けながら

「親切なフアオン……」

とすら〳〵と言ふ。

ファオンは吃驚した。彼女の詞を打切つて彼は叫ぶ。

「誰が……誰が貴女に私の名を言ひました？……ファオンはレスボスに住む名も無い舵取りに過ぎませぬ。什うして其名が……他所の島、……而かも、其麼、美しい御口から……」

「其麼事は好いの、ファォン。……他日貴方が、御自分でも考へられないやうな有名な方に成られたら、それは其時の事として、今は唯、妾の願ひを諾いて下されば夫で好いの。……キープロス島へ連れてつて下さい。……直ぐ。ね、急ぐのですから。……で、若し貴方が、他の浦に上陸なさらうと思つてゐらつしやるのなら、夫は止めて。宜御座んすか……」

と、當然のやうに馴れ〳〵しい。何やら命令を聞いてゐるやうでもある。

「什うして又、其麼に急いで。それに、……海は御覽の通り動きませぬ。全で研ぎ澄した鏡か何かを見るやうに漣も立たないでは御座いませんか。エオールさへも、微風の神を縛りつけて居るんです。……夫ゝりも、斯うして私と、這の洞穴の中にじいつとしてゐらしつたら如何です。貴女のやうな嫋やかな方を、恐ろしい嵐、……不便な長い船旅に、如何して私は連れられませう。……海の中には、彼方此方に散らばり匿れて、船を沈める暗礁といふものが御座います。夫を恐ろしいとは

御思ひにならないのですか。什うして貴女などを長い船旅に……」

と、ファォンは言つた。

今、彼の心は、此やうな美しい女の方と、何時迄も々々然うして居たい事で一杯であつた。靜かな海の上を眺つと見てゐると、這の滑かな海がむく〳〵と膨れて怒濤と大嵐が起れば好いと願はれて來る。さも無くば風が永久にそよとも動かず、錨を上げる事が出來なかつたら、止むを得ないといつたやうに、今の樂しさを充分味ふことが出來るだらうに。……彼は希つた。

女は言ふ。

「本當にはなさいますまいけれど、ポセードンの支配する空色の領域を横ぎることは、妾、爲馴れて居りますの。——止むことを得ない用事が出來て、キープロス迄行かなければなりませんので……風が無いと貴方は被仰いますが、風といふ程のものは止みましても、微風が私共を彼の島の方へ連れてつて呉れます。……ちよつと！　此方へゐらしつて御覽なさい。——」

と言ふと彼女は起ち上つて窟を出る。

ファオンは默つて尾いて行く。さうして口を半分開いて、彼女の小さな動きをも見落すまいと眺つと見てゐる。彼女は蹋んで、小砂を一と握り拾ひ取ると大空へそれを投げ上げる。……海や岩や

洞の入口に美しい綠色の絨氈を敲つたやうに卷き絡んだ蔦はひつそりと動かないやうに見えてゐるが、砂は、思ひも寄らぬ風のためにキープロス島の方へと長い線を畫いて靡く。

「ほうら、什麼？……這の風なら好いでせう？」

動いた。……併し、……

「船の帆は彼の通り少しも動きませぬ。」

「御覽よ、……御覽よ。風が出てまゐりました。」彼女は言ふ。

見て居る間に、垂れ下つた帆布は脹れ、さうして重くはためき初める。最早水夫等は右往左往して歡びの聲を揚げ、舵手のフアオンの急ぎ船に還るやうにと相圖を爲る。

フアオンも今は抗ふべき詞も無い。見も知らぬ女を彼は船の中へと連れる。彼は艫に、彼女は舳に、水夫等は驚きに口を開き兩手をだらりと垂した儘、作業を休めて彼女を眺める。彼等は知らぬ。キープロス島へ彼女を案内する約束を知らぬ。――大方這の旅の間に買ひ取つた女奴隷であるのだらうか。……が、舵取りは、物珍しげに兎見斯う見る彼等を制して、客人の席に彼女を導き、

「おい、みんな！……失禮の無いやうに敬ふのだぞ……」

と命ずると、愈々錨を卷き上げる信號を與へた。

船は動く。穏かに撫でる微風は輕く水面に漣を立て、舵方は舵を取つて調和ある音律で唄ふ――アルゴノーテの古歌を唄ふ。さうして船脚は緩やかにキープロスの岸へと進む。

傾く太陽は浪の眞中に影を落して其運行を急ぎ、光ある圓板がぎら〳〵と浮いて碎ける。……碎ける先は段々と赤味を帶び、海の果て、沖の方迄長く漂い、軈て日は沈み、夕闇が漣の上に翼を擴げる。――軟風はそよ〳〵と、刻一刻に勁んで行く帆布を愛撫す。

すべて是等は最も幸福な船旅であることを示す。夜は深みゆく。舵方及帆桁の係りを殘して水夫等は快い眠りに落ちる。黑い夜は、名も知らぬ美しい客人の顏をフアオンに匿した。――眩しさに、見詰むる眼の自然に閉された彼女の瞳も今は見えない。靜けさ。唯靜けさ。彼自らも夜の靜安に包まれて眠る。風と楫とに船は靜々と小浪の上を辷つて行くのであつた。――

第三節　惠みの壺

まだ明けやらぬ曉が、仄かに東の扉を開く。船は涼しい朝風に送られて海と空との間を進む。

――東の間、……東の間、何といふ空の變りやう。あのやうに風いだ御空が、今一面の妖雲に蔽はれ、荒海は轟々と逆卷き鳴る。誰も彼もが眼を醒して已の持場に驅け附け、急いで、……急いで……軋り泣く帆桁を下し、帆綱を切る。

作業はけたゝましい騷擾の中に行はれ、何人もフアオンを見詰め、フアオンの指圖に連れて動く。帆の無い船は濤に浚はれて見る〳〵間に流されて行く。一陣斜に下ろす突風の急流に運ばれる鷹は、じつと其翼を窄めて抗ひ得ない力の行の行衛に身を任かせる。

心配の蒼白さは孰れの水夫の額からも血の色を奪ひ、彼等は怖れた。刹那々々に惴付き懼れた。どう〳〵と物凄じい響を立てゝ船の周圍に吼え寄る大濤の黑い下に、忽ち呑まれて沈むだらう。今、今、楫は狂暴な嵐と波の瀧に楫手の手から奪ひ取られた。――

が、何といふ事!!……あやしく美しい彼女ばかりは、微笑さへ湛へた一層朗かな物靜けさ！　恰かも夫は、花の上行く神々の、あの翼車に乘り戲ふれて居るかのやう。

迫り來る危險は船の人々を怖ぢ恐れしめ、暫くは彼女を見上ぐることさへ爲得なかつたが、――

不圖、その靜けさに彼等は打たれた。

子鳩の如く驚き易く勇氣の無い筈の小娘が、ただの娘が、荒海の遭難と戰ふ壯夫の膽を凌いで居る。さては白痴、……それとも不敵……？

が、

彼女は靜かに立上つた。

「皆さん、勇氣をお出しなさい。……どれ一つ、妾が船を指揮しませう……」

と彼女は、艫の方に身を斜にして、くるくると帶にしてゐた布地を取ると斯う、一端を膝に抑へたつけ、片方を手にずいと伸ばす。……頭の上迄、不思議な帆。

帆は張られた。風は這の帆を脹ませて、細い布地を何のこと、弓の形に吹き曲げる。さうして彼女は相も變らずあでやかな微笑を湛へ續けてゐるのであつた。夫からは船は、したゝかな帆柱に支へられたやう、些かの動搖も無く狂瀾に乘つて、水面を鳥の立つかとばかり唯すら〳〵と辷つて行く。小川に落ちた樹の葉の輕さ。――

（とある畫工が、「ガラテヤ海を渡るの圖」として、學士院の廻廊を飾つたのは這の情景の描寫で

あつた。）

舵方、水夫の深い驚きを什うして言ひ表はすことが出來やう。神か、人か、斯くも激しく狂ひ出しては防ぎやうも無い自然の力を、巧に、樂しげに操る彼女、……彼等は唯沈默して美しい其人に驚異し讃嘆し、感謝して居る他は無かつた。

遠く彼方に浦が見えた。浪に浮んだ黑灰色の雲の一片、

「陸だ！……陸だ！……」

と、思はずも叫んで水夫等は安堵の胸を撫でおろす。今は最早キープロス島の磯濱も、船着に宜い港の樣までも見えて來る。手嫋女は些かも姿を改めぬ。嫋やかに帆布を揭げて船を行る一入艶な其姿、——彼女の微笑を載せて船はする〳〵と港に入り、靜かな水面に錨を下す。

フアオンは己れの感動を表はす言葉も無かつた。

「おゝ！……貴女は神か……神の娘！ 心の崇高さ！……美しい御姿！……慈愛の籠つた御情！何處一つとして尊い御方、……あはや私共は難破して果てる所で御座いました。もう、死ぬより他は無いと覺悟したのです。……貴女は、貴女は、戰慄き懼れる私共を御救ひ下すつた。……什うして這の御惠みを感謝しませう。……否、否、貴女は、私共の力及ばない御方です。……御禮申さねばならない所ですが、御禮どころではありません。只もう永久に、溢れるばかりの感謝を胸に刻むだけです。——」

彼女は言つた。

「いゝえ、貴方、……妾こそ貴方に御禮を申さなければなりませんわ。折角ゐらつしやらうと思召した航路を、遠廻りさせたので御座いますもの。」

彼女は灌木の茂つた蔭にフアオンを伴ふと、白く、透き徹つた壺を取出して彼に與へる。

「フアオン、這の尊い香水を貴方に上げます。……今が今迄妾のした眞實の行ひを御認めなら、信用をして妾と約束して下さいまし。……それは、貴方が鄕里に歸られましたら、這の靈水を貴方のお體に撒く事ですの。然うしますると貴方は、妾を御信じ遊ばした好い酬ゐが得られますわ。」

只若い娘の如く、事も無げに彼女は言つた。……が、其崇高さ。什うして人間と思はれやう。フアオンは額づく。唯額づく

「おゝ、女神、……女神でゐらつしやいます。……何卒、女神さま……せめて御名前だけでも御泄し下さい。一生私が、貴女の水先案内を矜りとすることの出來ますやうに御名前だけでもどうぞ私に、……」

「ほゝ」
と嬌艶に彼女は笑つた。
「其麼になさらないでも好いのよ、ファオン。……妾はね……さう……
人間に、喜悅と憂苦とを持つて來る者、――解りまして？　ですから妾は、……ほうら……悲嘆と憂苦の泉として、……御覽なさい。妾の微笑には涙が混つて居りますの。……まだ解りません？
では、……オリムポスの神々の、最も弱く、最も恐しい母と御承知なさい！」
「呀！　天界の御詞、……味ふ事の出來ない神秘な意味、不可解な御詞！……」
「何方でも宜く御存じの者、妾は戀神キュピドの母神です！」
威嚴ある者の如く言ふかと思ふと、雲に覆はるゝ日の御影か、彼女は妾を消してしまつた。
ファオンはぴたりと平伏し拜む、
「暫く、……暫く、おゝ、美しい女神！……雪のやうに白い貴女の御足、匂やかな貴女の御手、どうぞ吻けをお許し下さいませ……」
が、聲は空しく虚空に消える。女神は最早オリムポスの頂に行き着いてゐることであらう。

第四節　ファオンの變身

少時の間ファオンは、餘りの驚愕にみじろぎさへも爲得なかつた。
船に歸ると彼は奇蹟のやうに妾を匿された女神のことを水夫等に物語るのではあつたが、彼女から與へられた惠みの壺のことだけはたゞ胸一つに秘めて置いた。舟人總ては女神の御力を畏みて、神罰やあらうと戰慄きながら、假令今此處にましまさずとも惠厚かれとひたすら祈る。間もなく船は舳を故郷レスボスに向け、風も順調に穩かな航海を續け、ミチレーネの港へと着くのであつた。
ファオンは船に在るうちから、アフロヂテーの惠みの壺の事共を考へ込まずには居られなかつた。憂鬱に落ちたやうに物も言はない。浦曲に着くや、一刻も早く、幸福な結果を得られるに相違無い其靈水を驗して見度いと心が焦つて、眞つ先に飛び下りは爲たのであつたが、――
年老いた父は毎日々々倅の歸りを心配しつゝ待ち佗びてばかり居られるであらう。夫を思へば彼は先づ何を措いても父の棲居へと急いで行かねばならないのである。父は只餘念も無く息子の歸鄉を欣んだ。此際彼は、不思議な神の出現に就いては欠の先にも出さなかつた。歸る早々、思ひも寄らぬ御威の話をして老父の心を混亂させるに忍びなかつた。

で彼は、長い航海に疲れたゆゑ暫く休み度いからと言譯して、急いで自分の室へと退く。

一人になるとフアオンは嚴重に戸を鎖し、愈々彼の壺を實驗して見やうとするのであつたが、何やら畏れられる神の威稜と神罰とに二の足踏まれる心が半分、さればとて灼然であるに相違無い贈物の實驗は試して見度し、とつ措いつ二筋道に迷ひながらも、眼を定め、顫へる手先で彼の壺を開けば、得も言はれない煙がふうつと立昇る。……戀し曉の泪の露に、まだ濡れてゐる菫の花か、春渡るゼフィールの息のかぐはしさか、それとも初の接吻か、較べやうもない匂ひであつた。

フアオンは心躍らせながら、今こそ宜し！　女神の仰せを實行して見やうとするのである。で先づ恐る〳〵片方の指を壺に浸し、片方の手にと塗り試みる。荒くれた海の仕事に褐色を帶びた其手の上を這の靈水がやつと流れたかと思ふ間に、……おゝ、何といふこと!!　今咲き初むる菖蒲と白さを比べる位、程好き肉付にふつくり肥えて、舊の儘なる一方の手と並べては、是がそも同じ體から出たと思はれやうか？……フアオンは寧ろ氣味惡い程の變身に愕きながら呟いた。

「……が、……片方の手ばかり段々斯うして奇麗になると、こりや全で不具のやうだ！……えゝ!!
什うなることか行つて見やう」

彼は着物を脱して壺の中に兩手を入れ、汲み取つた液を胸に塗る。……同じ效驗が現はれる。試

みは希望に變る。靈水を體全體に流して行くと、見る〳〵、色も形も變じて來て、其線の美しさ、色の白さ、何人か詞に表はすことを得やう。輝くばかりの青年の魅力が其處に生れて來るのであつた。

フアオンは、磨かれた金屬の鏡に眼を遣ると、――何といふ爽颯たる姿であらう――新しいナルキッソスは、其處に映つた自分の姿を倦むことを知らず眺めてゐる。自然に發達し、成熟したとしか見えない其美しさ。圖り知られぬ神の力もて急變せしめたとは思はれぬ其變身の見事さは、自然物に對する長年の習慣から神の惠みを思ふ感じを段々弱める傾きが無いでもないが、這の一瞬に生れた惟神の美しさには自然の肉體から享け得られない新たな魅力が添ふのである。如何にせば斯うも本來の彼自身と似、而かも斯く迄美しい姿を想像し得られやう。

本心に歸つて彼は、驚くの他無い這の事實に、只もうアフロヂテーに祈りをさゝげ、其御惠みを感謝する他は無かつた。

が、斯うなると又フアオンには、其幸福を花咲かせ、他人にも見せて自らの美を樂しみ驚かせ度い慾望が燃える。で、最も好い服裝を函から取り出すと、滴るばかり立勝つた姿となつて彼は先づ父の所に行くのであつた。

「お父さん！」……

老父は驚いて伜の姿を兎見斯う見する。――一切の事を彼は話した。……

若し其聲を聞かなかつたら、さうして、世に有りとしも思はれない異常な出來事を聽かなかつたら、父さへ其何人であるかゞ分らなかつたであらうと思ふ。圖られぬ神の惠みを受けて遽かに美しい子の幸福を悅ばない父はあるまい。神々さへも深い神智を傾けて其創造に成る萬物の愈美しからんを欣ばれやう。老いた海員は、フアオンの上から眼を離すことが出來なかつた。而かも注意して見れば見る程、形のみかは、其性質といひ何といひ、打つて變つて非の打ち所無き完全さは一層父を驚かしめ、斯の如き美を自分の息子に與へながら、矢つ張りフアオンはフアオンに相違なく、何處とも知れず最初の相貌の思ひ出を殘してゐる事は、尙更彼に偉大な神の惠澤を長れ思はせずには惜かなかつた。

「おゝ、惠深き神よ、……」

彼も亦、フアオンと共に且祈り且感謝した。

第五節　サフォーの生立

さて翻つて今玆に、此物語りの女主人公の生ひ立ちの事を述べやうとすれば、勢い雜多な著作に美化され詩化された彼女の眞面目に刀を入れて、幾分の幻滅を覺えしめねばならないのである。

サフォーは決して自然から惠まれた人ではなかつた。身長も低く、何方かといへば色も淺黑いと言つた方で肉體の美しさは迚もその精神のあでやかさには及ばなかつた。

だが、相貌には魂の火が生々と輝く。

形こそ、皮膚の色こそ其詩のやうに立勝つては見えないけれども、爽かな彼女の心は自ら色に出で、現世ならぬ趣が、何とも知れず人の心を擊つた。

幼い頃の事は言ふを止めやう。這の時代ほど興無きは無い。英傑も頑童と變り無いのだから――只一つ、是れだけは是非とも見て居て欲しい。

物皆定かならぬ人の生の夜明け、小鳥の唄のやうにたわい無い子供心のいたいけな年頃からサフォーは愛の母アフロヂテーの領域を判然と〳〵窺き見た。おゝ、彼女の運命の生涯の誤謬は此處に芽を吹いてゐたのか知れぬ。時來れば如何にも悲慘な其奴隷と成らなければならなかつた愛の母の

神園に彼女は足を踏み入れてゐた。——

可笑しく嬉しく、あどけない遊戯の間にも、自らは夫と知らねど既に早熟な好奇の眼を以て、若い男の姿を眤つと見つめる彼女であつた。格闘者や競技者の出る興行などは戀心づきし乙女のやうに幼い其胸をときめかせ、玩是無かるべき境を拔けて、少女時代のサフォーは、夜も晝も人情詩人の作品や、戀物語りを讀み耽り、未だ發育しきらない體にも似げなく、あやしく熟した心が騷いで、人知れず戀する頃のあの溜息を爲るのであつた。可愛いゝ寢息に小さく臥せば、熱病のやうな夜の夢に讀書から得た幻影を描く。

併しまだ〳〵其時が來ぬ。戀神の毒矢が箙から拔かれて、心を射貫く齡では無かつた。彼女は未だ穩かな時代に居た。涙も溜息も、並の人の戀の冒險に對してのみより灑がなかつた。心の糧に貪る果實も、詩や文章を通して受ける甘い慰めより他を知らんのであつた。彼女自ら什麼にか悲むべき戀の生贄に成らうとは、……それよ、彼女自身の不幸な戀が人の涙をそゝるやうなことに成らうとは夢にも〻〻知らなかつたのである。その深刻な苦痛を最後の一滴迄酌み盡さねばならぬ運命に在る自分とは如何して豫知することが出來やう。——

が、運命は、忍び男の足音の如く忍び寄る。

サフォーは最う、人知れず戀を想ふ仄かな望みが、何かしら甚い惡事のやうに考へる齡頃になつた。例へば微溫い春が生れて、薔薇の花が蕚の上に半ば薄紅い唇を開き、朝露の眞珠の蔭に嗽葉を卷きほぐして行くと似て、——

世の乙女等の類例に洩れず、彼女は、格闘者の戰ひや、神祭や公會、人寄せの席に臨むことに深い興味を持つやうに成つた。若い男を見ると彼女の心は、自分にも判然解らない感情が脈打ち、五感が熱を持つたやうに蒸暑さを覺えて徒に心ばかりが躍るのである。花から花に迷ひ飛ぶ密蜂のやうに輕い〻〻自由な心が、物から物へと渡つて行く。

彼女は、外形の差こそ勝れて人を惹き付けることが出來ないけれど、如何にも美しい其氣持に、敏つこく物を捉へる力があつた。さうして、彼女の感ずる情熱は、他の人よりも愈深く、亡ぶべき形に愛を托せず、心の魅力に情熱の泉を求める傾きさへも見えるのである。——彼女は既に或感情を持つてゐた。愛せられるよりも寧ろ樂しむことを彼女は望んだ。されば間もなく戀が、脱るべからざる軛に其身を縛することなどは全で考へも及ばないことであつた。

この時既にフアオンの美しさは但にミチレーネを騷がしたばかりでなく、レスボス島は言ふに及ばず、海を渡つた彼方へさへも傳へられ、例へば見事な月見草が、名も知れぬ小さい諸花を壓して咲

きぼこるかと、照り映へる月の美しさは群星の若者達を色無からしめ、……而已ならず又、何を爲せても人を凌駕する異常な技術、男性らしい力量が、も一つ乙女等の憧れの標的となつたので——

彼ほど勇壯な格闘者は何處にも無かつた。驅ければ鹿の如く最も速く、角力を取れば勝ち、又巧に軍車をあやつり、——競技者達は彼を見て唯羨望するの他は無いのであつた。

女は戀、男は力、——

されば サフオーは屢々這の青年の立派なことを聞いては居たが、彼女は自分の平氣を誇るに躊躇はなかつた。

「妾は決して戀の奴隷には成らないわ。…… 他の人達が什麼に騒いだつて、妾には意味の無い事よ。」——

彼女は自分で自分に言つた。

從つて彼女はさう言つて居る彼女自身が、フアオンの眼から放たれる一と矢に、死ぬ程の苦惱を味はうとは夢にも感じやう筈も無く、儚い自負心に賴りながら、萬一彼が何かの機會で自分に話しかける折があつたとて、きつと素つ氣ない態度を見せてやらうと思ひ決して居るのであつた。

第六節　ミチレーネの神祭

ヘカトムベオン月の新月の日を期して毎年ミチレーネでは盛な女神アテーナの神祭を擧行するのであつた。生贄を獻げたり、色んな儀式、行列などが濟んでから、格闘競技や操練があつて、優勝者には賞を出し、夫がまた何にも增して名譽なことゝされて居るのである。

嚴かな祭祀が擧げられ、古來常例の生贄の火は消え、喇叭が鳴り響て選手が集つて來る。競技開始の相圖を聞くと、是等若い人達の胸は一種緊張した懸念に燃える。第一が千歩競走、アテーナの神殿から競技場迄……投矢の大剛も、よも是だけの距離は投げ得ないであらう。青、赤、紫、各々好みの色取り〴〵に輕裝した屈强の壯者十名ばかり、一列に並んで互々に距離を測り、各身に纏つたマントを捨てると、附添うて來た奴隷が拾ふ。

喇叭の第一聲が劉喨と響く。

吾こそ勝ちと驅けない前から場を呑む意氣は總ての走者の心に充ちて、眼は早や目標を奪つたやう。

ばら〳〵と、一時に弦を離れた彼等は幾分の間か一線を劃いて走る。孰れ劣らぬ隼共は齊輩を拔

く者も無いと見えたが、少時すると眞中を占めた一人の走者が其歩を倍にして列を離れ、あれよあれよと見て居る内、彼に追ひ着く者とて無い。秋來て舞ひ連れる野鶴の群か、眞先の一人、後の一列、其儘の順序が遂に崩れず、彼の一人のみ早くも目標に着くのであつた。其迅さ、走るといふよりも飛ぶのである。割れるやうな拍手の中に、彼は頭髪の埃を拭はせ、額に月桂冠を飾られる。遲れた一列は後方に退り、千歩の競技は斯うして終つた。勝者は誰、――逸走に巧なところから「輕足のアキレォス」と綽名されたテネドスの一市民といふ事で。

此處スタヂオンの片ほとりでは、賑かな樂器を打鳴して、新しい競技に群集を喚ぶ。

見物は蜜蜂の群れ來るやうに競技の場所へと馳けつける。操練場の鐵扉は開かれ、小手脛當に身を堅めた夥しい闘士が孰れも欣悅と熱心とに顔輝かして其處に參じて居るのであつた。

フアオンは未だ現れない。

が、這の競技には呼ひ聲の高い彼でもあり、元より當人は參加の希望に相違もない。群集は大聲に彼の名を呼び、殆んど其出場を待ち切れないと云つた有様である。サフォーも勿論、平常の通り此競技を見物に行つて居たが、餘りにフアオンの呼聲が高いので、何やら氣のかゝる好奇心も手傳ひ、評判と實際とを比較して見度いものよなどと、輕い希望を起してゐる。

間も無く快心の囁きが擴がり、涌き立つやうな拍手が起る。――フアオンの姿が現はれたのである。洵に彼の出場は敵手に取つては言はうやう無き不安を釀さしめるだけ、群集に取つて非常な滿足、這の日格闘の競技を選んだ彼は、奇麗な素足に簡單な鞋靴を無造作に穿ち、金色の帶で胸部を留め膝の邊迄ふわりと垂れる空色のチュニカを着込んでゐる。さうして彼は、

「相手！」

「相手！」

と頻りに呼ぶ群集をば少時にこやかに彼方此方を見廻して居るのであつた。

すると其處に、クレータ島の闘士と稱する人並外れて巨大な漢が現れて來た。直ぐ様身を包む上着を脱ぎ捨て、闘士の習慣に從つて、腰の周圍に只一と筋の帶を殘して素裸になると、燒くが如き三伏の猛夏、炎天を物ともせずして技術を研いた其肢體は筋骨隆々として褐色を呈し、滿身毛に蔽はれた強さうな様は、ヘラクレースも斯くやとばかり思はれる。

間もなくフアオンも、手早くチュニカを脱ぎ去つて奴隷に渡す。白く美しいその體軀は、敵の闘士の節くれ立つた姿とは似ても似つかぬ様ではあるが、優しい中にも何處一つとして闘士らしからぬ所が無く、洵に似合はしい好取組、緊つた筋肉は美しい曲線に僅かに示され、菖蒲の純白に一と

刷毛薔薇の紅を刷いた清々しい頬の上には、朝露を含んだかと柔い繊毛が光り、張り切つた其態度は公衆の心に最後の勝利が必定彼のものだと何とも言へない力強さを覺えしめると共に、這の青年の若々しい美しさに惹き付けられ、是非にも勝たし度いと力が這入り、心優しい娘達は、萬一失策つてもせめて疵一つ負ふこと無く此格闘を終らせ度いと只管念じて居るのであつた。

見るからに膂力溢れる怪物のやうな荒くれ男と、秀麗無比なフアオンと立合つた其樣は寔に興味の津々たるものを覺え、觀衆は這の對照を見守りつゝ寧ろ途方にくれて居る間に、二人は身の位置を測らうと、或は離れ或は靜々と近づき寄り、又は猛然と跳び掛る。吐嗟！　クレータの巨人は猿臂を延ばしていきなりフアオンを引つ捉へ、其儘締付け……否寧ろ締殺さんづ勢ひを示した。フアオンは巧に身を躱めると、電光のやうな速かさで荒くれた腕の下から潜り拔け、うんとばかりに右の腰を押し付くれば、クレータ島の闘士もさるもの、金剛力を出して敵手の締付けを脱れ退く。斯うして二人は新しく各自の位置を測る。クレータの巨人は格闘の初めから、自分と闘ふ事の無謀に近いと信ぜられる這の若年者を、一撃の下に倒してやらうといきり立つて居たのであるが、斯う成つて些か傷けられた自負心は忽ち彼を盲目にし、何を小癪なと思ふ心の中には弱者に對する憐愍の情が何時か殘忍と變じてゐる。で彼は今やじいつと頭を下げ、恰かも野牛の突つ掛かるやうに只一

と突きと跳び掛つた。

フアオンの態度は實に見事なものであつた。突つ掛つて來た敵手の頭を兩手に受け、ぐつと吾が胸に引寄せると、突如その脊に猛襲する。魁偉な體軀は機勢を食つて、撞と倒れざま、頭を土中に埋めたのである。フオアンは格闘術の法則に從ひ其立上るのを待つて居る。みじろきもせず靜まりかへつた觀衆は、眼にもとまらぬ其早業に、思はず爆發したやうな拍手を送り、巨大な敵の醜態にはどつと嘲笑を浴びせかけた。

遽かに立上つたクレータの闘士は、泥土の目つぶしを食つたやうに顏中土砂にまみれながら恐ろしい復讐の決意が燃え上つて、唇を嚙み火のやうな眼を瞋らし、更に格闘を挑まうとする。殺氣漲つた二人の闘士は近づく儘にがつきと組んで、暫時は其儘動かうとせず互に呼吸を測つてゐる樣は、例へば彼の砂塵に包まれた野の神サチリに美しい青年が捕まつた貌――と、巨人の闘士は勝を急いで我慢が成らず、強力に敵を捻ぢ倒さうと、右に左に相手を振る。嵐に揉まれる葦の葉のやう、フアオンは敵に搖られながら、巧に外して倒されず、機會が有つたか右脚を出すと、脚搦みにしてどんと突く。胸を突かれて巨人は撞と、又もや土砂にめり込んでしまつた。颯爽たる姿でフアオンは立つ。

「勝利者!!」

「勝利者!!」

と、狂喜して喚ぶ觀衆に振り返る喜悅に輝いた其顏は、一段立勝つて美しく、クレータの闘士は耻かしげに起上るなり、大勢の酷い罵聲を浴びてこそ〳〵と身をば匿すのであつた。

第七節　花　束

勿論サフオーも群集の中に立交つて這の格闘を見物してゐるのであつたが、フアオンが美しい闘士姿で出場した初め頃から、彼女の心は何かしらわく〳〵して來て、颯と顏色を青くしたが、一としきり經つと今度はカツと上氣するやうに、頰の上には一時に紅み潮して來るのであつた。

彼女は這の闘士の大膽と力量と、其上何とも謂へない愛嬌を混へて居る動作に心惹かれて、自分にも判然しない或慾望が心の内にむく〳〵と頭を擡げて來るのを感じた。闘士の美しさに一層近寄つて見度いやうにも思ひ、奇麗な彼の口元から何か詞でも掛けて貰ひ度い、……神樣が、這麼美しい人に宿らしめた心は什麼ものだか知り度いなど、思ふでも無しに取り止めも無く考へ耽つて居るのである。

彼女の傍には、彼女と一つ所に祭を見に來た妹のドリーラが座つてゐる。ドリーラは中々の美人で而かも熱し易い姉とは違つた平靜な心の娘であつた。内心の朗かさを樂しむ者は幸福である。オリムポスの神々の幸も恐らく是とは違あるまい。神歌を作る或詩人の言葉に從へば、夫こそ洵に神々に近い悅びであり、清らかな山の頂に神集ひ、心ゆく迄天露を吸つて、何爲るとなく安らかな眠

りに入る……とでも言つたやうな平和な平和な心であつた。

同じ血を分けた姉妹で、斯うも性質が異るものか、今やサフォーは燃えるやうな心持で這の格闘を見てゐるが、ドリーラは相變らず靜かに落付いて、僅かに時々輕い微笑が其唇に現はれる位。

「什う？ ドリーラ。……素敵ね！ 實に!!……彼の方こそ、ミチレーネ中の一等美しい青年では無いでせうか……。」

とサフォーは競技から眼も放さずに言ふ。

（ドリーラ）

「夫は然うかも知れませんわ。……だけど、……」

サフォーは夢中、

「ま！ 御覽！ ドリーラ。……彼の格闘振りの輕快さったら。……して、彼の態度の美しいこと！」

妹は感激した姉の詞には應へること無く、靜かに格闘に注意しながら、極めて普通に唯勝負を見極めるだけの好奇心で取組を熟視して居るのであつた。

サフォーの心には、感嘆と心配とが相交錯し、縺れて來た。闘ひのフアオンが敵手の防禦に心急

けば彼女の胸は高く動悸し、彼が有利な立場に成ると彼女は思はず歡びの叫びを洩らす。……遂うく彼は勝つた。彼女は急いで立上つた。

サフォーは最早、彼女を惑はす情熱の虜囚となつて、異常な好奇心が何時の間にやら戀の形になつてゐるのであつた。――立上ると彼女は、吾知らず這の勝利者を喝采するために群集に混つてフアオンの傍に近づいて行つた。……が、未だ單純の乙女心の意氣地無い彼女は、心臓の鼓動の何を意味してゐるかも知らなければ、此やうにして愈々自分の望む瞬間に近づくや、忽ち困惑してしまひ、什うして好いのやら分らなくなつて、唯、理由も無く心配が増し、勝利者の周圍に興奮してゐる群集の間に混りながら、弱々しくテレて、默つて、悄げかへつたまゝ、心の奥の隅つこの方で戀しい懐かしいフアオンの方を熱した眼付で眤つと見て居るばかりであつた。

が、……心の内に焔の如く燃え立つ何とも名狀しがたい感情は遂に彼女を奪つてしまつた。父の家で蓄へてゐた遠慮勝な慎しみや控へ目の垣を破つて、突如として熱中し切つた彼女は、群集の前といふことも忘れたやうにすた／＼と闘士の方に進み出ると、其胸のリボンで結んだ花束を取つて卽座に作つた二行詩を附しフアオンに贈物とするのであつた。

――誰と呼ばまし　うるはしく

雄々しき君を　例へんに。
戀神と見ん　御姿に
アルキーデスの　力あり。——

フアオンは快く花束を受取つた。併し、贈つた人を振り向いて、燃えるやうな其眼を見ても尠しも感謝したやうな表情も無く、洵に止むを得ないと謂つた風に挨拶を返へす許りである。さうして彼は、直ぐさま足を他方に轉ずる。サフォーは情無く耻かしく侮辱を感じて、蔽ひ物を下して其處を離れた。……其途端勝利者はわつといふ喝采と拍手を浴びながら、彼の周圍は花束を投げて躍り狂ふ乙女等のコーラスに埋められて終ふ。さうして軈て、竪琴其他雜多な樂の音につれて歌ふ人達の間を、彼は名譽ある勝利者として審判者の前に進み出ると、審判者は其頭上に冠を置き、目醒しい優勝の賞として白い靄の裝飾ある磨き上げられた兜、並に中央にゴルゴネーオンの頭を彫つた大きな楯を贈るのであつた。——

第八節　晩餐

競技場は未だ喧轟を極めてゐる。さらば吾等は這の物騒がしい祭の場を去り、サフォーの父親スカマンドロニーモスの家へと行かう。

サフォーは、心を籠めた自分の贈物を受取つた彼の人の冷い態度、其詩に與へられた御座なりの讃辭が心に滿たず、其場に居るのも詮らないので、ふいと競技場を立去ると、がつかりした緩い足どりで父の家へと歸るなり、自分の室に閉ぢ籠つて、新しく涌いた苦い思ひに何時迄も〳〵胸を嚙まれて居るのであつた。

兎角する内、夜の食事の時間に成つて、召使の奴隷が幾度も幾度も迎へに來る。遂々彼女も進まないながら席には着いたが、默つて、……嚙ぎ込んで、……食べ物を出しても氣の無いやうに微かに首を振つて、

「食べたか無い……」

と、僅かに口の内で言ふ許りである。

手は胸に、眤つと床の上に眼を落した彼女の痛々しげな樣子を見ると、何とは知らねど心配し出

したのは家族の人々であつた。
「什うした、サフォー、……何だかひどく浮かない顔を爲てるぢやないか。……え？……可愛い娘御に、何か面白くない事が有つたんだな？」
と、スカマンドロニーモスは先づ斯く優しく問ひ掛けた。
彼女は、匿さうとして匿されぬ心の痛みを押へて、
「いゝえ。……何でも御座いませんわ。……平常の妾と同じことではありません？」
「まあ、此娘！……何を言つてるのさお前は」
と母のクレイスは穏かな顔でたしなめる。
「——平常と同じなものですか。……何かしらお前が大層苦しんで居るらしいので、一同が這麼に心配して居るぢやないか。……這麼樣子は曾つて無いことなんですもの……。さ、好いから晴々と氣を持つて、いつもの樣にお前が快活に成つて呉れゝば、斯うして一同揃つて、今晩の食事も樂しく頂けるのですから、ね！」
サフォーは素つ氣無く之に答へる。
「妾の事は御心配無く。……時には氣の鬱ぐことだつて御座いますわ。」

「何あんだつて？」
とスカマンドロニーモスは大きく驚く。
「……什うも、お前、變ぢや無いか。……大變樂しみにして、大急ぎで出掛けたお祭から歸つて來ると、年老つた兩親には碌々親しげな詞も掛けず、……最う早や這の齢で、競技を見に行くわけにもいかない仍供に、見物の樣子を話して聞かせるでもなし、其麼ふさぎ込んで居る事つて有るかいな。……屹度お前は、何か斯う、酷く不愉快な目にでも遭つたんぢや無いか？……什うも、……競技が氣の鬱ぐ原因だとも思はれないし、な。」
クレイスが夫に詞を添へる。
「ドリーラ、……姉さんに何か、厭な事が有つたのでは無いのかい？　言つて御覽、……お前を見れば通常と些つとも變らない平氣な顔をして居るし、……何が何だか私には一寸も見當が付きはしない。」
ドリーラは、焦れて居る姉の苦しさなどは全で氣が付かないやうに、
「別段、なんにも、妾、……存じませんわ」
と言ひながら、一同に御料理を分つ手を休めず、姉にもそれを差出して、

「お食んなさいな、姉さん！……少くとも彼の美しい闘士に、復た御目にかゝらうと思つたら、召食つて元氣を出さなくちやあ……」

と。無邪氣な娘よ！　彼女は、何かしら愉快な話題を見付け出して座を浮き立たせやうとするのであつた。

「姉さんが花束を贈られた時は、それや素的でしたは。……でも、……他の方が後で憎くらしいつちや無い、姉さんの花束を取つて終つたんだけど」

サフォーは急に詞を挿む。

「そしたら闘士は何と被仰つて？」

「別段何とも被仰いませんのよ。唯、につと笑つて其花泥棒を見たゞけ。……」

夫から妾、姉さんが急に御見えにならなくなつてから、彼の方がまだ其女の方と人込みの中にゐらつしやるのを見ましたわ。……妾聞きましたけれど、其女の方といふのは、……何でも市で一番御奇麗といふ評判の方で御座いますつて。それに彼の方も大層其女の方を愛してゐらつしやるさうですのよ。……其麼御話を聞いて妾、姉さんのゐらつした處に歸つて行きましたのですけれど、何時の間にか姉さんが……」

サフォーは魂を抜かれたやうに力無い聲で訊く。

「其方、何と被仰る方？」

「妾、お名前は存じませんわ」

と、ドリーラは無邪氣に答へながら、又新しい料理を姉のお皿に取るのであつた。

サフォーは急に立上つた。さうして眞蒼な顏を今にも泣き出しさうに引歪めたまゝ急いで自分の部屋に驅け込むと、カタリと錠を鎖してしまふ。

ドリーラは呆氣に取られたやうに驚く。兩親は、什うした事かと只はら〳〵して心配すれば、下婢共も、驚いて眤としてゐる。何やら不安な空氣が樂しかるべきスカマンドロニーモス一家の夜食を滅茶々々にしてしまふのであつた。

第九節　ロードペ

幼少の時からサフォーを手に掛けて育てた召使のロードペは最早相當の年配であつた。

あのやうな樣で食事を中絶した儘、閉籠つて錠迄下してしまつたサフォーの居室の方へと靜かに近づいた彼女は、コツコツと穩かに戸口を叩きながら、忠實な、親しみを持つた聲で部屋の中へと呼び掛けるのである。

「お孃さま！」……

が、散々泣き濡れたサフォーは返辭を與へる樣子も無い。

ロードペは辛抱强く、

「お孃さま！……サフオーさま！」

と、勸しづゝ聲を高めて稍强めに叩き續ける。

中からは泣いてゐる聲でサフォーの言葉が聞えて來る。

「彼方へ行つて！　ロードペ……放つといて頂戴！……」

「でも、一すだけ、……お孃さま」

「煩い人！　邪魔だわ。そつとして、……そつとして……置いてつてば！」

ロードペ

「でも、ほんの一す、……ね！　お褥を敷いたり、香水を掛けて上げたり、夫だけでもさせて下さいな。ね、好いでせう。」

這の穩かなロードペの繰返へし繰返へす願ひには、遂ひ〳〵サフォーも强情を張り切れず戸を開けて、老婢を中に入れると再び閂を下して終ふのである。

「まあ、まあ、其麼にお泣きになつて、……お孃さま、什うしたら御愉快に……お氣持が爽ばりなさいますの？……彼麼に悲しさうに御食事さへも御止しに成つて終つて。……悲しい苦しいことが有つたら、私にだけでも打開けて斯うと被仰つて下されば好いのに。……左樣して事の起りを匿されるのは、ロードペは一番辛う御座います。餘り酷いとお恨みも申し度くなりますよ。……被仰つて頂けば、又何か好い御藥も捜されますのに……」

が、サフォーは、吾と吾が膝に肱を突いて兩手に額を支へたきり、一と言も何とも云はず默つてしまつて、ほつと溜息を吐いては啜り涕くばかり、ぽろ〳〵と留め度無い涙を胸に落して、娘の飾りの奇麗な帶を代無しにして終ふのであつた。

傷心しげな這の光景に、忠實な奴隷も慰めかねる當惑の面持で口噤んでは又詞を次いで。

「誰がまあ這の方の、あの輝くやうな嬉しさうな御眼を泪の泉と代へちまつたのでせう。……お一人で泣いてばつかり。什麼神様の惡戯が、貴女を其麼に孤りぼつちに爲ちまつたのでせう。……ねいお嬢さま、ロードペの事を思ひ起して下さいよ。……お幼少い時から此手で抱き上げて御育てした私ぢや御座いませんか。……貴女の秘密をそつと私の胸にだけ御洩し爲て下さいませんか。」

が、斯う言つたロードペの詞は彼女の苦痛を反つて新しくするかの如く見え、遣り場の無い絶望を抱いて立上つたサフォーはばつたりと絨氈に身を投げ出すと、床に顏を推付けて、一と際激しくよゝと咽び入る許りであつた。

老婢は、由無い今の自分の詞が慰めどころか反つて可愛いゝ彼女の悲嘆を增したと悟つたので、默つて彼女の傍に腰を掛け、ほんの一寸した眼顏にも彼女の心を汲み取つて其希望を果さうと氣を配りながら、盡くべくも無いサフォーの泪が稍や收まるのを待つて居る。

一時するとサフォーは沈み切つた眼容をして漸づと起き上つた。が、その眼を見るとロードペには、胸一つに思ひ餘つた若い娘が、苦しい自分の心を察して貰ひ度いと訴へるやうな瞳光が何處かしら動いてゐるやうに思はれたので、彼女を慰め得られる希望が少し出て來たと考へながら、氣に

障らないやう靜かに詞を進めて行く。

「誰でも、お嬢さま苦しい折がありますよ。……苦しい時は、一人できな〳〵思はないで、自分と心配を分つて呉れる友達の胸に傷いた心を打開けて、其考も聽いて見れば、悲しみも和ぎ、氣も落付くといふものです。……獨つきりで其事ばかり思ひ詰めて胸に疊んで置きますと、終ひには什麼藥も役立たないことになつて終ひます。私は齡取つて居りますから、何もかも能く解りますよ……お嬢さんの心の中に這入り込んで、お嬢さんの秘密を言ひ當てる事だつて出來ますとも！……さうして、又、可愛いゝ貴女の事ですもの、私に出來ます事なら、何でも致して差上げます。……ね、お嬢さま、ですからすつかり打開けて私を力にして下さい。……左う！　貴女の思ひ詰めて苦しんでゐらつしやる事を御當てして見ませうか。……御兩親様からは彼麼にも可愛がられてゐらつしやるし、皆なから大切にされてゐる貴女の春のやうな樂しい御心を搔き亂すものつたら……乞度、戀で御座いませう。その戀の曲者が貴女のお眼から、彼の快活な可愛いゝ光を奪ひ取つてしまつたに相違御座いません。……如何？……的中りましたでせう？」

と言つてロードペは獨りで首肯きながら更に語り續けるのである。

「まあ、ねい！……斯うしてお一つ所に居りますと、まだ〳〵ほん子供のやうに思つて、考へも

付かないで居ります内、最う早や戀知る頃になつてゐらつしやるのですもの。……が、大丈夫、若し貴女の御悲嘆が戀の所爲で、他の原因で無いといたせば、夫なら安心、お嬢さま。お癒し爲て上げる御藥は譯の無い事、一番容易いことですわ。……が、何にしても、第一もつと元氣に成らなくつちや不可ませぬ。貴女の考へてゐらつしやる御望みを遂げやうといふのには一等大事なことですよ。……奇麗なお花でも影が差すと色艶が褪めます。沈んだ御顏を爲さいましては、若々しい嬌艶さは代無しで御座いますよ。」

とロードペは、話巧者にサフオーの信用を獲るのであつた。で、漸く彼女の心の秘密が解つたので、老婢は可愛くいぢらしく、微笑みながら若い彼女を搔抱く。

サフオーは、世故に長けたロードペの微笑を見ると、何となく苦い侮辱を受けたやうに感じて、急に腹立たしげに彼女を押退けて拗ねてしまつた。——併し、何と云つてもロードペは、サフオーに取つてはずつと〳〵老巧な、辛棒強い相手であり、其苦しみを輕めて呉れる二人と無い慰藉者となるのであつた。

「御免下さい、お嬢さま。……是は私が悪う御座いました。色々の事を考へて、つい微笑みました事は本當に御許しを願ひます。……夫はさうと這の事は屹度旨い都合に運びますよ。……先づ一番

確かな藥は結婚で御座いますね。……夫は最う貴女、戀といふものは、お望みが適ふとなれば見てる間に癒る病なのですが、若し又這の妙藥に何か邪魔者が出て來ましたら、其時は其時、他に採る道もあらうといふものでは御座いませんか。……成らない戀の苦しさを癒すのに、是程效驗の著しいものはありません。——愛し愛されるといふ事は御嬢さまの御年頃にしては最と易い事で御座いますから。」

ロードペは諄々と說き且說いた。サフオーはじつと默してゐる。彼女はロードペの慰めを聞いたとて、何時の事やら、什う成る事やら解らない手寄りない望みを的に心悅んでゐるのでは無く、寧ろ斯うして現在の苦痛を輕くして貰ふことに唯々縋り着いて居るのであつた。現在の彼女の苦悶は、眞黑な幕に心を蔽ひ盡して終ひ、憂鬱なその幕を透して彼女の眼にはもう何物も這入らなかつた。

斯うして居る所に、スカマンドロニーモスとクレイスとは、サフオーの事を心配して樣子を見に來る。

彼女は兩親に會ふと、心の苦惱を見せまいと、急いで頭飾りを直したりなど身づくろひしながら如何にもなんでもない一寸身體の調子が悪かつた位に極めて輕く言ひ拵へて彼等を安心させるやうに努め、少時睦じい話の後で、スカマンドロニーモスは所用が有つて外出する。ドリーラも其處に

顏を出して、機嫌の直つたサフォーを見て、

「まあ妾、心配したわ、姉さん。……直ぐ御癒りになつて宜かつたこと。」

と、何の氣も付かず無邪氣な心に喜んで、何時もの仕事に姉を誘ふ。サフォーも又、深く包んだ心の秘密を、忠實な老婢の他には覺られまいと決心して、ドリーラの招くに任せ、揃つて仕事部屋へと行くのであつた。

第十節　姉　妹

「出精養心靜者猶操練旺體力」

スカマンドロニーモスは婦人室の戸の上に、金字で以つて、斯ういふ辭句を彫り付けて置いた。サフォーは、這の句の掲げてある事は能く知つて居る事でもあり、普段なら心にも留めずに通り過ぎるのであつたが、屈托した心で、ドリーラの後から此入口を潛らうとして、見馴れた是等の文字を見ると、初めて見るやうに足を停めて眤(じ)つと懸額を見詰めながら獨りごとのやうに讀み下すのである。

「……出精して心の靜を養ふは、猶、操練の體力を旺ならしむるがごとし。……だけど、……仕事に精出したら心の靜かさが得られるかしら……。噫、若し仕事を爲て這の苦しみを弱めることが出來るなら、……妾、……奴隷になつた方が增しか知れないわ。……一等働らかなければならない奴隷は、妾のやうな苦しみは持たない筈ですもの……。」

と恁麼事を考へながら彼女は靜かに閾を跨ぐのであつた。

室に這入るとドリーラは最う始めてゐた。彼女の機(はた)の前に掛けて、朗らかに「アルケアとアルテ

ミス」の詩を唄ひながら、織りかけの美しい織物を織る美しい手と足の動きも輕く、旨く調子の合つた娟かな運動に連れて梭は飛ぶやうに絲の間を往復する。

ロードベは室の一隅に引つ込んで、默々と絲を紡ぎながら、サフォーの顏に明るい表情が表れるか如何かを待つてゐる。

サフォーは平常の通り、框張りした麻布の側に座を取り、筆にも增して巧妙な刺繍の針で花模樣を描き出さうとするのであつた。彼女の前には、奇麗な水を滿々と充たした透徹る瓶に今を盛りの風情ある花が一杯に盛られ飾られてある。——おゝ、夫こそ彼女が格闘に勝つた彼の人に贈つて、思ひも寄らぬ戀仇の胸に挿され、永い悔恨の基となつた彼の花束の花であつた。……

サフォーは、何心無く眼に入つた花に颯と顏色を變へると、眤つと眼を据えて見てゐたが、耐らなく熱い心がむら〳〵と襲うて來て、突然花を引拔いて吾にもあらず、ずた〳〵に夫を投げ付けてしまつた。

美しい歌がはたと止む。

ドリーラは機の手を休めて心配さうに姉の方を振り返ると、

「如何なすつて、姉さん！……また、先刻の癇癪なの？……」

と、徐つと愼ましく訊くのであつた。

ロードベは紡錘を取落して彼女の側に來やうとする。サフォー自身も、はつとして直ぐさま吾にかへると、妹の前で爲たはしたない所業に氣が付いて、惡く惡くしげに花を棄てた感情の激發を胡麻化さうと、

「ロードベ、その花は最う萎れてしまつたから、他の花を持つて來て頂戴！」……

と、立ちかけた老婢に言ふのであつた。

溫和なドリーラは、復た梭を取つて唄ひ初める。召使はサフォーの命令に從つて花を採りにと急いで行つた。併しサフォーは、最早仕事を爲る氣も無く、頰杖した儘深い深い物思ひに沈む。

ドリーラは、ちらり、ちらりと姉の樣子を見るのであるが、機を織る手をば休めず、其惚れ〴〵するやうな唄聲は屈託も無く部屋中に響いてゐる。

——這の宿命の日が來る迄は、サフォーも妹の歌を聞くのが樂しみで、自分も又、よく竪琴の調べに合はしては歌ひ續けたものであつた。例へば涼しい樹蔭に鋤取る農夫が、永い夏の日を鳴き明かし鳴き暮す單調な蟬の聲聞いて、うんざり爲い〳〵終いには、餘りに斷間ない其聲が反つて耳に入らなくなつて悠つくり悠つくり立働いて居るやうに、彼女等は又如何にも乙女らしい美しい歌を

年から年中其仕事場に響かしてゐたのである。

ロードペは新たに截り取つた草花を持つて來てサフオーの眼の前に置かれた瓶に生ける。彼女は暫く花に見惚れて居たが、軈て毛絲を一と筋拔き取つて模寫の製作に取かゝる。が、曾つては眞に氣持好いと思つた花さへ、今日は一向に詮らなく見え、間もなく捨てゝは他の針を選び、絲を替へ絲を替へ種々のリボンで刺繍してみたが、心の惱みに這の仕事も長く續かず、今度は眞珠擬ひの二個の腕輪を拵へかける。併し程無く夫にも呆き、丁度雀の子が落付かない樣に枝から枝を飛び移るやうに直ぐ最う疲れて終ふのである。斯うして彼女は何もかも止めてドリーラの機織る側に來ると、見るともなく平和な其仕事振りを眤つと眺め入つてゐるのであつた。妹も落付かない姉の樣子に氣がついて。

「御仕事熱心な姉さんつたら、何時だつて全一日が一寸の間のやうな御樣子でしたのに、今日ばつかりは、ぽつちりの時間が一世紀にも見えますやうね。……訝しいわねい。一體什うしてゞせうかしら……？」

「神々樣に惠まれた清々しい心で、じいつと落ついて居られる人は幸福ですわ。……其麼馬鹿々々しい仕事が什うしてお前には面白いかしら。」——

ドリーラは靜かに、

「今日はそれや、姉さんに詮らなく見えるらしいとは思ひますけれど……だけど、何ですか諧謔見たいな御詞の意味は、妾にはよく解りませんわ。……姉さん、其竪琴で妾の歌に合はしたら如何」

と言つて彼女は直ちに仕事を止めて膝の上に丁と手を置くと、眼を空の方に向けて「オルフエオスの祈り」といふ頌歌を、素的な節廻しで歌ふのだつた。這の詩は、オルフエオスがエウリデースの後を追つて地獄に行く樣を歌つたもので、ドリーラの聲の美しさは聽く者をして何とも言へない心持を起させ、サフオーも亦、冴えた手で其歌に合奏するのであつたが、彈いて居る内に、戀の對手から殘酷に引き割かれたオルフエオスの悲嘆をまざ〳〵と聞いてゐるやうな心地がして、心ならずもはふり落ちる泪に竪琴を濡らす。——忠實なロードペは這の涙を見て打驚くが、ドリーラは、姉の懊惱にも氣が付かない風で相變らず歌ひ續けてゐる。……

然う斯うして居る中、最早太陽は西の山の端に沓かうとし、細かい仕事には明りが充分でなくなつたので、二人は止めて、ドリーラは母の傍に、サフオーは老婢を伴つて花園の方へと行くのであつた。

第十一節　アフロヂテーの憤怒

夕べ夕べに廣々とした父の花園を逍ろ歩くのは、サフオーに取つて一つの樂しみであつた。花園は、スカマンドロニーモスが色んな記念物や石像などを据え飾つた立派なものであつた。

豐富な果實は枝も撓わに實り垂れ、馥郁とした花の香は四邊の空氣を味付ける。彼女自ら栽培した是等の花は、孰れサフオーが刺繍の下繪に相應しいものばかり、珍しい初の果物は家庭の食卓を飾つて、客は皆夫を耕作つた彼女の手際を褒めちぎり、色んな飼鳥も亦、彼女が興味を持つて育て養つたものゝ一つであつた。

彼女等は茂みの蔭を暫く靜かに歩き廻つた。思ひ入つたやうに彼女は言ふ。

「ロードペ、……花を見ても妾、……些つとも最う樂しみぢやないわ。瀧水を汲んで掛けて遣つたり、……弱々しい莖には支木を副へたり、……其麼ことを爲るのが妾には本當に嬉しかつたんだけど、……今は何もかも呆き々々しちまつて、見ても詰らないし、何とも思はなくなつてしまつたの……ねい、ほら此處に涌いてゐる水だつて、瀧になつたり瀾になつたり、見て居ても氣持が清々したんですのに、……甘い睡りに都合の好かつた彼處の靜かな巖窟だつて、お池の噴水だつて、瀧だ

つてみんな、みんな妾には物悲しげで、孰れ見ても是見ても乾涸びたかさ〳〵の感じばかり、滿々と溢れるやうな充ちた心は、自分には失はれて終つたのだわ。——」

話しながら彼女等は、霧のやうな水沫を散らす噴水がさら〳〵と立昇つてゐる大理石で疊んだ池の緣へと辿るのであつた。水晶の水珠が水面に落ちては消え、すいすいと色々な魚が泳いでゐる。が心の傷めるサフオーは術無げに緣の芝草に座つた儘、ロードペも傍に掛けて、暗ぼつたい沈默を守つて居るばかりである。

軟風は實つた樹々の梢を渡り、咲き崩れた花の上にひら〳〵と葉影を戯がせる。彼女は亂れるにまかせた頭の髪を風に嬲らせながら、除り去ることの出來ない苦痛を暫時免れやうと、水晶を溶いたやうに透き徹つた水の上や、無心に泳ぐ池の魚に呆然と眼を注いでゐるのであつた。

——平和だわ。みんな平和だわ……、自然は何もかも。——

彼女は思ふ。

花は艶やかに露を含み、澄み切つた空氣の清さ。大空は靜かに、鳥はちよ〳〵と鳴いて枝から枝に飛び交ひながら其處に安らかな棲家を求め、あちこちと動く魚さへも、這の池の中に幽閉された氣隨ならぬ身を知らぬげである。

――噫、だが、……みんな其のやうに朗らかに穏かな中で、妾一人だけ凄じい嵐に撃碎かれて居るのですわ。――

と彼女は又更に泪にくれるのであつた。

忠實な老婢は、同情深い詞で彼女を慰める。

「貴女を見ますと、何ですか斯う私は。……勿體無い話ですけれど、自分の娘見たいな氣がしてならないのですよ。……ねい、お嬢さん、どうぞ私に娘と呼ばして下さい。……おゝ私の娘！……

ねい、サフォー、共麼に思ひ詰めては成りません。……も勘うし經てば貴女の戀も、樂しい自然と同じやうになるのです。……永い經驗で、丁と私は承知してゐます。……そして又、永く焦れゝば焦れる程、夫だけ戀に値打が出て來ると申すものです。サフォー、私は然う思ふのですよ。是は屹度アフロヂテー様が貴女を罰してゐられるに相違無い、とね。若し貴女が女神さまの御機嫌を損じたら屹度御罰が有るのですから。貴女は夫を防がうとは爲さいません?!……否、否、第一最う貴女は何でも好いから、アフロヂテー様に生贄を捧げ、納め物をして、よつくお祈りなさる方が好いと思ひますよ。」――

ロードペが斯う言ふと、サフォーは默つて眼を伏せ、額に手を當てゝ眤つと考へ込んで終ふのであつた。

哀しげに彼女は言ふ。

「お前が然う言ふと、ロードペ、妾は疑問でならないわ。……まだ然ういふ事は考へても居なかつた事なんだけど、……ねい！　神さまといふものは復讐をお悦びになるのかしら、……。」

ロードペ、

「おゝ、娘！　神々樣は偉きい偉きい御心で私達人間を愛で慈しんで惠みを垂れて下さるが、御罰を下される時になると、それや嚴しいものなんですよ。……貴女の御幼少い頃の語りを、最う覺えてはゐらつしやらないのですかね。不幸な者の惱み苦しみ、……ほら、タンタルスやシシフエや、チチウスなどの苦しみは、みんな天の御怒りの好い例なのですよ。」

聞くとサフォーは、死罪を申し渡されたやうに戰慄しながら。

「おゝ！　アフロヂテーの憎み！……憎み!!……憎みの怖しさ!!……おゝ、神樣！　妾の苦しみの大きさで、……妾、解つた！……あなたの事が解りましたわ！……憎み！　おゝ！……」

「本當に、アフロヂテーさまの敎儀を疎略にしては成りませんよ！　その信心が足らなかつたり、息子神さまキユピドの御力を侮つたりしては本當に不可ない事ですよ。……彼のニオベが、女神ア

ルテミスさまよりも遙か幸福だなどゝ誇つた爲に、アポロ神の矢で其十二人の子が射殺された事を御承知無いのですか？……ゴルゴネーオンが、其戀でアテーナの神殿を穢した爲に、美しい金茶色の彼女の頭髪が恐しい蛇に變へられました。……タシフアエがアフロヂテー樣を崇め祀る事を拒んだので、女神は彼女を、迷つた野牛のやうに狂氣させたではありませんか。」

「あゝ!! ふしあはせ者！……ふしあはせ者！……妾は、……灼然な女神の怖りに觸れて居るのだは！ 麼う爲ませう、……あゝ！ ロードペ！ 妾は、……

お母さまの仰せで妾は、アフロヂテーさまの祭に庭の鳩を奉納しなければならなかつたんだけど、餘念も無く鳴き遊んで居る小さな犧牲者を見ると、妾は愍然になつてつい其鳥を放して遣つたの！……鳩は、急いでお隣りの森の中に飛んでつたつけ。……今でも妾、判然々々思ひ出してよ。……おゝ！ 今考へても恐しいのは其時、思ひ掛けない、身顫ひの出るやうな雷鳴がしたが、……斯う成つて見ると、あゝ夫は、……這の酷い災禍の知らせだつた！……」

「おゝ、サフオー！ 尙の事貴女は、敵神さまの力に平伏して、宜うく御詫びを爲さらねば！」

と、話の中に彼女等は、大鳥籠に近寄つて來る。其處には、籠を出られぬ哀れな鳥が食用や生贄の爲にと飼はれてあり、今の話の鳩も混つて、軈て訪れる自分の運命も知らぬげに靜かに暮して居

るのであつた。飼鳥等は人影を見ると餌を貰はうと懷つこく、今にも自分達の命を斷つ殘酷な手を恐れ驚くこともなく、あはてゝ走り寄つて來るのである。おゝ、未來を知らない幸福な無智者！……何故、何故、理性を矜る人間はお前達の幸福を味はふ事が出來ないのか！ 肉體の罪惡、道德上の責苦、死の恐怖……總て、々々、豫め蓄へる恐しさが、今の瞬間の平和な歡びを腐敗させ、毒殺するではないか。——

ロードペは、中でも美しい二羽の小鳩を選び出し、サフオーの方に振り向いて言ふ。

「明日夜が明けましたら、私達は這の鳩を持つてアフロヂテーの宮居に參りませう。」

「えゝ。本當に行くは、ロードペ……」

と言つて彼女は、戀の傷痍と天の復讐の心配から身も世も無いやうに泣いて居るのであつた。

心措き無い斯うした話に、心と心とが犇と寄り副うて居る間にも、ずん〳〵と時が流れて行つた。夜の暗さは何時の間にやら深く下し、數知れぬ小鳥の唄に晴々と活氣付いてゐた大空はひつそりと寂靜に蔽ひ盡され、圓い月は、夜の微風の搖り動かす樹葉を透して、ちら〳〵と最う現れて來た。蕭條に物皆を愛撫するやうな其優しい光を受けて、透き徹る噴水は一入美しく銀色を散らす。朗伶な夜の趣、——だが、サフオーの心ばかりは黑い寂寥の幕に包まれ、思ひに沈む頭を垂れて瞳を地

上に落したきり、手は胸に悄々として彼女は歩む。

ロードペは、右の手に彼女を支へ左に鳩を持つて無駄と知りつゝ止め度なく慰藉の詞を語り續けて住居の方へと辿つて行く。

第十二節　その夜

休らひの夜は訪れた。微風はその囁きを止め、野に耕す人は疲れて己が小家に歸り、武夫は野營の夢に武器を片敷き、王者は高殿の奥深く錦繡の床に横はりつゝ鳥は潤へる樹葉の蔭、野獸は森の洞穴に、總ては、々々々、等しく快い眠りに就く。が、サフォーばかりは眼を閉る事が許されない。がつかりした五體を横へては見たが、寢苦しい褥は針の莚か粗金の板か、續け樣に寢返りを打つて見るのであつたが、樣々に思ひ續けては圓かな夢の結びがたく、泣き腫した瞼は泪に濡れるばかりであつた。

部屋の隅には、眠りを妨げぬ程な灯火が細々と青い光を投げ、仄かに闇を照した片影には、老婢のロードペが默々と座つて絲紡ぎつゝ可愛い主人の何かしら御用があつたらと氣を附けてゐる。

遂うゝサフォーも、果てし無い懊惱に疲れ果てたか、何時かうとゝと睡魔の腕に抱かれて、傷心しい悶えにも輕い休養の時が來た。それを見ると老婢は、サフォーに取つては又なく尊い僅かばかりの眠りを妨げまいと、仕事の手を止め息を殺していぢらしげに眺つと彼女を看まもつてゐる。

だが、アフロヂテーの神火に燃えた心の上には、如何にモルフェがレテーの水を灑がうと、亞細

亞の沃野に咲く罌粟も、其火を消すことが出來なかつた。不幸な彼女は遽にふら〳〵と立上り、眠てか醒めてか瞼は半ば閉した儘、幾歩か夢幻に歩き出して、しく〳〵と涕泣の間々に、相手有つて言ふかの如く、切れ〴〵な詞を洩すのである。

「薄倖者！……汝分曉漢！……え！……野蠻人のフアオン!!……噫、……噫！……アフロヂテー樣……お許し下さい!!……」

さうして彼女は咽び泣く。

ロードペは、彼女の放心した樣を見ると、何かに突當つて怪我でも爲ては成らないといふ配慮ひから、そつと近寄つて彼女を支へようとする。——サフオーは醒めた。

近づく人影に幻影は破れ、又しても彼女は現實の世界に引き下されて、傷ましい懊惱の確かさに置き替へられて終ふのであつた。

「……噫！……消えちまつた！　無殘に！……無殘に！……

ロードペ！……徐つと、……徐つと妾、樂しんだのに！　假令まぼろしでも、おゝ！　彼の幸福が苦しみの尠しも消して呉れた！　噫！　なぜ、なぜ、お前は……！　儚い悅びを亂してしまつた……！」

と言ひ捨てゝ彼女は部屋を拔け、自由な外氣を吸はうとする。

ロードペはサフオーの心を測りかねて、一と筋に彼女の身をば憂ひながら走り寄つて彼女を支へた、

「離して！　ロードペ。……何をお前、其麼、心配するの？」

「でもお孃樣！　あんまり御悲嘆になりましては、……」

「好いの。好いの。妾、……默つて空が見て居たいんだから、……ロードペ、自由に爲せて！呼吸の出來るやうにさせてお呉れ。……這麼、這麼、閉め切つた部屋では、息が詰りさうで、餘計妾胸苦しくなるばかりだわ。」

聞くとロードペは、なほも彼女を抱を締めやうと確かり抱きついた腕を離す。離されたサフオーは喪心したやうに、最早や空高く昇つてゐる物悲しげな月光をうつとりと眺めて居るのであつた。

「……おゝ、お月樣！　フエベー！……今も昔もあなたは愛してゐるのでせう。……オリムポスの神の王樣！　あなたは、……戀を棄てることが出來ませず、……常闇にあなたの戀を匿さうと、天界の、あなたの御館から、……こつそり脱れ出て御出なさい。徐つと、默つて、……美しいエンヂーミオンの眠りを見やうとお出で遊ばした神樣！　おゝ！　かはいさうな妾に、何卒、々々、憐愍

を掛けて下さい。……！　妾は弱い人の子、……永久に死の無い神様さへも能うく御存じのアフロヂテーさまの御力に、什うして〳〵、反抗ふことが出來ませう。……」

彼女の溜息、彼女の詞は、音無き月光の浪に消えて、物哀しげなフイロメールは、遠い空から其訴へを反響させるかと思はれる。サフォーは、同じ悲哀を分つと見える月の御答へを聞き度げに、滋々と枝高い樹蔭を見遣れば、風が渡るか其處からも淋しい詩が落ちて來る。

斯うして彼女は、心の懊みを慰めやうと、夜もすがら思ひ沈んで遊ひ歩き、或時は聞き耳を立てゝあらぬ囁きを聽かうとしたり、キンチアに心の内を明かしたり、疲れては芝草の上にぐつたりと身を横へ、思ひ出したやうに輕々と起ち上ると、ずん〳〵大跨で歩き續けたりするのであつた。

何時迄も彼女等は歩む。曉の衣の眞紅の椽が東の果てに見え初めて來て、月影は段々と白く褪せた。

ロードペは言ふ。

「最う明けました、お孃さま。……さあ、アフロヂテーさまのお宮に、昨夜の御話、……よつく御詣り致しませう。夜が明けますとお宮の門は開かれます。」

おゝ！　鳩、鳩、……生贄の鳩！

——美しい女神さま！　這の弱い生贄に同情の涌く妾の心を、何卒々々、不信な者と思召さないで下さいませ……！

ロードペは、ばら〳〵にほつれた彼女の髪を掻き上げて、色美しいリボンを卷いたり、其リボンに被衣を結んだり、まめ〳〵しく彼女のみづくろひを手傳つて遣る。思ふさま風に任せて取繕はず皺づけるサフォーの着物をば、イリスの神の召物も打消すばかりの色をした派手々々しいチュニカに替へ、とゞろく胸を金色の帶に止めて、足には輕げなコチュルンを履かすのであつた。

サフォーの身仕度が終ると、ロードプは彼女の肩からマントーを打掛け、捧げものは下に匿して、共々人目を忍びつゝ女神の社へと連立ち行く。——おゝ！　その社には什麼運命が待つてゐたか？……其朝女神は、惠か、罰か、偶然か、サフォーならでは想像も出來ない欣びと苦痛とを同時に其胸に與へたのである。

彼女等は歩む。——

東雲は仄々と紅を潮して朝の微風は其帳を搔き揚げ、はらはらと細かく顫ふ樹々の葉泄れて、數知らず囀り交す鳥の聲々に曙を祝ふコーラスが起ると、旭日子は誘はれたやうに華やかな最初の光を投げて金色の雲の椽邊に照り映える。……平和な睡りから醒めて其營みに携はらうとする人達には洵に心行く許りの光景であらう。併し酷しくも心傷んだ人に取つては夫れさへ何の價値も無く、萬象の笑ひさゞめく歡びの中に獨りサフオーは物哀しい脚も怠るげに、白露置いた芝草原の花を踏み踏み行くのであつた。

間もなく彼女等は社に着いた。

市から左して遠からぬ其處には、鬱蒼たる大樹の樫が生茂り、見上げる綠の梢を拔いて、神々しい社の破風が上空遙かに聳えてゐる。

夙く最う扉を開いた社の廣い廻廊には、大理石の白い柱が立ち連り、女神への奉納物が夫を繞つて懸け下げられ、禮拜堂では、女僧等の朝の看經が始つて居り、生贄を煮る湯氣の煙は渦を卷きつ

つ長々と天井指して立昇る。

神居ます禮拜堂の下に足を掛けると、サフオーは先づ、何とも知れぬ神威に打たれた。アフロヂテーの女神像の側に行つて、紐で結んだ生贄の鳩を神前に献げ、頭を垂れ、胸に手を置いて彼女は專念に祈願を籠むれば、少し離れてロードベも、同じ形の主人の祈りと合はせて祈る。

（サフオー）

「——おゝ、稜威ある女神さま！　あなたの息子神様の恐しい毒箭、……あなた御自身さへも、おそろしい毒に妾を浸して終はれました。……

世の常の戀の苦しみには、何かしら優しく甘い嬉しさが仄かに混へられます。……それなのに妾は、最初つから戀の苦痛ばかりしか存じません。……不幸な心の上には懊惱の實が撒き散らされました。戀しい彼の方は、たわいも無く妾の手から失はれて終つたのです。……さうして妾は、あなたの點けられた戀の神火に燒き爛らされて、只片思ひに燃えて燃えて居ります。

おゝ、女神さま、あなたは、……

妾の不幸は愈が上にも重くなり、死なうと迄も思ひ焦れる其方には、身姿に、幸せの戀に、厚い々々惠みを御授けに成りながら、あはれな妾には、何の悅びをも惠んで下さらないのです。……

おそろしい女神さま！　何卒、々々、あなたの御怒りを靜めて下さい。……曾つて妾は、……あなたに献げます二羽の鳩を、自分勝手に遁がしました。……お許し下さい！　妾の罪をお許し下さい！……今、此處に持つて參りました。……何卒御怒りを靜められて是を生贄に受納れて下さい！……女神さまが、什麼しても復讐をなさる時には、……這の鳥を身代りに御滿足なさいますやうに……何卒女神さま！　戀の初めの一と歩から不幸の底に落ち込みました哀れなサフォーを憐んで下さい。！……戀する世の中の男女の一番々々不幸な妾を御覽下さい！……」

祈りつゝ、啣ちつゝサフォーは、由無い泪潛々と頰を濡すのである。——

第十四節　奇　遇

ファオンは彼の變身が起つて以來、日ごと〳〵惠深い女神の神壇に詣でゝ感謝の祈を捧げるのであつた。

で、這の日も、サフォーの此處に在るとは知らず宮の中へと這入つて來る。

靜かに彼は女神像の方へと進み、神壇に香を薫ずれば、得も言はれぬ薫かな香いが高い堂宇の中に薫る。

懊惱の樣を人に見せまいと、被衣に身を包んでぐつたりと大理石の柱の下に俯首れて居たサフォーは何處とも知れず漂つて來る名香の薫りに、不圖醒されて思ひに耽る頭を上ぐれば、——おゝ！……夢か？　今も今只管に念じてゐる愛しい闘士が眼の前に祈りを捧げて居るではないか！

餘りの奇遇に彼女は、神の御姿の其處に現はれ給うた如く心打たれて、有難く、嬉しく、羞かしく、

「おゝ、アフロヂテー樣！　何卒、彼の人の心に妾の思ひが通じまして、優しい情の彼の方の胸に涌きますやうに、……！」

と、心の内。

フアオンは、復た新しく薫香を焚いては神壇に祈る。何を？……何を？……女神の惠みの更にもわれに厚かれとか？　それとも又愈が上にもサフォーの悶えを増さうとてか。――と見ればアフロヂテーの神さまは、彼の人の美しさに、更に新しい光を加へたかとさへ思はれて輝くばかりな其姿にサフォーは倦く事を知らず眺め入る。彼女を燒き盡す胸の火は、油を獲て一段朗々と燃え上る。什麼にか、々々々、彼女は彼に近寄り度いと希つたらう。併し遺がに女性の愼ましさは無下に希望を縛り付けた。燃える心を抑へながら、彼女は座を動く事が出來なかつた。

ロードペはサフォーに身を寄せて、香を薫ずるフアオンの姿を指しながら、

「何といふ御美しい姿でせう。……貴女の焦れられるのも、是では成程、……神様だとて首肯かれませう。おゝ、……並々のお美しさでは御座いません。御覽！……アフロヂテーさまは、女神さまが長い間お泣なされたアドニスの美しさを悉く這の方に與へられました。……その方に灑がれる貴女の涙ですもの！……死ぬ事の無い女神さまの御眼から流されたよりも、もつと〳〵澤山に流させやうといふ神樣の、深い思召か知れませんぞ……！」

軈てフアオンは捧げものを爲し終つて、社の彼方此方を見廻しながら、不圖若い乙女を認め、而かも夫が、詩と花束とを彼に贈つた女性である事を想ひ起した。

で彼は、サフォーに心寄せるとよりは、禮儀正しい男として其儘看過されぬといふやうに彼女の方に近付いて、事新しく贈物の禮を述べ、さて即興の詩を賞め讃へては、

「貴女は現實以上に私を御覽なつてゐらつしやいます。あれはほんとうの事といふよりも寧ろ詩で御座いますよ。」

と言ふのであつた。

斯う話し掛けられてサフォーは、戀する者の心躍つて、萬感を籠めた溜息をそつと洩しながら、

「否え、……詩といふよりは、事實で御座いますわ。」――

フアオンは彼女の詞を承けて、

「貴女の彼の詩の表現は、ミューズの神に惠まれた方の言葉です。……あの美しい詩には確かにミューズの感應が御座いますよ。併し現實と申すものは、詩と同樣な性質を供へてゐないといふ事を能く御認めになつて頂き度いのです。想像の乙女は幻想より他見て居りません。是が貴女の、私の爲めに浪費された誇張と過賞の因なのです」

サフォーは、斯うして彼と語を交はす樂さに吾を忘れて詞も判然と、

「戀の世界に於ける貴方の御力は、ミューズの神の詩に對するやうなもので御座いますわ。……誰

にも平等に微笑んでは下さらないアフロヂテーの神様は、貴方を愛し惠まれて居られますもの、……貴方こそ本當に戀の世界に惠まれた御方！」

斯う言ふと彼女は、思はずも口に上つた吾と吾が詞に羞かしくなつて被衣で顏を包んで終つた。

が、ファオンは落ついて、

「夫やさうと、……人生の春の漸く芽生えるか芽生えないといふうら若い貴女の御年頃で這の神様に御祈願なされるといふのは一體什うした譯です。兎に角貴女は、亡ぶべき美よりももつと尊い贈物、……詩作の才能を天から授かつて居るのでは御座いませんか？　音樂と同じやうに、凡ての心を從へ、但に感じ深い人間ばかりか、猛獸や森の怪をも動かすものは詩で御座います。……是こそは實にオルフエオスの力でした。」

「そのオルフエオスこそ妾達に青春と其心持とを示して下さいますわ。……心に深く食ひ入りました熱い思ひが戀しい御方に屆きませんと、オルフエオスの心持がようく解りますわ。……望みの適はない苦しさに何かしら好いお藥が御座いませうか。……」

「それや有りませう。」

「……什麼御藥でせうかしら。」

「戀を受入れて呉れる人には其心を與へ、拒絶する方には止して引退るだけですよ。」

「まあ、……。左う御考へになつてゐらつしやる？……貴方御自身、何方の心をも專斷に遊ばすことが出來ますから、さうした事は容易いと御考へに成るのでせう。餘りに深い女神さまの御寵愛を受けて居られる貴方は、人の世の懊惱を御承知ありますまいけれど、……貴方と等しいアフロヂテーさまの御惠みは餘の人の望み得られない事なのですわ。一度深く貴方を愛しました者は、忘れやうとして忘れることが出來ませんのに、貴方は一つを失へば他の百千を獲られるのです。……斯うして女神さまの神壇に涕泣く者達の不幸を貴方はお認めになりませんかしら。……若しかしたら……多分女神さまは、……最も重い復讐に貴方をお使ひになるのですわ。……」

「私が神の復讐の使者？……おゝ！　厭な役目ですなあ。……私には出來ません。」

「屹度貴方は、御自身が餘りに高過ぎますので、貴方の下に泣いて居る不幸な者を御認めに成られないので御座いませう。……」

「妙な言ひ方を爲さいますなあ。……私の感情も、相當感じ易く細かいのです。……それに大變お褒め下すつたり、何の値打も無い私に近づいて、私の感情を測られやうとなさるのですから……。では、私も判然打開けて置きませう。私は眞面目に愛して居ります。……能く私のために坦々たる

悦びの道を開いて呉れる女神の前でも誓ふことが出來ます。彼方此方と分つことの出來ない私の情熱を私は決して濫用しないのだと御承知願ひ度いのです。」

「アフロヂテーさまの御惠み受けた美しい御姿ばかりか、アルテミスの明智さへも貴方は具へて居られますわ。……貴方は愛してゐらつしやる！……まあ、何て御幸福な方！……して、……その方と申しますのは……？」

「其麼、御聞きに成り度いのでしたら――申しませう。私の心はクレオニーケのものです。さうして、彼女の愛が深い程、一層優しく私はそれに酬ゐなければなりません……」

判然した這の詞を聞くと、サフォーの心は鐵鎚を下されたやうに新しい悲愁に悶えて、苦しげにじつと眼を伏せて終ふのであつた。

ファオンは、餘りに話の長かつた事に氣が附いて、最うお暇を告げやうと、

「や、是は、……愛人の御祈願でもありましたらうに、大事の御時間を潰させまして、熱心なお祈りを中絶させましたのは、どうも心無い事を致しました。さあ。……貴女がたの戀の惠まれますやうに、何卒お續け下さい。私も、初めての格闘に貴女から受けた詩の御讃めに背かないやうに折角努める事としませう。」

斯う、皮肉にも聞える挨拶を述べ、遠慮して離れて居たロードペにも同じやうに會釋して彼は去つた。

感激した眼でサフォーは見送る。

ロードペは、彼との話が彼女の思ひ設けたやうな充實したものであつたか什うか不躾に訊ねる事も出來なかつたが、泪を一杯溜めて被衣を垂れ、胸を絞るやうな新しい溜息を洩らす樣子を見ては不幸な彼女が、又もや苦い毒を飲まされたと察して、默つて、彼女を慰める機を圖つてゐるのであつた。

が、ファオンの姿が見えなくなるとサフォーは、最う神も佛も無く、狂氣のやうに成つて罵り散らす。――

「えゝ！……酷いわ！　酷いわ！　あんまり酷いわ！　酷い女神！……あなたは、……あなたは……是以上おそろしい苦惱を考へる事が出來ます？……あなたは、……戀の……焰を、妾の心に燃えさせて置いて、……さうして、……さうして、……その同じ瞬間に、戀の歡びは、……根こそげ妾に拒みました！……噫、……斯うして妾は、全身を投げ出してあなたに屈服したのを見られて、あなたは、……其最中、……眼の前に戀仇のおそろしい勝利を並べられるとは!!……何て！……何

て！　酷い、……酷い女神、……あなたは、……

彼女は、なほも不敬極まる罵りの詞を續けやうとしたが、ロードペは走り寄つて、

「不幸な御方！……お嬢さま！　まあ落ついて！……假令あなたは、すつかり是つきりの關係に成られましても、神様は、……神様だけは敬はなければ不可ませんよ！　よ！　お嬢様。……什麼、々々、苦しい不幸が有つても、我慢なすつて、……我慢なすつて、憤つてはなりません……。」

「左うよ！　其通りなの！　お前は道理な事を言ふは！……情熱が搔き亂さしさへ爲なけや、……誰だつて、……誰だつて……」

と、又してもアフロヂテーに向つて寵るのである。

「……御親切な女神さま！　あなたも御覽の通りですわ！　情熱が妾の心を盲にします。氣違ひ！　氣違ひですわ！　お解りになりますか！……妾の、妾の這の狂態は、誰でもないあなたのお仕事よ！……最う、妾を苛めるのも是位に停めて下さいな。……どうせ、どうせ、錯亂した心から出る詞なんですから、失禮が有つたら御免なさい！……妾の心を混亂させて悅ばれるあなたは、這の言ひわけで嘸御滿足、……嘸、……嘸、……充分で御座いませう……」

彼女は咽びながらばつたり平れ伏し、漸くにして立上り悲嘆にくれて社を出る。

ロードペは、役にも立たない慰めの詞を掛けながら彼女と連れ立ち悄然として歸りの途に就くのであつた。

ファオンは歸りがけ社の事務に携はる人に會つて彼の乙女がスカマンドロニーモスの娘である事を聞いた。社を出でながら彼は、丁度好い機會でもあり、此際彼女の父に會つて商業上の用務に就いて這の老人と話して見たらと思ひ付く儘、其足で彼女の住居を訪ねる事と爲つたのである。

サフオーは最早父の家へと歸つてゐた。

美しさ竝ぶ者ないお若い方がスカマンドロニーモスとお話を爲て居るといふ大事件が、速くも物好きな、饒舌な女中達の間に擴がつて、評判はクレイスの處迄も傳はつて來る。彼女も亦、豫て聞くファオンの姿を御見受し度いものと、日毎慣習の仕事を止めて、彼等の話す部屋の片隅に席を占め、女中等は蜜蜂の群のやうに塊つて戸口の所に腰掛けてゐる。サフオー自身も彼女連の中に立混つて這麽大騒ぎの因を糺して見ると、又しても思ひ掛けない夫がファオンの來訪であると解つては絶望の苦さから急に明るみに出たやうに、あゝか斯うかと樂しい幻想が一時に涌いて來るのであつた。

――萬一したら、社で妾と話し合つた事から、急に、婚約の御申込みを爲さらうと思召したので

はないかしら――！……

希望に焦る彼女の心は、總てに都合の好い説明を搜す。……あの冷淡な御樣子は？……大方あれは、生な若い娘に對しては、あゝ被成るのが禮儀と御考へに成つて、取り澄して居られたのでせう。さうして彼の方は第一にお父さまに會つて話を進めた方が好いとお思ひなのに相違無いは。……だけれどクレオニーケとの戀仲は？……屹度あの方は妾に嫉妬を起させて見て、刺すやうな詞から女心の秘密を確かめやうとする着想よ。……でも、でも、花束を取られたことは？……あれや偶然だつたのですわ。――

這麽想像をめぐらしながらサフオーは彼等二人から眼を離さず、希望の產んだ、自分に最も都合の好い解釋を下してゐるのであつた。

話が濟んで、ファオンは立上る。スカマンドロニーモスは彼を送り出す。サフオーが出て行くと彼は品好く叮嚀な挨拶を爲るのであつたが、彼女は彼の表情や態度から、何かしら心を讀まうと搜しながら、自分の推測を確かめる詞を待つ。

と、ファオンはスカマンドロニーモスに言ふ。

「是で最う貴方に申上げる事は御座いませんが、お孃さんと少時お話を爲せて頂き度いと思ひます

けれど、お許し下さるなら。」
「えゝ。何卒、々々。欣んで。」
と父の眼くばせに彼女は側に寄つて來る。
其處へ召使が四角い盞を持つて來たので孰れも夫に腰を掛けると、他の召使が花籠に盛つた未だ露つぽいやうに新鮮な旨しい果物を運ぶ。
「さあさ、娘、お前の作つた果物を御客樣に上げて下さい。」
と、スカマンドロニーモスがいふ。
サフォーは、今程愉快な父の仰せを受けた事が曾つて無かつたやうにいそ〳〵と花籠を取つてフアオンに捧げる。フアオンは彼女の瞳を避けるやうに遠慮勝な眼を伏せる。彼女は何かしら氣に掛かつて、もつと判然彼の心を解き知り度い心を籠めて、フアオンの差出す手の美しさや、落付いた態度や表情を脱さじと看守つてゐるのであつた。
「貴女が御作りになつたのですね。實際見事な出來ですなあ。……斯ういふ家庭的な御仕事に御熱心な貴女と御一つ所に成られる方は嘸幸福でせう。本當に立派な主婦の御資格を具へてゐらつしゃる。」

スカマンドロニーモスはフアオンの話を打切つて、
「其麼事はまあ、……いや實はな、今尠し暇も御座いますから、如何でせう一つ貴女の御經驗になつた稀有な事件、……事件も可笑しいがその……アフロヂテーさまが什麼にして這の美しさ、……御親父樣の御自慢なされたのも尤な！……どうして斯ういふ御姿を惠まられたか伺つて見度いものだと思ひますが」
フアオンは稍當惑の形でてれて居たが、夫が又、一層彼を美しくするのであつた。
「いや、お羞かしい私など、神に對して尠しの値打も有りませんのに這の贈物は、只最う天の御惠みと思つて居ります。是とても、多分誰からも愛せられないやうな不幸から、やつと脱れ得たゞらうかといふ微かな希望を持つばかりです。」
サフォーが言ふ。
「惠まれた御方で御座いますわ。……愛の神さまの宴に食される神饌に養はれた方ですわ。……みんな、みんな、苦惱の苦い盃を飲んでますのに！」
「さう被仰れば、……什うやら先刻、愛の女神が貴女につらくでも成されたやうに、何かアフロヂテーの社へ祈願してゐられるやうな御樣子で御座いましたが、……御見受けするやうな清らかな御

姿から判斷しましても、是から花咲かうといふ當の貴女が、什うして其麼重る長の苦しみをお受けにならなければならんのか、殆んど私は了解に苦しみますが……」

サフォー、

「重る苦しみ……！ 此上もない絶望に沈む事は一度だけで最う澤山ですわ。……みんな、後から後からと來る幸福に充ちて居りますのに！……」

スカマンドロニーモスは其話を受けて、

「なに、幸福と、お前言ふのかな？ 幸福だとか不幸だとか皆どうも決り切つたものゝやうに言つて終ふが、世間の人達は、大それた、中庸を得ない望を起したり、思ひ過しの取越苦勞で這の幸福といふものを毒殺して終ふ場合がよく有るものだよ。……それで又、不幸に陷つたら最後、此大事な希望といふ事は忘れて終つて、其處に慰めを求める事を爲ず、只一と筋に思ひ詰めて、萬人が萬人苦い不幸の盃を最後の一滴迄飲み盡したがるのだな。……が、何のために人間の智識で解らない陰微な未來などを考へてくよ〳〵せにあならんのかい。まあ〳〵其麼問題は止めて、アフロヂテーさまの御惠みに與つた貴方の御話を爲て頂く方が餘つ程有りがたい事ですよ。」

で、ファオンは細々と其出來事を話す。話は何の無理も無く、滾々として盡きない泉のやうに彼

の唇から流れ出る。サフォーは其泉のやうな話の中から、如何かして愛の閃きを汲み取らうと希ひ心と目とで話手の總てを見極めやうとするやうに、彼に對する心持をすつかり樣子に現はして、眼はファオンの上を離れず、其一擧一動に結びついてゐるのであつた。

スカマンドロニーモスは眼を天の方に向けて聽き入る。感嘆した老母のクレイスは半分口を開いて注意深く耳傾け、其篤信の心から神の惠みの有がたさに涙さへも零してゐるのである。

話は終つた。席に在る人達はまだ熱心に聽き惚れてゐる。森閑とした幾分かは過ぎて、思ひ出したやうにぱら〳〵と拍手が起る。彼の話の巧みさは洵に其姿の美しさに相應しく、女共は惚れ々々と男子は其態度に感じ、恐らくスカマンドロニーモスは、此やうな息子が天から授かつたらと私かな望みを抱いたでもあらうか。

ファオンは暇を告げて別れ去る。孰れも々々口を極めてその話の面白かつた事を欣びながら仕事に就いた。——ファオンが離れて行くにつけ、段々心の減入つて來るのはサフォーであつた。

第十六節　父の慈愛

召使の奴隷達が散り〴〵に其席を起つた後は、サフオー一人だけ父や母の處に殘つて、今なほ、フアオンから彼女の父に爲したでもあらう或申出に一縷の望みを繋ぎながら、去りがてに其眼を父に向けたり母の方を振り返つたり、何かしら嬉しい詞を待つのであつた。

併し、兩親の顏にも口にも彼女の望むやうな樣子も詞も表れて來ぬ。彼女の幻想は疑惑に變つた。疑惑はやがて怖れとなり、遂う々々耐え切れず彼女は、事の實際を確めるため、稍躊躇した後で、フオアンが父を訪ねて來た用件の事を訊くのであつた。

父は事も無げに、

「なにね、一寸商用上の事に仍公の手を藉り度いといふのさ。……シキリアに船を廻されるんださうで、其事だよ。」……

サフオーは泣き出した。無理にも〳〵耐え忍ばうと思つたが駄目であつた。よゝと彼女は咽び入つて、其纒ひもので顏を包んで終ふのである。

スカマンドロニーモスは這の突然な悲しみに驚いて、穩かな調子で彼女に訊く。

「什うしたんだな、一體？……え？……何で又突然其麼悲しくなつたのか、……何を見ても面白くつて耐らないお前の齡頃で其涙は、……什うも理由が解らない。」——

サフオーは啜り泣きながら、

「いえ、……いえ、……お父さん、……何でも無いんです。妾何ですか急に悲しくなつて、……突然斯う泣き度くなるのです。」

母のクレイスは靜かに彼女をさすつて遣りながら、

「だつて、其麼急に悲しくなる事つてありますかいな。」

「ふーん、……サフオー、お前、なんだな？　匿してゐるな？……好いからお父さんやお母さんに包まずお前の心を打開けた。打開けた。……なあ、何を言つたつて構はん。這麼仍公達が可愛がつて居るんだもの、お前の惡いやうには決して圖らはないに決つてゐる。……話を聞けば又、お前の其病氣を癒す藥も見付けて遣られるだらうじやないか。——」

と彼は一寸口を噤んだ後で、

「仍公の見當が違はなければあ、……なんでも昨日食卓で彼麼に悶え初めた時にも、フアオンといふ名が種だつたやうに思ふ。さうして今又彼の男の話から急に泣き出す。仍公の長い經驗から割り出

すと、てつきり是や、……這の涙の因は、戀だ。それで解つた。最う其お前の泪で、包んだ衣から透き徹つてしまつたよ。さあ、最う早や其麼何にもならない匿し立ては引裂いて終つて、悉皆曝け出した方が好い。默つて居ちや只餘計悲しみと苦痛を重ねるだけだ。さあさ其纏ひ物を取つた。取つた。……」

「妾の苦しみ！……噎！　什麼に妾苦しいか。……誰だつて解りませんわ。……誰だつて、誰だつて這の苦しみは癒されませんわ……」

穩かな父の詞を聞くと、耐え切れない彼女の感情は遂々爆發して其纏ひ物を取り去ると、泪に濡れた淋しげな顏付が露出しに成る。羞かしく、氣落したやうに彼女はクレイスの胸にと身を投げるのであつた。

「確かりしなさい、サフオー。お前は其麼悶えてばかり居ては不可ません。丁とお父さんに自分の苦しみを打開けなければならないでせう。』

と母が言ふ。

サフオーは這の詞に氣を取り直して、格闘に勝つた闘士を見てから什麼に胸が燃えて居るか、心の秘密を述べ立てた。一度發表し始めては、匿さうとして匿されず、縷々として心のたけを訴へる

のである。スカマンドロニーモスは父親の嚴格な態度を取らず、親切に同情を持つて勸忍強く娘の話を聽いて遣る。――若し幸福に運ぶ戀なら夫で好し、不幸な片思ひなら斷然それは棄てさせねばならぬ。――

話が濟むと老父は微笑しながら、

「左樣か、夫や何でもないよ。……一寸した事を大層な事のやうにお前は話すが、……なあに！戀？……殊に若い娘の戀などゝいふものは世間一般有り勝の事ぢやないか。さうして、それが出來ない戀だとお前言ふけれど、其處には又いくらも手段が有る。」

彼女は纏物で眼の泪を拭ひながら、

「如何してゞ御座います？」

「先づ這の情熱は婚禮すれば濟む事だらう？」

「其麼……お父さん、……其麼事を被仰つたつて、彼の方はクレオニーケを愛してゐらつしやるでは御座いませんか。」

「諾、々、知つてゐるとも、知つてるとも。繰り返し〳〵何遍もお前は夫を言つてゐるし、仍公は一言半句でもお前の話を聞き落しては居ないさ。それは解つてゐる。……が、お前は未だ、戀の變

り易い事を知らないのだ。何もまだクレオニーケと彼の男と神壇の前で式を擧げたといふでは無しお前は有りと有ゆる方法でフアオンの心をお前の方に惹き寄せる事が出來やうといふものだ。……

仍公は左う成るやうにお前に敎へて遣らう。何故でも無い。お前はあれの姿に戀を爲るし、仍公は彼の男の氣立の好いのに惚れ込んだのだ。おまけに金持でもあり、商賣の事にかけては中々什うして、若い者に珍らしい傑物で、何もかも幸福な結婚の相手として申分が無い……。」

「おゝ！ お父さん！ ……お父さんといふよりもお友達ですは。」

とサフオーは、父を掻き抱きながら眼には一杯泪を溜めて、

「――妾、初めて、やつと、幸福！」

クレイス

「宜う御座いますね。……どうしても娘はフアオンに遣らなくつちや。……あのやうな方なら私にも合ひますよ。娘の幸福は私達のしあはせ、好い方を選んだと私も鼻が高い。」

スカマンドロニーモス

「が、今假にだのう、……假に言つて見るのだが、……萬一フアオンの話が旨く行かなくつても、仍公の手内にも結婚したいといふ相手は幾らも居るし、此レスボスにはお前の第二の候補者として

選ぶべき立派な青年は澤山居るよ。」

母のクレイスは、可愛くつて耐らないといふやうに、兩手で娘の頭と顎とを抱えるやうにして顏を窺き込みながら、

「さうとも、〳〵、…… 何でもお前お父さんの御詞に從ふ方が好いよ。薄情者に拘づらつて、くよ〳〵するのは馬鹿々々しいやね。何も彼の人ばかりが男ぢや無し、夫こそ容易く。幾らでも優しい夫を探されるのだから、……さうして彼の男を忘れてさ、……」

サフオー、

「厭です、厭です。其麼事厭です。……おゝ！ おつかさん！ 彼の人無しには妾、生きちや居られませんわ。……妾の命は彼の人のものです。妾の命の專政君主……！」

スカマンドロニーモスは笑ひながら言ふ。

「お前は、深い戀の傷手として何時迄も其專政君主を殘して置くのか、な？ 而かも人生の花時にさ。……ま、ま、夫程思ひ込んで、それで死ぬのはお前は成程結構だらうも知れないて。……だがなア、……お前には仍公等のずうと〳〵年寄りに成る迄側に居て呉れなけやならない役目がある、といふ事も考へて貰はにや、な。……お前と仍公等との間柄、親子といふものは左ういふものなん

だ。……それはな、戀の暴君が心の上に巾を利かせてゐる時には、何と言つても其軛は拂ひ退けられないと思ふものだが、仍公等のやうに經驗を積めや、よく解る。……時だよ月日だよ。什麼ものにも打克つ神樣だつて這の時の經過には適はん事が有るからな。」

「外部に居りますれば什麼にだつて考へられますわ。……お父さんの被仰る事は、安全な港に居つて嵐や難船の事を考へるやうなものよ。當人に成れば中々そんな譯に參りませんわ。」

「仍公は水先案内だ。お前の爲に成る事なら什麼事だつて爲るのだよ。夫れや仍公だつて戀といふもののぐづ〳〵になるのは辛捧の出來ん程辛い位なことは知つてゐる。仍公は是から直ぐ此足でフアオンの氣持を糺して見やう。……好い知らせを持つて來たいのは仍公だつて望む所なのだから、兎に角なあサフオー、お母さんと此處で、仍公の歸りを待つて居なさい。」

斯う言つて父は出て行つた。サフオーは不安な心をじつと抑へて、只管好い結果にと儚い望を繫いでゐるのであつた。

第十七節　父の歸宅

恐ろしい戰爭に加はつた、たつた一人の息子の事を思ひ煩ふ優しい母親の心、それでも無い。嵐の海に船出した勇しい夫の無事を祈る若い人妻のそれでも無い。父の歸りを待ち佗びるサフオーの心程、世にも切なるものは有るまい。母のクレイスは色々と彼女を浮立たせやうと努めたが、總て無效、話し掛けて見ても、とつ置いつ父親の齎らす返辭を待つ一心に占められて、彼が現れない限り其餘の事は何一つ耳にも這入らない有樣であつた。

クレイスは最早相當の年齡ではあるが、生涯穩かな生活を續けた彼女は、情熱の嵐に卷き込まれた經驗などは更に無かつたのであつて、善良な性質と言ふよりも、寧ろ彼女の德が彼女を守つたといふ方が適切なやうな女であつた。所が娘のサフオーは、體質といはうが、氣質と言はうが、母とは全で反對に何事にも焦り〳〵して、極端迄身を持つて行かねば承知の出來ない性であつた。善良なクレイスは、平常から這の性質の極端なことを呉々も聲めなだめるのであつたが、サフオーは口を閉ぢて尠しも母の詞に聽き從はない。相變らず氣儘に、何事にも自分の考を通すばかりであつた。今もクレイスは同じ注意を說き來り說き去り、平常の手仕事を始めて見たらなどゝ頻りに氣を變へ

させやうと優しく訓して見るのであつた。

が、たら〳〵と落ちる泉の水の、單調な響に午睡し續ける牧者のやうに、サフオーは、盡きせぬ母の繰り言には殆んど無關心のやうにしてゐる。さうして只、颯と吹き渡る微風に樹々の葉摺れの傳ふかと、不圖歩み寄る人の足音、洩れ來る聲音、僅かばかりの響にも注意深く聞耳立てゝ、最早スカマンドロニーモスが歸つて來たのでは無いかと胸躍らせ、愈々心配がこうじると、立つたり掛けたり、行つたり來たり、驅け出すやうに足を速めて見たりなど、止め度無い泪が徒に顏の被衣を濡らしてゐるばかりであつた。

遂う〳〵待ち受ける人が歸つた。スカマンドロニーモスが戸口に現れた。が彼は、緩い足どりで一と言も言はずに這入つて來る。壓迫するやうに空氣が重い。彼女は其運命の定る返事に心は急いだが、豫感が聞く事を恐れしめるやうに二人は押し默つた儘、不安な顏で暫らく見合つて居るのであつた。耐へ切れぬサフオーは先づ斯う口を切つた。

「とう樣、どうして默つてゐらつしやるの？……一刻も急いで好い知らせを持つて來ると被仰つたのに……。」

スカマンドロニーモスは、がつかりしたやうに隣りの椅子に身を投げて、

「左樣なら結構だが……。」

「おゝ！……お父さま！……不幸な海に妾を置き放しに爲ては厭！……妾は、妾は、餘りによく其海を知つて居ります。」

「……斯うだよサフオー、フアオンは、お前を褒めちぎる事を皮切りとして、お前の心の美しさを切りに嘆賞へる。……夫から仍公が、例の申出の爲に來た事を言ふと、彼の男は斯う言ふのだ。——私は存じて居ります。……貴方をお父さんと呼ばして下さる御親切は洵に有りが度い事でもあり名譽とも心得ます。誰にしても、願つても無い良緣で、幸福此上も無い話ですが、只私だけでは左ういふ譯に參りません。……といふ譯は、本心を打明けて御答へしなければなりませんが、私にはクレオニーケと約束があつて、彼女も私を信じて居りますので、若し此處で貴方の御申出を受け容れる事に成りますと、私は彼女との約束を捨てねばなりません。……夫れは申す迄も無く不信な行動で、さう爲たならば畢竟貴方の御輕蔑を受けるといふ結果になりませう。……どうか是は、他に良緣を求めて下さいませんか。貴方は私のシキリアに行かうとして居る事を御存知でせう。私は父が亡くなつた爲に中絶した商用を片づけ、子としての悲しみの涙を其灰の上に灑ぎ掛けた後、クレオニーケと結婚し度いと計畫して居ります。これが私の、父を失くした悲愁を慰めるたつた一つの

道なのです。人情と義務とを尊ばれる貴方ですから、必ずや私の立場を諒として下さる事かと存じます。――今仰せられの尊い贈物を拒絶せねばならない最も強い、最も正しい理由は是です。――

と斯う言ふのだ。

其やうに事理を分けて言はれて見れば仍公としても返へす辭が無いのでな。……サフォー、這麼悲しみの最中に、父の詞を聴けと言ふても夫は無理かも知れないが、未だ耳に入れる餘裕があつたらよく一つ聴分けて呉れよ。仍公の經驗から話して見れば、お前の心には、じつと抑へ付ける我慢が要る。……前以て言つて置くが、何も仍公は、今無理にフアオンを忘れろと言ふのでは無いぞ。好いか。戀の傷痍の癒るには或時間が必要だとは仍公も考へて居る。……併し氣を取り直して競技に氣散じを爲たりさ、集會に出たりする内には、其處に又、最初思ひ詰めた者に置き代る事の出來る新しい情も燃え立つといふものだよ。……だから此處は、苦しからうが成るべく愉快に氣を取り直ほすやうに、な。――――」

齢老つたスカマンドロニーモスは詞優しく言つて聞かせるのであつた。併しサフォーは父の詞が些つとも耳には這入らない。暗い々々眼容をして、死んだ者のやうに血の氣の無い蒼白さが彼女の顏の上に擴がつた。

さうして默つて、氣落ちして、つと立上ると、正氣を失つて其儘へた〳〵と倒れるやうに元の椅子に落ち込んで終ふ。――――。

父は是を見て、周章てゝ側に寄る。クレイスも次いで驅け寄る。喪心した彼女を見て兩人は聲を揚げて奴隷を喚び、家中上を下へと混亂してサフォーを正氣に戻さうと爲る。漸く彼女は眼を開くと泪を一杯溜めて周圍を見廻はす。兩親も涙を泛べて優しい忠告をするのであつたが、彼女の情熱は極度に興奮して、今は乙女としての愼みの柵を飛び越え、殆んど半狂亂となつて頭髪を搔き拐り着物をずた〳〵に引裂き捨てゝ恰かも致命的な箭を受けた牝鹿の森の中から跳び出したやうに、物凄い眼容をして部屋の中を驅け廻るのである。不幸な兩親は氣もそゞろに心配しながら、一體なサフォーが斯う興奮して終つては、如何に慰藉しても到底無駄なのであるから今は徐つと靜かに爲せて置くより仕方が無いので、當ても無く彼女の爲に藥となるものを待受けつゝ、ロードベに彼女と一つ所に居る事を命じて暫く樣子を見る事とするのであつた。

第十八節　ロードペの勸告

サフオーの曾つて幸福な月日を送つて居た頃は、烈しく照りつける太陽が漸く地平線に其光を投げやうとする頃には、決つて甘い睡りを求めるのが習慣であつた。併し今日は、全で人間が違つたやうに絨氈の上に伏し轉んで

「噎！……どうでも死ねといふのだわ！……妾の命が欲しいのだわ！……死ぬわ、死ぬわ！　死んで憩ひを求めますわ！……。息子の、妻の、……墓石に灑ぐ涙も涸れて、其儘眼を瞑る不幸な人のやうに妾も、妾も其麼ですわ！……」

ロードペは物優しく詞を抑へて、

「まあ、まあ、お嬢様！……其麼絶望なさらないで、……ね、希望と申すものは、最うすつかり消え去つたと思ふ頃に又輝き出すことがちよい〳〵あるもので御座いますよ。……船の難破してあとに漂ふ板切れが命の綱となる時がよく有るやうなもので、暗礁に投り出された不幸な者の一命が助かる事も有りませう。果ても無い海原を漂流して居る時、殆んど奇蹟とでも申しませう、例へば岩の上か何かに、偶然育つてゐる立樹の枝でも遠方から見たとき陸地が近いと覺る事だつて有るぢ

や御座いませんか。……時には又、死人の山の下積に成つて生き殘つた人間が居るかと思へば、又或時は大きな樫の木が落雷で割かれたのに、其下で笛を吹いて居る羊飼ひがかすり傷一つ受けない事だつて御座いますよ。それですもの、何處から芽を吹いて來ないと限つたものですか……唯、死んで終へば何もかもおしまひ！　夫れだけは不可ませんお嬢様。……何でも息の通つて居る間は、勇氣を出して何處迄も運命と戰はなければなりませんよ。

……ね、サフオー。私は考へてゐる事が有ります。貴女もストラトニーケの噂を御聞きになつた事が御座いませう。彼の魔術使ひの巫女は、東門から近い洞窟の奥で、地獄の神々を呼び出すさうですが分けてもアフロヂテーの敵神に當る暗黑界のヘカテーを出すのが得意だと申しますよ。ですから、先づ其無益な泪を收めて、其御神託を聽いて見ませうでは御座いませんか。さうすれば屹度貴女の御嘆きが直される好いお告げが有るに相違無い、出來ない望みも出來るだらうと私や思ひますわ。……其巫女の居る場所も私はよく聞いて知つて居りますから、一つ其ストラトニーケの所に行つて、相談を掛けて見ませう。……」

と、斯うロードペはサフオーを說いて、二人連れ立つて彼女等は不可思議な洞穴の方を指して行く。——

第二章

第一節　クレオニーケの眠り

戀の詭計を欣ぶ者には、フアオンの誠實の餘りに曲無きが慊らぬやうにも思はれやうが、まともな人は誰か其戀を穢し得やうぞ。アフロヂテーは彼に惠みを傾け盡した。詰らぬ巧みや僞りをおのづから超脱して居る彼は、正面に愛する事が出來た。さうして已は、恰かも黄金時代の寵兒のやうに世の總てから偶像視されてゐるのである。其單純さ、吾等には洵に物足らぬ心地して、世に有りとしも思はれない架空の說か神仙談を聞く如く、戀する若人の數知れぬものを、彼にのみ女神は純なるものゝ、滿々と充てる盃を乾させ、爾餘の者には只々苦悶を與へるばかりである。

フアオンはクレオニーケを選んだ。さうして其選擇が又茫だ光明あるものであり、彼女の美しく純なる姿はレスボス島の内外如何なる女も較ぶべき者が無かつた。

永久に仕上らぬ名畫と共にクレオニーケの面影を偲ぶ一つ話が今もミチレーネに傳へられる。

さる名高い畫工が彼女の美しさに心惹かれて、彼女にぞうて肖像を描く許しを受けた。如何ばかり輝く麗人だらうと、畫家は美を見るには馴れてゐる。滴るやうな表情も彼に取つては何物も無い虛心淡懷、只其藝術に精進するばかりである。

クレオニーケに接した彼は、先づ其霑ひを持つ大きな眼を見た。愼ましさと悅樂との相交錯した空色の其眼、嬌やかな、而かも無邪氣な微笑みの上る初々しい唇、其頰の清かさ、眸の涼しさ、……アフロヂテーと同じ形に搔き上げた金茶色の頭髮は、又無く端麗な無邪氣さ朗かさとの含まれてゐる雪白の額の兩側に輕くほつれてゐる。畫工の胸には、何とも謂へぬ惱しさが泌み出して來るやうに覺えた。溫良な謙抑は其身振りに表はれ、彼女は、萬人に立勝つて自分自身の美しさには尠しも心付かないかに見える。瞳も動かず見詰めた美術家は、思はず感嘆の呻きを洩した。

「おゝ、是はアフロヂテーだ……！」

が、如何にも乙女らしい其立居振舞の單純さ、一向に技巧を凝らす心も無く、自然に任かせた其裝身に氣がつくと、

「否、々、……是はアルテミスだ……！」

斯うした感じに吾を忘れて、畫家は注意深く彼女を見ながら、繪筆は更に動かない。

クレオニーケは、ポーズの倦怠で何時とは無しに其眼をねむり、右肱は掛け臺の上に掛けて薔薇

色の片頬を支へ、左の腕は垂らした儘無心な眠りに落ちてしまつた。

輕やかな微風は彼女の美を愛撫し、嫋々とほつれ髪を弄ぶ。

畫家はこの作らない形を捉へ、靜かにしづかに畫布の上に其名筆を走らせる。

――おゝ、モルフエ！　なほ暫時其眼の眠りを搖り醒すな！――彼はこの體勢を描き續けた。さうして今や其唇に曙の色を差さうとした時、……彼女は其眼を開いてしまつた。――――

眠りの腕にかき抱かれた彼女の美しい此繪姿はまだミチレーネに飾られてある。其愛らしい口元は永久に素描の儘に取殘されて……。

第二節　ピチアの洞窟

サフオーとロードペとは夙くも東門の畔を去つて神寂びた其洞窟の在るといふ山麓の森に着いて居た。默々として小暗い蔭を進み行けば、落葉踏む己が跫音のかさこそと陰に籠つて、時に耳馴れぬ野鳥の聲の、一と聲けたゝましく啼き過ぐるにぎよつと立ち竦んで膽を冷せば、あとは一層の靜寂に露の落ちるさへ聞き取れさう。――――

兎角して二人は洞の入口に辿り着く。半開の岩の割目は人一人漸くに通られやうか、ゆつさりと生ひ被さつた蔦の葉は、巫女の煮る生贄の煙りに燻りてか、どす黑く汚れ煤ばみ、身内の寒い物淋しさが濕々と暗い森に沈み、物のけはひの只ならぬに、サフオーは吾と吾が胸の動悸の鼓膜を打つさへ聞き成されてロードペに手を曳かれつゝ、今更愚圖々々と逡巡ぎ退りて洞窟の中に足を入れまいとするのであつた。

常闇の夜の屯する洞穴の中は、元より日光の洩れ入る隙無く、密敎の青い灯火は油煙に光つた黑い岩壁や、ちか〳〵と光る鐘乳石に喪のやうな影薄い光を投げ、有るか無きかの物影の微かに搖ぐあたりには、悲しげな、泣くやうな聲が漂つて、ストラトニーケは此處に不可思議な密敎を奉じて

居るのであつた。人有つて彼女を愕かせば、巫女は俗界の窺知を容さぬ奥深い影に姿を匿し、心から神を懼れ、心から彼女に祈願する者より他には絶えて姿を見せないといふ。若し夫れ不信者が這の沈々たる修驗を亂すを敢て爲んか、言下に彼女は魑魅魍魎を喚び集め、森にうろつく諸々の幽怪姿を現じて彼の不信者を追ひ拂ふとか。

入るに從つてサフォーの恐怖は嵩ずるばかり、年老いたロードペは彼女を急がせ力付けつゝ暗い美路をまさぐり進むに、岩壁に泌み出す冷い水が、ぽとり、ぽとり、と滴り落ちて思はずひやりと衿を冷せば、彼女等は確りと上着に身を包み、ぬるりと滑る苔の細道を注意しながら一と足〳〵に踏み締め行く内、先づ遠くちら〳〵と細い火影が泄れ、近づくに從つて漸く夫が大きく明かに成つて行けば、地の底から泣き咽ぶやうな物の聲も今は判然聽取られて、世にも神秘な祈りか唄か陰森として響いて來る。

細道を出ると嚴窟は洞然と急に濶く、神聖な行場の中央に、ストラトニーケは一心不亂、奇怪な宗教の祈を捧げて居る。が、斯かる内にもサフォー等兩人の近づいたのが巫女の瞳に映つたのだらう、ぶる〳〵つと一つ身を顫はし、

「出て來うぞ、……出て來うぞ、地獄の力！　汝等、常闇の劫夜に逍ふ魔物の群よ、早う出て來せ

居らうぞの！……來せ居つて、穴にうろつく女等が、柄にも無う圖太うて、這の廷を穢す惡企みなと持ち來たのなら、魔神の力で早う亡いて給もやい、給もやい。」

と氣味惡い聲で言ふかと思ふと、咄嗟、ピチアはつと起つて、眞黒な杖を押頂き、くる〳〵〳〵周圍に斯う一、二、三、大きな輪を三つ畫いたつけ、何とも不可解な呪文を靜かに唱ふれば、遽かに轟々と地面は激しく鳴り動き、地獄の泣聲か、啾々とさも傷心しげな聲々が何處とも知れず洞一面に滿ちて來る。

怖れ驚いたサフォーは、餘りの事に聲も得立てず、ぞつと身の毛のよだつを覺え、今にも山が崩れて來て彼女を碎くかと物凄く、犇とロードペに縋り着く。

が、ロードペは巫女の方に振り向いて、

「恐しい〳〵ピチアさま、貴女の御威勢に從ひまする。……御願ひ、御願ひの筋があつて、御目障りな私共は、只御願ひに參つた者、……たゞの祈願で御座りまする、斯うして只二人、怖れ〳〵て恐しい貴女の神壇の前に罷り出たので御座りまする。惡い者では御座いませぬ。何卒其恐しい業を御止め下さいませ。……只管に貴女の御同情を願ひまする。……」

物音はぴたりと止んだ。

彼女等の屈服が判然解つたストラトニーケは恐しい其顔容をやはらげ、殆んど相貌の分らぬ迄額に肩に振り亂してゐた頭髪を搔き退け、取りつくろつた姿を見れば、是は又、其端麗さ壯嚴さ、彼女等は思はずも眼を瞠つた。齡の頃、最早人生の夏ながら、昔偲ばれる其美しさは、曾つて美術家のモデルと爲れた事も有らう。モデルと成らばパラス・アテーナの女神像か、或は大女神ヘラの姿として寫し取られた事でもあらう。……サフオー等の、願ひが有つて來たと聞くや、巫女ストラトニーケは、まだ地獄の鬼の煙立ち散るかと思はれる眞黑な其上着を取り去り、眞紅に椽取つた白いチユニカを身に纏うて、晴々しい額で彼女等の前に進みながら、

「見ず知らずの其方達、最うはや、何も怖しい事は無いぞよ。……信ぜぬ者には神は激しく恐しいけれど、信じたらお優しい神々じやで。——」

餘りの恐怖に小さくなつてロードペの上着の後に匿れて居たサフオーは、此時やつと被衣を除けてピチアを熟視する事が出來たのである。ストラトニーケは彼女を見ると、

「おゝ、其處な若い娘！ 其方ぢやの願ひの筋を持つて來たのは。……此處ではのう、星の運行を測つたり、人相手相を讀み取る要が尠しも無いぢやて。……一と目見たら人間の心を洞察くぞよ。其方が此處に來た目的は聞かいでも最う解つてゐる。辛い恐しい思ひを爲て這の無人の洞穴迄入り込

んで來るからには、必定そなたは戀の力に打克つ事が出來ない爲願掛けしにきたので御座らうが？」

サフオーは默つて眼を伏せ胸は微かに浪打ち初めた。這の不思議な洞窟や、豫言的の占ひや總ては驚くべき事ばかりである。ロードペは彼女の代りに口を切つて、

「おゝ、神のやうなストラトニーケさま、……貴女の前に居りますのは、サフオーと其の奴隷に御座りまする。サフオーを苦しめる情熱の事は貴女は最う御承知でゐらつしやいます。……だが、申し上げます迄も無く、斯うも不幸な失望の淵に沈んだ彼女にも、救ひ出される道が有らうかと存じまして、……。戀の惱みに陷つた女達は此處に參つて祈願なさると聞きましたが、其中でも取分け不幸なサフオーです。貴女は何も御承知、……御承知で、……」

「最う澤山ぢや。知つて居る者の前で繰り返し述べる要が無い。……手をお出しやれ、サフオー。」

威壓するやうなピチアの聲と、命令するやうな其身振りとに射縮められて、恐る々々サフオーは手を差出した。巫女は右の手に炬火を翳し、左にサフオーの手を握つて、嚴しい眼をして眤と彼女を見詰めて居たが、軈て陰鬱な顏をして額を檢し、暫く默々と眼を閉ぢた後、豫言者らしい愁みを湛へて唄ふとも無くお告げを誦する。

「戀の差別の餘りにも

酷しきを吾は知る。
悲し乙女よ、呪はれし
暗き運命にさすらへる。――」

第三節　水　占

聲高に神託を誦する巫女の聲が陰々として巖窟の天井に反響を起すれば、サフォーは眼を据え這の聲一つに注意を籠めて聽く程に、短い詞に秘められた復雜な意味が、詩よりも深く彼女の心を動かすのである。……如何なる事情もストラトニーケには見遁されはしないのだ。――彼女は思ふ。

「おゝ！　婦の中で最も明徹な智慧を具へた御方！……貴女は最う、妾の不幸の全部を御存じでゐらつしやいます。……貴女の聰明さと同樣な博大な御同情が御座いましたら、何卒ストラトニーケさま、這の悲しい耐え忍ぶ事も出來なければ、癒す事も出來ない妾の傷痍を御愍みの眼で御覽下さいませ。――」

サフォーは睨とピチアから眼も離さずに、熱心を詞と態度に表はして懇願する。

巫女は言ふ。

「おゝ、娘、……今吾に感應した慈悲を其方に與へやう。願ひの筋はすつかり聽き屆けて遣はすぞい。……が夫には先づ前以つて其方に訊いて置かねばならんが、此處に二つの方法が有るのぢや。……其方が焦れる冷い心に戀の焰を燃させやうか、それとも其方の火を消さうか、……熱れを其方

は選ぶのぢやな？……」

「おゝ！ 何と仰せられる。妾の望みを達するか、這の苦しみを忘れるか、どちらを選ぶと仰せられますか。……ストラトニーケさま、申す迄も御座いませぬ。後の、……後のを選びます。アア、ですけれど、何故、何故、悉く知つて居られる貴女が、妾の心に充ち々々た願ひを一と筋に最後迄適はして遣らうと被仰つては下さらないのでせう？……おゝ！ 左うです。什麽永い什麽酷い生涯の苦しみに代へましても、思ひの屆く只一瞬の幸福が獲られましたら、妾は夫を選びます。……」

「ふーん。……」

ピチアは寧ろ懸むやうに眤つと見詰めて首を振つた。

何といふ情熱の深さじや！……其苦しみの全體を吾は能く知つて居るのじやが、……其處迄酷く戀に狂うて終うたかいのう？……傷心しや〳〵、泪を一杯溜めて御座る。這麽愛しい眼々に楯突くつれない人の心を碎き軟めるのは吾等の仕事じや。……が、先づ夫を爲る前に、オリムポスの神々の思召が什麽じやか、一つ伺ひを立てゝ置かねばなるまいかの。」

と言ひながら彼女は、片隅から透明な壺を取り出し、洞の奥から流れ出る眞水の神に夫を棒げ、次で恭々しく、まだ煙立てる神壇に暫時供へた後、きら〳〵と輝く水を倒にして颯と灑げば滋々と

音して神火が消える。すると彼女は、又新しく水を充して神壇につと据え置き、す、すと退つて一拜するや、態度も急に改り神の名に依つて話す如く嚴かにサフオーに命を下す。

「其手を壺に泛べるのじや！」

サフオーは何やら物恐しい不安に襲はれ、從はうか、從ふまいか半ば手を出し半ば引きつゝ吾にもあらず躊躇へば、ピチアは忽ち腹立たしげに急き込んで、

「愚者！ 汝這の洞穴に來つて神德を穢し奉るか！ 神の詞に從はぬとなら、一歩を此處に踏み入れる前、踏み止まらねばならないのじや。一と度洞穴に足を入れなば悉く是神の配下、穢すな、不信者！ 穢い!!」

百雷のやうな怖しい叫び聲に、ひたと平伏したサフオーはロードペに薦められて恐る々々壺の中へと手を入れるや、怪し、怪しの水はくら〳〵と煮え沸つて、幾干も無く其手は宛然熱湯に浸した心地がする。彼女は呀つと聲を立てたが、夫は熱湯の苦痛よりも寧ろ驚愕の叫びであつた。

が、ピチアは嚴かに、

「吾は其方の心の傷が如何ばかり深いかを見屆けた。……おゝ！ 執念深いアフロヂテー！ 何といふ火を彼女の胸に焚き付けたのじや！……だが又女神、何をお前は其やうに腹立たれたぢや！」

と彼女は再びサフオーに向ひ、

「……不幸な娘！ 今は、悉皆吾に話さねあならぬのじや。言はねば是は、神々の思惟に行き着く事が出來んじやで。」

恐懼したサフオーは、曾つてアフロヂテーの社に生贄すべき庭の鳩を女神の神には捧げもせず其儘遁がして遣つた事、不幸な其戀、女神の復讐が涙の因と成つた次第を細かに物語るのであつた。

闇のピチアは一入暗く顔を曇らせ、額に深い皺を刻んで地上を見詰めながら彼女に言ふ。

「天の怒りの畏しい結果は、神々の保護に據らないでは亡ぼし破る事が出來んのじやよ。吾の力は人間の心の中に自然と起る情熱を昂め、若しくば弱める事は出來るのぢやが、一段高い處から涌いた情熱や、神祇の業と有るからは、到底も及ばぬ所ぞい。其方の戀は他の神々の力を藉らねば變ずる事が出來んわや。アフロヂテーに呪はれた其方は、他の灼然な神の惠みを得られるやう努める他は有るまいぞよ。」

サフオー、

「おゝ、什うしませう！ ……如何なる神の神威だとて、總ての自然をお統べ遊ばすアフロヂテーさまに抗ひ得る其やうな力が何處に御座いませう！」

「否々、娘、其方はそのアフロヂテーに及ぶ力が世に無いと思つて御座るのかや？ 何、……有るじや。德の領域は何で力が弱いものかい。德の力こそ慾望と誘惑とを縛るものじや。夫こそはアフロヂテーに打勝つものじやよ。女神を負かすたつた一つの榮光が有つて確かなものは這の德を措いて他には一寸あるまいぞよ。」

「ですけれど、……教へて下さい。妾知らないのです。……恐しいアフロヂテー樣は、這のやうに人間を打從へて居られますのに、何故神々樣をば洩れ無く服從させないので御座いませう……。おゝ、ピチア樣！ 弱い妾をお許し下さい。貴女が仰せられる更に尊い神樣は何處に在すので御座いませう。……妾は、妾は、知らないのです。」

「その神樣は、其方が考へるよりももつと〳〵勢優れて居られるのじやが、這の神樣の御座る所はオリムポスだけで、他には居られない。……神々が、同じ秤器に德と歡樂とを掛ける時には皿の一方は天に上り、片方は地に落ちるぞよ。」——

斯う物靜かに語る間に、巫女は急に身の丈が見上げるばかりに偉きく見える。恐らく夫れは、一段高い神の力が、彼女に移り彼女を使つて一層深い密教の導師として無明を照さしめる爲では無いか。詞を切つて彼女は默した。

が、サフォーは、嚴かに且不可解な其語の意味をもつと明かに知り度いので、

「もつと、もつと、ピチア樣、何卒お終ひまで敎へて下さい。弱い人間に智慧の光を垂れて下さい！」

と言ひつゝストラトニーケの膝を抱くのである。彼女は這の敬神の樣を見て、

「起て、起て、娘、……好い娘、……それではの、最も賢明な敎を其處で受けられい。よう聽け！……其方の心が戀に燃へたら夫れこそ敵の贈物ぢや！……その誤つた悅樂よりも永久にして純な歡喜を其方は選ばねばならぬてや！……

宜し、宜し、それが解つたら其座を起つて、新しい神占を受ける勇氣を奮ひ起さうぞ。大方天は吾の舌に新しくお告げを下さる事じやらう。」

サフォーは聢りと上着に身を包み、水晶の柱と懸る瀧水の一つに脊を向けて神壇のピチアに眼を定める。忠實なロードペは、這の密敎の行場に在つて、終始離れずサフォーに侍しつゝ信心深い態度で胸に手を載せ眤と看守る一人であつた。

第四節　魑魅魍魎

サフォーは、神々に反抗するの心配と、心の痛みを輕めて貰ふ希望との、其二た道に酷く迷つて居るのであつた。

ストラトニーケは靜かに〳〵瞑目する。恰かも夫れは、嵐の將に到らんとして天地先づ眠り、姑く力を養ふが如く見えて居たが、果然、果然、——遽かにピチアは狂へるやうに威々しく、沈靜を破つて夢中になれば、頭髮や衣は亂れて逆に卷き昇り、力有る片手には不可思議な男根の型を握り、頭の上をぐる〳〵ぐると稻妻の如く目にも留らず、勢込んで振り廻した後、器の尖端を地に向けて床上に圓形を描くのである。……と見れば、彼女は中央に彼の男根を置き凄い聲して呟く如く魔法の詞を述べる內、再び大地、震動し、空は轟々と鳴り渡り、消えてゐた神壇の聖火は自らぱつと點つて、玉成す如くもく〳〵と立昇る煙の中から、透き徹るやうな怪しい小人の姿が現はれ、肩の邊に翼を生じた若人と見える其形は淸らかに眉目好けれど、何處やら凄く嚴めしく、薄闇の中に見る〳〵大きく延びて行く。

サフォーは其處に現はれた物怪の愛らしく美しきに惹付けられ、ピチアの奇蹟に驚きながら、そ

の幽體に懇願しやうと伏し拜む。と、件の人影は吸はれるやうに再び黑煙の中へ沈んで行くと、忽ちにして頭は獅子、體軀は牛、尾は蛇の恐ろしい魍魎と成りて立現はれ、其缺唇から火焰を吹くに、二人の女は「呀つ」と叫びを立てた儘、心は恐しさに凍りついて終つた。

が、夫も一つ時、這の物凄い怪獸が搔消す如くふつと消ゆれば、今度は其處に、翼を着けた一人の騎士が、眩しいばかりに裝甲はれた不思議な駒に跨つてつゝと現はれ、甲に靡く鬣は嵐に搖るゝ樹々の芒先か、長くゆら〳〵と浪打ちて、暫時斯うよと見て居る內、一と鞍せめて洞の入口に突進む。——サフオーとロードペは怖い物見たさ、駒の足搔きの行く儘に振り返りざま眼を移して憂々といふ蹄の響き、騎士の聲迄明かに聞いたと思つたが、日差しに消える雲より輕く、何時か消え失せ痕も留めない。

あなやと見る間に這の度は神壇の方に物凄じい喇叭の音が響くので、又思はずも眼を向けると、其處に恐しい龍身在つて、鱗を逆立てのた打ち廻り、口から鼻吼から吐く息悉く火焰と成り、息差し荒く四方八面瀧水の如く吹き散せば、喇叭の音は焰に吹き込まれて陰に籠つた凄慘な響を立てるのであつた。

サフオーはぞつと戰慄して被衣に顏を匿しロードペ共々、きやつと叫びを揚げると同時、ピチア

は魔杖を振り上げて撥止とばかり擊下せば、神壇に灯點り蛟龍と見えた怪物は額にミルトスを戴いた眉目秀麗な乙女に化身し、胸高に締めた一と筋黑い帶の他は透き徹るやうなチユニカを着けた其端麗さ神々しさ。——————

サフオーは是こそヘカテーであらうと思ひ平れ伏し拜まうと爲る間もあらせず一瞬幻は消え灯影は滅し、名狀し難い蔭深い聲が、ほそ〳〵呟いてゐるやうに思ふと、軈て段々夫も遠退き、總てが元の靜寂に還る。

サフオーは只最うわな〻きながら、ロードペの着物に獅嚙み付いて、

「おゝ！　何といふ奇蹟でせう。……ピチアさま！　賢い魔術使ひの方！……妾の眼、……妾の心は、おそろしい這の現出に堪へられませぬ。何卒怖しい術を止めて下さい。……」

「弱い人間！　吾は今、此上も無い穩かなものを、恐しい間に混へ入れて、和らげながら見せて居るでは無いかや？……豪膽無比な勇者でも、顏蒼うして顫へるやうな凄じい地獄の光景を其方に見せやうとは思はんじやが、宜う見たか、今現はれた地獄の女神はの、大罪有る者を愕かす使命を帶びて居るのじやぞい。」

「おゝ！　何故、何故、貴女は、……惠みと同情とを求める者に、あのやうな恐しい姿形を御示し

に成らねばなりませんの？」

「神々の力を示すのじや。」

語りながらピチアは、肩と頭に眞黑い上着を擴げ、不可思議な文字で記された秘密の經卷を神壇の灰に安置して世にも奇怪な九字を切り、魔界の呪文を呟きながら、丁々々！　地を擊ち經卷を擊つ事少時、ぶる〳〵と身を震はせながら待ち受けるサフォーの方に向き直つて、神憑りした聲嚴かに、

「……うゝ！　不幸な女！……致し方無き者よ、汝!!……おゝ！　滅すべくも無い其焰……!!」

海の浪……レウカス……！

須く、行つてアポーロの聖僧に圖れ。……遙か上位の或力が、吾が唇を封じたのじやわ！……終ひじや！　早う這の洞窟を出い！　是以上吾に訊ね、わしを見るな！……」

言ひ終ると、サフォー主從を殘した儘、忽焉としてピチアは消えた。――――――

慰藉を求めて來たものを、慰めになる詞も無く、解き難い謎の神託は彼女の憂慮を一入深く增すではないか。

無人の浦に投り出された難破者とても、恐らくサフォーが這の神託を聽いてから自分の運命を顧る不安に增した不安はあるまい。

段々と氣も收つた彼女は、悄々と立ち上つてロードペと共に賴み無い歸途に就くのであつた。

眞闇な巖窟を出ると、光が眩しく其眼を打つ。清らかな空、澄んだ大氣、無數の鳥の囀ひ交す美しい景色は、遺に彼女等の不安と苦惱とを和げたが、なほ默々と俯首した二人は力無い足を運んで家路の方へと辿つて行く。

第五節　深夜の家出

戀の傷痍に藥はない。心の慰安、高遠な哲理、――總ては餘りに力弱い。如何なる英傑、神人も戀には勝ち得ぬためしなるを、如何なれば愛の女神は、風にも耐えぬ纖弱い乙女に燃え盛る情火を煽り、只ならぬ手段、怪しき力もて彼女等を惹き寄せ斯く迄苛まねばならないのか。

父の家に歸つて、サフォーは又更に其身の苦患を募らせる傷心しい問題に直面せねばならなかつた。スカマンドロニーモスはファオンのシキリアに發つ事を語つた。クレオニーケとの結婚は最早寄り々々準備を爲れてゐるので、一日も早く婚儀を擧げるため、先づ商用の解決を急がねばならないといふのであつた。スカマンドロニーモスは父の慈愛から、如何にもして、遂げ得られない情熱を彼女の心から驅逐するやう諄々として說き訓し、ファオンに代る新しい戀に彼女を導かうと努めるのであつたが、眞の戀は如何なる慾望の滿足も是を變へる自由が無い。サフォーは靜かに父の話を聽き、自らも其永い苦しみを脫れやうと焦つたが、情熱の泉は容易く堰き止める術も無く、父との懇話は夜に入つて猶ほ果てんともせず、更け行く月は早や中天に懸つて人の睡りを誘引ふ如く、萬籟死して聲無きに到つてもサフォーは左うして自分の苦しみを語られる事が痛々しい悅びのやうに感ぜられ、何時迄も〳〵生々しい傷痕を新に掘つて居るのであつた。

斯うして陰氣な食事を濟ました後で孰れも其部屋に退いて安らかな眠りに就かうとするのであつたが、彼女は安眠が出來ないだらう。――おゝ、不幸なサフォー！　お前の不幸は千言萬語叙べ盡す事が出來ないが、少くともファオンに會つたら、幾千か心も休まらう。……幻影の消える事もあらう。彼の人の婚儀とて未だ日が定つてゐるわけでも無いのだから。――彼女は自分の心に言つた。

道理を籠めた父の忠告は耳にも入らず、彼女は思ひ詰めた決心をする。――スカマンドロニーモスと話す内にも彼女は、ファオンの後を追つてシキリアに行く事を願つて見たが、勿論老父は、考ある父として其やうな無我夢中な娘の願に贊成をする譯も無く、其希望の到底容れられない事を知つたサフォーは、奇怪なピチアを訪ねた事も、彼女が最後、其苦痛を靜める爲にレウカスに行くべき事を豫言した彼の暗い神託も、一切秘して父に語らず、私かに自分の計畫を實行しやうと決心の臍を固めてゐた。

居室に籠つて彼女は忠實なロードペを喚んだ。

「ロードペ、……妾は、妾だけで家出をするわ！」――

斯う言ひ放つと同時に彼女は、手で顏を蔽うて突つ伏して終つたが、夫から漸くにして起ち上り、

豫々父から貰つたお金や、彼の時以來彼女の苦惱を宥めるため優しい父が度々與へた贈り物を彼是と取揃へなど爲る。

ロードペは、什うにかして彼女を思ひ止まらせやうと色々に骨折つて見るのであつたが、その決心の動かすべくもあらず、總ての忠告も無駄とあつては止むなく今は、自分も共々サフオーに從はうと準備し、二人は、特にサフオーに心服してゐる男の奴隷を徐つと起して、自分達の旅立はスカマンドロニーモスの許しを受けて居るやうに言ひ拵らへ、尙一人の馬丁に申付けて密々庭内に馬車をひかせる。

夜は靜かに、月の軟かい光が一面の銀色を降らせる花園に、駒の歩み、車の響きを忍ばせつ、家中の眠りを妨げない爲にと音を偸んで荷物を積み載せ、軈て三人の主從は、轍の痕を花園の砂に留めて私かな家出の途に上る。月光を浴びて紆々と地に印せられた二條の痕、……

お〻娘に棄てられた不幸なスカマンドロニーモスよ。なんにも知らぬお前は靜かに〳〵寢んでゐる。併し夜が明けたらお前は、花園の朝の空氣を欣びつゝ平常の如へ漫歩きもするだらう。——さうして其處に、蛇の形に延びてゐるお前自らの不幸を讀み、又更に娘の不幸を嘆き悲まねばならないであらう。

第六節　船出

黎明の微風は美しい日の朗かさを報らせ、勇める駒は其鬣を振り動かしながら轣轤と車を輓き持つて行く。が、ロードペとサフオーとは深い憂欝に包まれ、殊に、不幸な奴隷よりも幾百倍も不幸なサフオーは、最早半分死んだ人のやう、始んど無感覺にさへも見える。

急ぎに急いで行く程に、早や既にミチレーネの都近く、港に着してシキリアに渡る船頭と料金を定め、三人は馬丁を殘して車を捨つれば、帆は張られ船はする〳〵と辷つて行く。——

太陽の運る途へと薔薇を散らす曉の光は、順風に漣立てる海に照り映え、月影は漸く淡く、總ては多幸な航海を約束する。風は帆に滿ち、船は燕の空中を割つて輕やかに身を翻へす如く浪に乘り浪を轉して速かに、不吉な暗礁に遭ふ事も無く航し續ける。——

× × ×

太陽は一と際高き山の頂に先づ紅を染め、瀧成す光の放射を束ねて燦爛と空中に投げ滿たす。

スカマンドロニーモスは平和な眠りの腕から脱けて、いつもの通り心地好い樹蔭に朝の空氣を吸はうとして來たのであつたが、しつとりとした花園に見馴れぬ轍の痕を見出して且驚きつゝ奴隷を

喚ぶ。

「是や亂暴だ。……美しい落つきを這麼滅茶々々に壞して終つて！　一體誰の許を受けて車を此處に引き込んだのじや。」

奴隷は一人々々に叱られたが、誰にも夫は覺えが無い。――總ての事情はサフォーの車を驅つた馬丁が歸宅して明かに成つた。

馬丁も亦娘の家出の共謀者と思ひ込んだスカマンドロニーモスの怒りは絶頂に達し、若しもクレイスが驅け付けて、其歸つて來た所を見ても、馬丁は無斷の家出とは全く知らなかつたに相違無い事を注意せなんだら、恐らく彼は不運な馬丁を打殺しても終つたらう。

が、スカマンドロニーモスも段々落ついて最初の憤りを和らげ、娘の行衛も訊き、許し難き家出の事も物語つて、時を移さず忠實な奴隷は彼女を追跡する爲港まで派遣される。「メラニスの怒り」とは事こそ違へ、彼女の寢床の其儘なのを見、考へる迄も無く彼の無情な魅惑者の後を追つた事を確めた父の悲嘆は如何ばかりであつたらうか。亡ぶる事無き詩に有名な、ベレアの勇しい息子の悲憤も、一生涯の最も恐しい日として類ふもの無い這の父の失望には及ばないだらう。更に彼は、父らしい嚴めしい顏をして彼女を叱責しなかつたではないか。若い心の懊惱を只管慰める友達の調子で娘の

相談を受けたものを、斯く秘やかに家出迄して名譽を毀け、嘆きを掛けなくも好かつたらうに、何故這麼耻づべき行動を爲たか殆んど說明の仕やうも無い。

が腐り切つた心は謹愼の柵を踏み切つて終つた。不幸な父はあゝ迄自分の娘を信用した事を後悔しつゝあはれなサフォーを氏神に呪ひ、復讐好きの地獄の神に彼女を任さうと祈るのである。

善良なクレイスは走り寄つて、口數尠く、優しい聲と感情とに漸く彼を宥め賺す。彼女は、娘の戀仲の强い結びは人類の律、神の思召でもあり、過激な情熱は人間の弱點として寛容する他は無いと謂ふ。

家中は、女主人を失つた女達の啜泣で濕つぽく、孰れも悲しげに秘々と其仕事を執り、老夫婦は眼を上げ、手を向けて氏神に祈る。溫良なドリーラは姉の家出の恐しい耻辱を脫れるやうにと、天地の神の威稜に只管祈願を籠めるのであつた。

クレイスは夫とドリーラとを慰めるに努めた。――が、サフォーの出奔以來這の住居は幸福といふものが全で消えて終つたやうに、長い間彼麼歡喜に滿ち溢れ、互に信じ合つて居た人達が、今は打つて變つて失望と憂慮と重ね來る恐しさとに思ひ屈して、遣る瀨無い太息を洩すばかりである。

× × × × ×

風は帆に滿ち、帆は海原に影を落して進む。サフォーは浦の方から眼を放さず、是亦嘆息ばかりである。彼女が捨てゝ來た父や母や妹や、其他誰彼、――家族の人達の落膽失望してゐる樣が、現々と彼女の想像に浮んで來て、ミチレーネの社の屋根や塔の頂の見える間、泪を一杯溜めた其眼を親兄弟の居るあたりから放すことが出來ず、軈て鄕里の浦も匿れ、廣漠とした浪より他は見えなくなると、彼女は聢りと上着を身に纏つて行末分らぬ自らの運命に身を任せ、俯首れたまゝ眤と物思ひに耽るのである。

第七節　航　海――上　陸

戀神よ、何といふお前の出來心ぞ、斯く迄人を迷はせながら、父を捨て家を捨てゝ戀しい人の跡を慕へば、追はるゝ人の行衞をば何處の果てにか匿し晦して終ふとは。

サフォーの船を進める風は、シキリアへと志す彼女の願ひを適へてやらうとするものゝ如く、刻々其地に近づく間に、僅かに彼女に先ちて船出した當のフアオンは、何事ぞ、あらぬ方向に增々離れて行くのであつた。最初リビヤの方に吹きつけて居た風は、何時か凄じい嵐と成り、彼の船は目指すシキリアの航路とは似もやらぬ海の浪に漂ふ。――サフォーの船は靜かに其航海を續ける。天は嵐の恐しさにフアオンを苦しめ、彼女一人に幸しやうとにや、そも又サフォーに對しては、思ふ儘吹くべき嵐を蓄へて驕て一と嘗めに覆へす準備をしてゐるのか。否々、フアオンと遠ざかり別れて行く事は、彼女にとりては難破よりも猶恐しい事であつた。

二日二夜、船は泡立つ海を搔き分けて進んだが、三日目の朝遠く微かに陸を認め、進むに從つて明かに、其日落日の光には、判然島山が眼に入つた儘に暮れ、翌日は愈々志す島に近づき、這の航海を惠まれた海の神々に感謝しつゝ欣びに滿ちた水夫等は、

「シキリア！」
「シキリア！」
と聲を揚げる。
陸に憬れる航海者が、遠海の眞中から、焔と煙の龍卷に夫と認めるエトナの山巓が早や堂々と眼前に現はれた。
サフォーは舳に眼を定め、自分の澆望する島影を、屹と見つめてゐるのであつた。其處にフアオンとたゞ會見するばかりでは無い。――心の滿干は彼女を運んだ海の潮の夫にも似て、彼女は今や斯く迄憧るゝ自分の熱意に、つれなく冷い男心を動かさうと滿身の希望に燃え立つてゐる。――
斯かる間にも船は進んで、海底に礁の夥しい證據とて、鈍重な唸りが聞えて來る。舵手は巧に舳を岸へと向け變ふれば、靜かな灣が船を迎へる。帆を下し、櫓を漕ぎ、船は緩々と岸に近づく。長らく海上を翔つた鳥の、漸く旅疲れを休めるやう、靜かに錨を下して航海の神に謝し、岸邊に身を休めながらサフォーは船頭に料の拂ひを濟せる。
不圖見れば、近いあたりに綠草の茂つた巖窟が在つて、長い船旅を續けた航海者が來て憩ふべき所であらう。日夜の船の動搖と、考へ過ぎて疲れ切つたサフォーは、其洞窟の奥に敷かれた芝草に

身を横へるや、幾日の不眠に熱を持つた瞼は自然に閉され、肱を枕に其儘耐え切れぬ熱睡に陷るのである。彼女と苦しい旅を共にしたロードペも、忠實な奴隷のクリツスも彼女の傍に憩ひ睡る。おゝ、何といふ穩かな眠りであらう!!　平和な死の豫習は半生に種撒かれた荊棘多い苦惱の忘却を人の心の中に注ぎ、サフォーの戀の痛みにも、たとへそは明日日の出と共に又繰り返さるゝものであらうと、尙且僅かの憩を持來す、目醒めは如何におそろしいか。――――――
眼を開くとサフォーは、奥まつた巖窟や、廣々とした海が何とも知れず不安になつて、一刻も其處に堪え切れず、急いで立上り、
「まあ、お前達！……何故お前達は愚圖々々してゐるの？……馬を求めて早く發たなけりや、……さ急いで仕度して、妾と一ツ所に野原も森も岩穴も、這の島の隅々迄も驅け廻つて彼の方を搜し出すの！」
が、斯う言ひながらも彼女は、眤と海の彼方に眼を据えて、一望水と空ばかりの中に、只一つ不確かながら船らしい影を看守つてゐるのであつた。
彼女等の居る洞窟から直ぐ眼の前に小高い岬が突き出てゐる。何思つたか彼女は、つと其處に走り寄ると、素早く頂上迄心配げも無く攀ぢ登り、一と息入れて廣い海面を眺め渡す。ロードペは荷

物に番し、クリツスは馬車を捜めに行つた。寄せてはかへす汀の浪、風は浦曲の樹木を動かし、サフォーの髪や着物を弄ぶが、眼を定めて彼女は一と筋に彼の離れた物影を注視する。

見てゐれば段々此方に近づくか、おのづと明かに成つて來る。——果然、果然、それは船だ。最早照り映える白帆が見え、間も無くくしや〳〵と、中に働く人影迄も明かに成り、次で舟人の一人々々が數へられ、着物や所作が手に取る如く解つて來る。——サフォーは岩の上に足を爪立て、今しも岸に着く船の中を注意深く窺き込んだが、軈て夫は國違ひの人では無く、此島に住んで居る人達だと解つて見ると、船は島に沿うて廻航してゐるものらしく、水夫等は勿論上陸しやうとも爲ない。——

彼女は、舟の人達と詞を交し、何かしら新らしい知らせを得やうと思ひ、急いで山を下り初めた。

第八節　見知らぬ人

船から下りた一人の客は砂濱の上に降り立つと、波打寄せる汀に沿うて靜かに其道を取るのであつた。明るい容貌は其心の清きを語り、稍俯向き加減に歩いてゐたが、不圖頭を上げると、岬の上から一人の娘が、着物も髪もばら〳〵に亂して降り易い細道を求めながら轉げるやうに急ぎ下つて來るではないか。——

彼女の下山を援けやうとする憐愍よりは、何とも解らない、狂つたやうな這の少女に對する好奇心から彼は歩みを早めて彼女に近づかうとするのであつた。

サフォーは辷るやうに山を下つた。下り方の急激なのと、吹く風に弄ばれるのとで服裝の散々に亂れるのも頓着無く、一と息に麓迄驅け下りると、舟から下りた件の人は、つと腕を差延べて抱き留める。てつきり是は、血迷つた若い娘が、可はいさうに狂氣したのだらうと思ひながら、見ず知らずの彼は溫和な詞で、

「什う成されたな?……氣の毒な事だ。如何して一人で彼麼岬に、!」

と言ひながら、又もや考へに浮んで來たのは、若しかしたら彼女は難破したのでは無いかといふ

事であつた。が、夫にしても、着物の濡れてゐない事や、風ぎ切つた海上の事を思つて見れば是も左うでは無ささうだし、――――

サフォーは、墜落を止めて呉れた人に愛らしく叮嚀なお辭儀を爲ると、尠し顏を赤めながら着物の亂れを直しなどする。彼等は默つて見合つてゐる。サフォーは、這の方は嚴めしいやうな人だが何處やら優しい所のあるのが好ましいなどゝ考へる。打見た所、最早相當の年配でもあつた。彼は又サフォーを見て、是は又若い身空で、一人で迷ひ歩いて居る者と思ひ、色々と推量を下す中にも其身裝は別として、只僅かばかり話した其詞から、直ぐ最う彼女は他國の人であり、希臘の方だと察しがつく。

サフォーは歩きながら這の見ず知らずの人に、只物好きに岬に登つた事や、自分の荷物と奴隷とはつひ近くに在る事や、或特別な用事が有つてシキリアに來た事などを語り聞かせる。――

其處へ息急き驅けつけたクリツスは、間も無く馬車が來る事を告げる。サフォーは尙其人と話し續けてゐるのであつた。

彼は斯うして話して居る内、彼女の行儀作法の正しい事や、話し振りの優美な事に感心して、若し旅の差支に成らなかつたら、一寸でも自分の住居に休んで行くやうに彼女を誘ひ、海からは遠く

も無い綠美しい小山の上の、デイオニソスの贈物――葡萄園の有る建物を指す。

這の申出にサフォーも喜んで承諾を與へ、彼等は打揃つて今指し示された家の方へと歩みながら途々も互の身の上を知らうといふ輕い好奇心も手傳つて、且話しつゝ行くのであつた。

着いて見ると、家はさして廣いといふ程では無いが、如何にも瀟洒に氣持好く整備はれ、パロスの大理石を柱に使用つた玄關の欄間には、主人の風格の偲ばれる「安寧と慰ひ」なる文字が讀まれる。

室内には繪畫を飾り、此方の繪はヘラクレース及テゼウスの冒險と和解、彼方のはトロイの戰隊とォヂツセウスの繪であつた。サフォーは、精細に是等の繪を見ては、其の美點を細かく正確に鑑識する。主人は彼女との會話を興ある事に思ひ、斯うして二人の話は思はずも長引いて行くのであつた。

彼女が熱心に話を爲てゐる間に、彼は不圖サフォーの指に、見覺えの有る指輪の嵌つてゐるのを見た。

「斯んな御訊ねをして御うるさく御座いませんでしたら、一寸其御指輪をよく見せて下さいませんか。……私の見間違ひで無けれあ、夫には非常に懐かしい譯が御座いますのでな。……」

「まあ、是で御座いますか？……妾の家族のものですの。」

と言つてサフォーは夫を示す。彼は注意して指輪を見ると、

「うん、矢つ張り然うだ！……私はよく是を知つてゐますよ。是れや什うも、スカマンドロニーモスの認印に相違有りませんが!!……彼と私とは古くから親密な關係が有りましてな。お互、信友の證に同じ指輪を拵へたのですよ。……ほら！　私のを御覽なさい、矢つ張りスフインクス、……スフインクスでせう？　まあ什うして是が貴女の御手に！……私の信友と貴女とは什麼結びが有るのでせう。是をお持ちの所を見れば、貴女は大方、スカマンドロニーモスと最も親しい間柄か極く近親の方でせうが、……何とまあ！　是や實に奇遇！　私に取つては三倍も四倍も幸福な日ですよ……斯うして偶然貴女に御目にかゝつた幸福ばかりか、舊友の懐かしい氣持を、又貴女に結ぶことが出來るといふのは、是れや嬉しい！　貴女が此處に滯在して下すつたら、實に、這麼結構なことは御座いません。……長くゐらしつて頂けたら什麼に私は嬉しいか！」——

サフォーは、圖らずも斯うして自分の身元を發見された事にはたと當惑し、若しや輕蔑されは爲ないかなど色々に思ひ煩らひ、恥かしい家出を見拔かれる事は、何としても彼女の酷く恐れる所であつた。

主人は、彼女の困つてゐる樣を氣の毒に思つて、

「何その私は、……這の指輪を御持ちの上は、什うあつても貴女を歡待せんならん譯は如何してだか、夫を先づ申上げませう。……私は、コルコスのエフチーキオスと謂ふ者ですよ。長い間船を乘り廻した後で、今では這の仕合せな寂寞の中に葬られてゐる態です。呵々、ほんに、葬られたと謂ふべきですな、總てを忘れて、煩雜い生涯の殘りを此處に生活して居るのです。……でその盛に働いて居る頃ミチレーネでスカマンドロニーモスと親しく知り合つたのですよ。——商取引の關係から兎角一つ所に旅を爲るやうに成りましてな。是で若い時には私等もオリムピヤの競技に於て、スカマンドロニーモスと一つ所に榮冠を取つた事だつて有りますよ。ハ、、、今に成つて言ふと可笑しいやうなものですが、今日皺の出來てゐる此額にも格闘に勝つて桂の枝を卷かれた事が有るのですからな。夫から、……中々元氣なものでしたよ、希臘の自由を脅かした野蠻人を一つ所で擊退した事も有りますし、……其後、運命は私等の行く道を別々にして終ひましたが、今日私が、親密と友情の證として貴女に捧げてゐる這の手は、曾つてはスカマンドロニーモスの手を固く々々握つたものです。懐かしまぬ譯には行きませんわい。」

サフォーは、彼の近くに座つて斯うした打明け話を聽いて居る内、幾分かづゝ力付けられて來るエフチーキオスは長い年月の經驗で人の心持がよく解る。——

「私は、今貴女が何やら打開け悪くさうに匿して御出でになつても其麼事は何とも思ひは爲ませんよ。……が御生國も、貴女の御立場も、お名前さへ言つて下さらないといふのは、是れや多分貴女は、私の心が未だ充分御解りに成らないからでせう。……好いですか、私は是で、人情や、人間の情熱などいふことに對しては極めて寛大な心を持つて居る男ですよ。……這の情熱の苦しみには什麼賢人も冒されますからなあ、だがまあ好い。如何あつても貴女は、日の入り迄默つちや居られなくなりますから。……ね、御安心なすつて私に全部お任かせなさいよ。……早い話、什うして貴女が旅に出る事に成つたかといふ動機や、又、私が何事か屹度貴女の役に立つといふ事を一つ能く貴女御自身で考へて御覽なさい。……貴女は私を第二の父と御思ひなさる折が有りますよ、屹度。」

這の思ひ遣りの有る穩かな話は、不幸な彼女の心に泌み込んで、サフォーは最早充分、這の父の舊友を信ずるやうに成つて來た。

「最う妾打明けますわ。サフォーと申します。……御察しの通りスカマンドロニーモスの娘で御座いますの。」

「おゝ！　さうして私は貴女の最も忠實なお友達！」

斯う言ふと共に彼は、恰かも親身の父であるかの如く彼女を抱いた。

うら若い彼女の心は最初は極り悪かつたが、併し、一度打明けて見れば、感情はより強く結び付き、燃えるやうな炎熱の夏に渇いた泉が遠かに生返つて勢よく流れるやうに、サフォーは其戀、其家出、――出來事の凡てを細かく彼に說明するのであつた。

エフチーキオスは同情しながら詳細を聽いた。這の無邪氣な物語りに興味を持つて、次から次へと話を促し、些かも彼女を耻かしめたり、自分で吃驚したりする事無く、間には穩かな忠告を混へ彼女の苦しみを和げる詞さへ挿んで耳を傾ける。泪を溜め、溜息を吐きつゝ彼女が此話を終ると、エフチーキオスは、

「ありがたう！　心の秘密をよく御話下すつた。……さうした貴女の不幸に對しては、貴女が御考へに成るより以上に私は同情して居ります。……

が、同時に私は、……曾つて、格闘に勝利を得たといふ不思議な因緣から生涯親交を結んだあの善良なスカマンドロニーモスが、貴女の家出を心配して老ひ込まれるのが恐しい。……若し貴女の近狀の報知が行かなかつたら大方お父さんは、悲しみのために仆れて終はれるでう。……斯ういふ事といふものは、得て悪い方にばかり考へるものでしてな。……屹度彼は、……噫、多分娘は溺れ死んでゝも終つたらう。海の眞中で船を暗礁に乘り上げて、海の怪の餌食となつて終つたらう。……

……さも無くば、深かい森の中に迷ひ込んで絶壁から轉がり落ち、悲慘な最後を遂げたのでは無からうか。――屹度這麼風に考へますよ。……ですから先づ、思ひがけない天の御惠みで私が今日貴女に御目にかゝつた事をお父さんに知らさして下さい。なあ、さうして貴女は暫く此處で靜かに生活して頂き度いのですよ。……貴女さへ御宜しかつたら、何時迄も何時迄も長く御住みになつて下されば什麼に私は嬉しいか！　貴女の此處を發たれる日は、私に取つては最も酷い悲しみの日ですわい。」――

と言つてる所に奴隷が、食事の用意の出來た事を知らせて來た。エフチーキオスは莞爾しながらサフォーを誘ひ、揃つて食事の部屋へと行く。

エフチーキオスの寂しい生活は思ひ掛けない舊友の娘の來訪に依つて急に賑かになり、近所に住んで居る人達も寄り集うて、其會話の面白さは客を欣ばすに充分であつた。エフチーキオスが詩人の作や、當時の雄辯家の演說を朗讀するの巧みさは殆んど天品とも稱すべく、その心は最も純な人生觀を體得してゐるのであつた。相客の中にモノフイロスといふ年若い一人が洵に品の好い人柄で人を外さない交際上手な上、人生問題に就いても中々深く究めて居るのが目に立つた。で、彼やエフチーキオスを中心として、話は哲學者の各學派の區別だの、其學說の內容だのに亘つて盛に論議されるのであつたが、サフオーだけは深い憂鬱に陷り、這の愉快にして有益な話も一向に耳に入らない有樣であつた。

室の窓からは遠くエトナの噴煙が見える。座談は益々面白くはづんで來て、滑稽な話や身振りに人を笑はせるも有り、エトナの噴火に就いて歷史的に說明する者が有るかと思へば、或者は又、斯うも噴火を續けたら末の世には山の上に山を築くだらうなどゝ珍說を吐く。すると其處に此說を駁する者が現はれるといふ有樣で、主人公は自ら先づ眞赤に成つてシラクーザの酒を客達に注ぎながら、

「諸君、さあどん〳〵召食つて、……斯うして親しく飲む事は實に幸福じやありませんか。」

と如何にも愉快に調子づけば、會話は增々陽氣に、サフオーに對して女、子供の喜びさうな世間話を仕掛けるも有り、メランクチオスと呼ばれる一人は竪琴の調べに合はせ、快い肉聲でイリアスの一節を唄ひ出す。遠い囁きが段々近くなるやうに、高調した美聲が琴の音と絡み、神來の名吟が耳と心とに道を開いて客の賞讃は暫時止まない。——

さて食事と唄とは賑かに終つて、主人始め客一同は立ち上り、宵の凉味を樂しまうと花園に出づれば數限り無い花取り〴〵に眼を悅ばし、馥郁たる香の傳ふ芝草を褥に一同は又一としきり愉快な漫談の花を咲かせる。

第十一節　夜の散策

假令眞底から惱ましいサフォーの心を和める事が出來なかつたとはいへ、彼女に對する新しい仲間一同の思ひ遣りは又無く深く優しいものであつた。此際彼女を慰める道とては、氣を變へて悲嘆を忘れさせるか、又は彼女の戀に對する極めて切實な同情であるが、エフチーキオスの住居に來て彼女は這の二つを獲たのである。されば其鬱屈した心も少時の間は穩かに納まつたやうに見えた。彼女は這の新しい天地、――知らない海や人間や、珍しい建物、風俗に接して何も彼も目新しく氣分も變り、今後姑く此地に留つて、這の新しい交友に立交はり、靜な心に苦しい情熱を離れる事が出來たならば什麼にか幸福だらうと感じ初める。……

だが、何にも增して力强い戀は、あく迄人をして憂悶せしめずには措かないのである。晴れかゝつたサフォーの額には復た憂愁の雲が蔽ひかゝり、押し匿さうと努める程なほ聞き分け無い泪はぼろ〳〵と零れて來る。

エフチーキオスは娘と父と二人の悲しみを思ひ遣り、打沈んだ彼女の樣子が眼に止まると、靜かに離れた茂みのあたりに彼女を伴つて、徐ろに彼女を慰める。

「私はな、貴女が此處に居られて這の暢氣な仲間に這入られたら、屹度心も晴々するだらうと思ふし、又心底夫を望んでゐるのだか、出來る事なら貴女の戀も全う爲せ、何とかして滿足な結果に導き度いと、色々考へて居るのですよ。實はフアオンは私もよく知つた仲なのですからな。貴女には是や甚だ意外でせうが？……彼の男の家族と私との關係は、もとより私と貴女の御家庭との親密さには比べものにならないけれど、相當深い關係が有りますので、最う私は、島の各所に奴隷を遣つて、フアオンが着いたら直ぐ報知が有るやうに丁と手配して置きましたよ。ですから、彼の男が來さへすれば貴女は直接御逢ひに成つて極力話される方が好い。誰よりも夫が一番雄辯なのですからそれから、先刻も一寸申しましたが、明日にもスカマンドロニーモスに使者を立てゝ貴女が私の處に居る事や、及ばずながら私が父代りに成つて居る事を知らせますよ。屹度最う、涙にくれて御心配して居られるに相違有りませんから。」

斯う親切に言はれるにつけてもサフォーは、大事な父の老後を支持者無しに捨てゝ來た心苦しさが泌々と感ぜられて、今更に耻かしい事にも思ひ、考へる程居ても立つても居耐らない心持になつて來る。

「あゝ！　本當に濟まない事を致しちまひましたわ！　這麼に成る迄育て慈しんで下すつた父を見

捨てたんですもの、妾は最う、天の光を仰ぐ資格が有りませんわ。……彼麼にも妾の苦痛を慰めて下すつた父を捨て什うして耻ぢずに居られませう。屹度神々さまは、妾の過誤を一層痛切に感ぜしめる爲に貴方のやうな有德の方にお目にかゝるやうに成されたのですわ。……親を苦しめた罪は、妾自身で負ふより仕方が御座いません。」

と悄れかへつて、アフロデテーの怒りや、ピチアの神託から遂耻づべき這の家出を爲るに到つた經路などを彼に語り、エフチーキオスは又、近い中屹度フアオンに遭はれるからと元氣づける。

夫から、二人は客達の集つてゐる噴水の畔に行くと、サフォーは、

「まあ、靜かな好い夜で御座いますこと。……孤獨な心は、理性では什うにも慰みませんけれど、自然の聲には勝たれませんわねい。……囁く泉や、群鳥の聲や、微風や平和な海の眺め、音樂と詩の美しさ、……みんな淋しい心の慰めとなり、苦しみを取除いて呉れますわ。」

と感に堪へたやうに言ふ。

モノフイロスは彼女の詞を受けて、

「お側に居りましたゞけでも、貴女の苦しんでゐらつしやる事はよく解ります。」

と深い同情を寄せる。

エフチーキオスは薔薇の花を摘んでサフォーに贈り、

「御覽なさい。花の中でも最も美しいものですが、よく見ると棘が御座います。自然といふものは何でも斯う、喜びと苦痛とを併せてゐるのですなあ。……ですから、棘を恐れずに薔薇を摘み取るやうに人生といふものも其間に起る不快などを心配せずに、ぐん〳〵樂しんで行くのですよ。」

サフォーは花を受けながら、

「有りがたう、エフチーキオス。……妾の一生は色も香も無くて棘ばかり多い薔薇見たいなものですわ。……」

宵闇も最早深く、涼しさも增して來たので客達は園を捨てゝ室内に集り、延び〳〵と美しい絨氈に横はつたり、思ふさま氣樂に休養するのであつた。

第三章

第一節　無關心

燃えるやうな大氣の炎威を肅やかな雨の和めるやうに、罪の無い漫談は這の可憐な家出の人に香やかな氣持を流さしめた客は色々の遊びに心を潜め、モノフイロスはサフオーと靜かに話し合ふことを望み、頻りに彼女に近づかうとする。人々は些の妬ましさをも表さず、微笑みながら這の新しい愛慕の現象を觀察する。エフチーキオスは元より、興有りげに話し合へる二人を壞かうとはせずたゞスカマンドロニーモスの友たる立場からも、穩かな愛慾の觀察者としても、是が果して什う進展するか、徐つと注意の眼を注いでゐるのであつた。

が、モノフイロスとサフオーとの對話は、一向に無關心の範圍を超えて深入りしさうには見えない。サフオーは興趣の節度を失はず、這の若人は、謙恭な態度でそつと吾が戀に歩み寄らうと試むれば、思ふ彼女は觸れなば觸れん湯氣の煙の、仄かに望みあるが如くは見えつゝも、吹かるゝ儘にたゞ嫋々と微風に打靡く樣の手應へ無く、而かも這のつゝましい對應は一面反つてモノフイロスの

愛慾を唆る種ともなつて、兩者の接觸は一進一退微妙な境を低徊する。若しも彼女が、容易く泌み込んだ這の若者の戀々の情に靡き、或は又、最も誠實な愛人として彼の情に應へたなら、其幸福は如何ばかりであらう。――併し、最初に受けた心の傷は、癒すことの出來ない深傷であつた。數奇な運命よ！　求める者を彼女は拒み、遁げ去つたものを只管求めて止まないのである。

夜は斯くて更ける。おのがじゝ客は歸る。――モノフイロスは最後に、たとへば搖ぐ一本花の、露をし慕ふ蜜蜂か、只去りがてに縋る風情。

第二節　夜の對話

エフチーキオスはサフオーと唯二人殘つた。澄み切つた夜の寂寞は互の信頼を一層厚くするかに思はれる。少時途切れた靜寂の後、サフオーは蕭やかに、

「今日一日、斯うして妾のために靈して下さる御好意を受けながら、時々妾、色んな事が考へられますのよ。妾、貴方が、光彩ある都會の生活よりも、淋しい此地の業務を選んで靜かに暮して御出でになるのは、御似つかはしい尤もな事だと存じますわ。……妾別段立入つて貴方の御郷里が何處だとか、其麼事御訊ね致し度い譯では御座いませんけれど、……初めて御目にかゝつた妾に大層深い信用を置いて下さりながら、御身の上だの、色んな細かしい事はなんにも御話して下さいませんのね。妾は德の具はつた貴方の御風格や、生活態度とでも申しませうか、貴方の採られる人としての道が御慕はしいものですから、假令貴方を出した幸福な御郷里や、貴方の通られた御半生などは存じませんでも、貴方の御精神をもつて能く承知し度くつて耐りませんのよ。」

「左樣、……私の郷國と言つても、最う長いこと其處には居ないのですから、別段他所と變りませんよ。」

「諾。夫はもう、貴方見たいな方の郷國は世界中で御座いませうけれど。――」

「私の生れと謂へばシラクーザです。……所が其地が厭になりましてな。――私とは反對な行き方に、何處迄も逆らつて仕方が無いものですから、其麼競爭見たいな事はさつぱりと止めて這の寂寞裡に住まうと決心したのですよ。……話せば長いことですが、何にしても一番厄介なのは心の敵ですなあ。寛大な心を殺さうとする這の感じ强い二つの强敵が貴女、私を驅つて青年時代に恐しい戰爭を爲せたのです。……で、その辛い經驗からして私は、未だ私に淺されてゐる僅かな晩年を此處で過さうといふ心に成り、過去を忘れ現在を樂しみ、神々の惠みの殘りを世捨人然と隱遁することに成りましたのですわい。」

「幸福なエフチーキオス！……噫、何故妾は貴方と同じやうな人生觀に身を任かす事が出來ないのでせう……。」

「――シラクーザ、……貴女も御承知の通り、シラクーザは一人の暴君と其後繼者に服從して居たのでしたが、曾つて、物の分つた市民が一團と成り、其處に共和國を興し吾々の祖先が血を流して迄も獲得し度いと望んだ自由を取返して吾等の後裔に殘さうと努めたのです。――まだ若い私も其一人でした。……併し其時は最う、昔からの堅實な志操とか道德とかいふものは跡形も無く、總て

の政事は亡び、人民は獨立といふ嚴正な道よりも寧ろ盲從墮弱の惡德を選ぶやうに成つてゐたのです。

で、此やうな一般の墮落は、自由の獲得を企てた健全な少數者の心を動搖させまして、熱狂した同志の意見では、這麼事情なら萬止むを得ない。吾々善良な市民は、劍に訴へて共通の敵を斃すばかりだといふ主張に傾いたのでしたが、私は、……立派な彼等の勇氣を尊敬する心は敢て人後に落ちませんでしたけれども、他に考へる事が有つて、寧ろ自ら其忘恩の市を脱する道を選んだのです……といふのは、何も微々たる私の一命を惜んだ爲では無く、常々私の心掛けて居つた中庸といふ賢者の人生觀に從ふためでした。自由が倒れて終つた時には、謀反に依つてゞなければ到底再建の出來ないことは歴史の證明してゐる所です。が、其結果は什うかといふと、結局僅かに殘つた健全にして善良な少數先覺者の鏖滅を急ぐだけで、依然として惡人の勝利、暴君國の確立を根強くするばかりなのです。……大部分の人民は少數先覺者の心を諒解せず、其翫味することを知らない自由の贈物を拒絶しました。富める者は鄕國に在つて只身の安全と逸樂とを希ひ、敢然起つて犧牲的行動に出ずる事を恐れる。貴族は劫初から盡未來迄自分に都合の好い專斷主義の支持を求めて居ります。斯うして總ての鄕國は混亂に陷るのですなあ。私は自分の鄕國が暴君に盲從し、如何とも爲す

無きを見ました時、最早是以上何等期待する事が出來ないと知つて卽座に這の自由の死骸より他藏して居ない都市の城壘を捨てたのです。……

這の海、這の空、——是等凡て、人間に共通な自然は、悠久といふ神に相等しい社であり、這の萬古不變の正しい國こそ賢者の定住する所、……卽ち私の鄕里ですよ。」

斯う話し終ると彼は、窓口に近づき、空中を指して、

「まあ這の無限の空間を御覽なさい。……數限りも無い世界を含む這の無限の空間に對しては、啻にシラクーザばかりじや無い。吾々の這の地面などは悉く塵芥の如き微粒に過ぎませんよ。這の壯大な光景に對して、何人か氏神だの神壇だの、神々の社だの、或は人道だのと、さも大事件らしく云々するがもの有りませう。——鄕國には限りが有る。宇宙は只無限といふばかりです。——」

「でも、尠くとも貴方の御國が、貴方に取つて或時代大切な所だつた事も御座いませう。」

「左樣、……シラクーザに居りました頃は私も愛鄕といふ感情の偉大を誇つてゐたものでしたが此處へ來た私はつくゞ感情の微弱極まる事を知りました。這の宇宙の偉大を見ては、其宇宙精神は奈邊に在るか漠として把握し難しです。……廣大無邊の光景に對しては何人も空といふ他言ひやうが御座いませんよ。……や、ボオテスの星を見ますと、夜も大分更けたやうです。最う寢む時間

です。——貴女はまた困難な旅から引續いての長話で、嘸御疲れでせう。這の邊で切り上げて一つ悠くり熟眠される必要が有ります。」

「妾は眠られませんわ。……御話が面白いものですから、もつと〳〵長いこと承り度いと思ひますの。今の御話で政治的方面の御不遇は伺ひましたけれど、今度は貴方の戀物語りを承つて見度いとも存じますわ。……ですけれど、最う本當に更う御座いますわね。神々は貴方に平和な眠りを與へられませう。噫、妾の眼は永久の泪に罰せられて、閉ぢる事も出來ませんし、……」

「なに、詰らない昔の戀物語りに興味を持つて御聞き下さるといふのなら、朝迄喋り續けたつて差支無いのですが、併し、貴女は御休みを取る必要がありますよ。」

と彼は間も無く奴隷を喚び、ロードペとクリッスはサフォーを共居室に案内するのであつた。

第三節　物　語り

夜は、あはれなサフォーの心を打碎く懊惱に何の藥をも持つて來ない。軟かい褥の上に横はり、フイロメールの哀しげな光、遠く物淋しい梟の鳴聲、草葉にすだく蟀蟋の單調な守唄など、總ては夢を誘ひ慰ひを物語るものであつたが、安らかな眠りは彼女を惠んでは呉れなかつた。

が、彼女とは事かはり、エフチーキオスの瞼は重く閉され、朝も遲く目醒めた時には、日は既に三竿に上り、花園の中で二人は朝の挨拶を交した。

「フアオンの知報が御座いまして？」

と彼女は訊く。

「まだ其麼！　僅かの時しか經つてゐないでは御座いませんか。」

二人は話しながら、常時楸欖の綠に蔽はれてゐる大理石の臺を傍に据えた、巖窟の方へと歩いて行く。

其處には清玲な瀧あつて落ち、水の重吹は朝日を受けて七色鮮かな虹を懸け、その清々しさ靜かさ、美しさは、思はずも足を停めさせ、二人は向ひ合つて臺に掛ける。

サフォーは、昨夜中絶した話を思ひ浮べ、エフチーキオスの優しい戀語りを聽いたら自分の苦惱も幾分和らげられるだらうと思ひながら、

「昨晩貴方は、お若い頃の戀の話を爲て下さると御約束さないましたわね。……屹度、幸福で御座いましたでせう。……妾見たいな這麼不幸な片思ひつて、復と御座いませんもの。――」

「いや、私も、貴女の戀と同じやうな酷い苦しみを經驗致しましたよ。……併し誰でも自分の辛さが一番酷いと思ひますもので、決して他人の苦痛と同樣だとは考へませんからな。……私は今以て今日戰爭に傷いた軍人のやうな生々しい痛みを覺えますよ、――が私の性質は、さう長く過ぎ去つた事に拘づらつては居りませんので、今はほんの一寸した思ひ出しきや殘して居りません。ですから何等か大事件と成つて發展する面白い話だらうなどゝ思つて下すつちや困りますよ。……併し、運命は此處でも私の青春時代を過した平和な氣持を搔き亂して、最も殘忍な暴君の軛に私を結び付けた事は事實です。――

此處でお話申上げて置きますが、當時私の心は深い平和――それや本當に靜かな、不純氣の無いものでしたよ。全で愛慾の領域といふものは窺いても見たことが無く、只學問を勵む慾ばかり、靜謐、寂寞、愛讀の書籍、殆んど夫が私の生活の全部といふ位、一人の友人が有つて私と趣味を分つ

て居るのでした。――で、是こそ無經驗な私の青春時代なのでしたが、私の生涯で最も尊い這の悅びに充ちた時代、……再び還る事の無い過去の歲月は餘りに速かに經過しました。

不圖私は墮落の途を急ぎました。つまり或女が眼についたのですな。――

名は申上げることを御許し下さい。未だ齡若く、何の經驗も持たない、……と見えました。――粹な女で、何でも深く密敎に凝つて居りましたよ。蠱惑的な其容、賑やかな話振り、唆るやうな美しさ、夫が彼女の總てでした。……いや後になつて解つて見ますと、其不實の犧牲に成つた人も非常に多いのですが、……にも拘らず、彼女の歡心を買はうと努める人が常に斷えなかつたのです。夫等の連中は互に嫉妬し合ひ、奪ひ合つて、自分こそ彼女を手に入れやうとお互の間には激烈な競爭が起る。所が這の妖艶な少女は、慕ひ寄る數多の男達を熱狂させる源泉として、無邪氣な一人の青年を引付けて彼女の戀の神壇に平伏さしめ、自分自身は其青年の、未だ年端も行かぬ世間知らずの心の上に王者の如く君臨しやうと爲るのでした。

斯う謂つた彼女です。その眼の動き一つで焦れ來る男を喜ばせやうと悲しましめやうと擅縱自在だらうでは御座いませんか。私は知らず々々其處に落込んでまんまと彼女の道具に使はれる事になつたのでしたが、當初は未だ本當に愛するといふ事を知らなかつたので、懷かしい孤獨に立歸つて

は、何とも言へない苦しさを體驗してゐたのです。繰返し繰返し戀の詩を讀み耽り、若い娘達の姿も餘計目につくやうになつて、戀を獲られない不幸な者のやうに自分を考へる。斯うした體驗は優しい情熱を培つて呉れます。……段々思ひが募るばかりでしたが、這の戀が間も無く私を非常な不幸に陥れることに成つたのです。

私の心は乾き切つた麥藁のやうでした。彼女を見ると同時に戀心が腸の底迄泌み込んでしまつたやうに思ひますよ。彼女のためには私は最う何もかも忘れて終ひました。夫迄といふものは頭髪も打棄らかしで、着物と言つては何時も同じ粗末な外套ばかり、年中瞑想に耽るだけで、而かも蠻的に、浮世離れた孤獨の道に進む傾きの私が、這の歡樂の望みから急に活氣づいたやうに、美しい着物は着る、身綺麗には爲る、顏色もつや〳〵させる、褐色の髪を掻き上げるやら、香水をつけるやら一と眼見たら其時の私の全で別人のやうな酷い變りやうが解つたでせうよ。

曾つて唯一の樂しみであつた書籍は忘られて塵に被はれ、默想に耽ける靜かな隱れ家は勿論打棄られた限りで、反つて私は、夫迄長い年月の間、七面倒な、而かも方角違ひの研究に過した事を後悔し、今の今迄人生の春を樂しむ歡樂に身を委ねず。學問に專心した事を心から哀しく思ふのでした。最う私は文字を書く錐を手に取る事無く、何かといふと戀に醉つた自分の心を竪琴の調べに合

せるばかり、戀歌を歌つて居なけれや、早や溜息です。

這麼に迄も溺れ切つた私は、變り易い海に漕ぎ出す小舟のやうに、行く先の嵐などはてんで豫想も爲ず、深い幸福に泛んで居りましたが、――何にしても總ての不幸の中で戀の痛み程大きく深いものは御座いませんな。……輕薄な懸の誓を信ずるのは、丁度舟人が大丈夫嵐が無いと當てにならない安心を爲て居るやうなものでせう。若し戀し合ふ情熱が強く、且どちらも想つて居るのならば夫は問題は無いのですが、一方が生で、一方が出來心であつたとしたら、一體什う成ると思はれます？――

暑い日中、樫の樹の蔭に休んでゐる農夫の家族などに見る、子供が母親の話に夢中になつてゐると謂つたやうな本當の憩ひと本當の清らかさが其時の自分に解らう筈も無く、彼女の私を悅ばす仕草が厚い〳〵眼匿しと成つて、宇頂天な若者は勿論嫉妬どころでは有りませんでした。……彼女の望む條件としては最も都合の好い者だつたでせう。私は、自分を待つて居る悲しみを知らずに他人の苦悶を笑つたものです。

が、遂う〳〵其酷い時が參りました。恐しい光が、私に置かれた實際の立場を判然と照して見せたのです。……私は、餘りに長い間何も知らず盲目にされて居た事が一時に解つて見ますと、丁度

無心な眠りから今しも目醒めた子供が、信頼し切つてゐる自分の父が突然短劍を突きつけて脅かして居る樣をでも見たやうに、其時の女の不信に接した愕きと悲しみは到底詞で表はすことが出來ません。

所が、什うでせう。這の新しい出來事が愛慾を消すかと思ひの外、反對に一層情熱を煽るばかりなのです。失望の極、實際海に身を投げて死なうと考へましたよ。が、苦しい胸を抱いて深い森の中を迷ひ歩きながら私は、死ぬ前にひとつ彼の裏切者を思ふさま罵つて遣らうと思つたものですから直ぐ彼女の住居に歩を向けて、遂々中へ這入りました。……自分の絶望を破裂させる場所、耐ゆべからざる心持にさせられる家の中に自分から進み入つたのです。さうして、愈々扉を閉けやうとすると、實に不思議なものじやありませんか。戀する者の弱さですなあ、其時私の心は私かに恐れ戦へたのです。夫は、……若し其處に私に代つて幸福を味つてゐる相手が居たらといふ堪えられない心配なのです。……

否、其麼ことが有るものか。……彼女は一人で居るに相違無い。私が能く知つてゐる何時もの針仕事を爲て一人で居るに相違無い。……彼女は自分を平常と同じ優しさで招いで呉れるだらう……不信を面罵しやうとする其やうな場合に心の隅では這麼考が渦を卷いてゐるでは御座いませんか。

宜し！　愚圖々々せずに進み入らうと決心しながら、さて何だか深い淵の底にでも行き當つたやうな氣持がする。で這入るなり、憤懣を破裂させて存分彼女を罵らうとしましたが、……何事も無げに落ついた態度を見ると、其場の對照が實に妙で、什う爲て好いか再び私はふら〳〵として終ひました。

最う罵る力も無く、彼女の態度は私を一層孤獨な心持に陷らせるやうに思はれるのです。――が這のやうな場面には馴れてゐる彼女は、平常の通り冷靜に私の話を聽いて、總てが私の誤解でゝもあるやうに旨く色付けて、說明したり、辯解したり、ぼろ〳〵と涙を零す樣は、如何にも身に覺え無い濡衣のやうで、這の打克つことの出來ない雄辯は、又もや私に眼匿しを爲て終つたのです。

私は、何て馬鹿な無考へな猜疑を抱いたのだらうと、自分自身を叱りながら彼女と別れる。……が、彼女の美しい眼から落ちる涙は其麼尊いものだつたでせうか。――否、夫は運命的な錯誤です。私は今考へても赤面しますよ。

這の時から青年時代の花は色褪せました。私の心は酷く苦しみ出しまして、「今味つて居る晴々しい心持は早晩涸渴するものだ」といふ事を知り初めますと、何時か一度は失はれる對象を抱く憂慮が眤つとして居られない程私を焦立たせます。申しやうの無い心配が掩ひ被つて參りました。彼女

を取卷く無數の競爭者を見る度に感ずる焦燥は增々其度を加へて來て、彼女の好感を獲て居るのは自分一人だけだと信じて居たのに、孰れも同じ取扱ひを受けてゐると知つては嫉妬せずには居られません。私は此重い鎖を打ち切らうと幾度考へたか知れませんが、海魔シレーネは、不幸な舟人を難破させる迄は、いくら岸邊を指して遁げやうと焦つても固く捉へて離しません。……遂う〳〵度重る彼女の不實が、然う迄長く私の眼を蔽うてゐた幕を引破りました。以來私は、斯うした迷ひから幻想を抱くことは、神も人間も無い、皆同じことだと泌々思ふやうに成りましたよ。……

凡てを破壞する「時」の力には適ひません。彼女の美にも萎れる時機が參りました。考へて見ますと、彼の頃の私は永久に眞闇な牢屋の中に呻吟してゐる不幸者のやうな氣持でしたが、矢張り何時か再び天の光を見る事が出來、今日では、什うやら大嵐を漕ぎ脫けた老水夫のやうに靜かです。……私は斯ういふ自分の經驗から、時といふものは戀の傷を癒し塞ぐものだといふ事を確かに申上げることが出來ますよ。現在苦痛に打突かつて居る最中には、夫が治癒すると信ずる者は有りません。けれども、假令ば貴女の苦惱にした所が、他日屹度、微笑みながら平氣で御話しに成る折が有りますよ。私は其ことの餘り遠く無い事を望んで止みませんわい。畢竟、苦しみに代る滿足を理性の力に依つて摑まれるのですな。私が好い例です。何卒貴女も、戀の痛みを體驗した確かな友として這の自分を御覽下さい。——」

長い物語りはサフォーの懊惱を尠からず和らげた如く、彼女はお終ひ迄注意深く耳傾けてゐるのであつた。話が終ると、

「でも貴方の場合は、妾のとは相違が有るには有りますわ。少くとも貴方は或期間幸福に醉つて居られたといふ樂しい夢を持つてゐらつしやいますけれど、妾の嘗めた苦しみは、如何とも爲す事の出來ない手嚴しい、野蠻な力の加はつた不幸な戀ですもの。」

「いや、今御承知無いさう言つた甘い陶醉は他日屹度與へられますよ。……貴女の幻は不信なファオンだとしましたら、夫を最後にして其代り、一層穩かな樂しい感情を持つ人に替へるべきでせう。」

サフォーにも不圖、此最後の詞に似たやうな考が浮んで來た。——其時、若いモノフイロスが、昨夜から續けてゐる對話に眷戀して遣つて來た。

エフチーキオスは花の手入れを爲る。モノフイロスは鋤を取つて土を返へす。サフォーは二人の耕作を見て悅んで居る。曾つて自ら父の花園を耕した最も樂しかつた時の事が樂しく想ひ起されるのであつた。で彼女も二人に眞似て苔蒸した樹の枝をすぐつたり、長い經驗から覺えたやうに、育ちを良くするため樹と樹との組合つた枝を透したりするのであつたが、エフチーキオスもモノフイ

ロスも植物に關する彼女の智識を賞讃する。主人は彼女を、珍稀な植物ばかりを植え込んである所に連れて行つたが、サフォーは一々夫を見分ける。這麼年若で什うして是だけ草樹に就いての智識を持つたゞらうかと二人は頻りに感嘆し、夫からは一としきりさうした植物の智識や何かに就いて彼女も一つ所に愉快な會話を取り交はすのであつた。

第四節　詩

サフォーは此やうにして、エフチーキオスや其交友達の間に立交つてゐると、淋しいながらも平和な日が過ぎて行くやうに見えた。スカマンドロニーモスから通信が有つて、何時に變らぬ舊友の眞情と娘に對する心遣ひに謝意を表し、願はくはサフォーを連れて再びミチレーネに歸らないか、彼女の過去を忘れしめるには、什うしてもエフチーキオスに一つ所に居て貰ふ必要があるのだからと、希望しサフォーに對しては變らない父の溫情を注いでゐるのであつた。

フアオンの消息に就いては何處からも更に報道が無い。エフチーキオスは此知らせの後れてゐるのを寧ろ都合の好い事だと思つた。大方彼は商用で孰れかの港に引留められて居るであらう。……

サフォーは慈愛の籠つたスカマンドロニーモスの慰めを受け、彼女の父もエフチーキオス同樣自分を愛し自分を心配して居て呉れる事を知つて、人の父たる立場からは到底許しさうにも無い今度の自分の不始末を什うにかして償ひ度いものだと思ふ。——其寂寥な月日を過すため、彼女は又斷えず讀書に親しんで、心の慰安と樂しみとを求め、夜は交友が集つて中には古代史を讀むもあり、多くは詩を賞翫する。最も好まれるものは何と謂つてもホメーロスのものであつた。斯うしてサフ

オーは泉のやうに涌いて來る詩聖の調和した情緒を汲み取り、心は富み且豐になつて、兎もすれば詩興が燃える。靜かな或夜、彼女は有名な「アフロヂテーに捧げる詩」を作つた。

キプロスの片島かげに
宮造り、齊く女神よ
アフロヂテ、汝はもおそろし。
如何なれば斯くも汝は
泡沫の儚きものを
苦しめつ、い欣ばるゝ。

吾が心　痛み傷く。
畏ろしき戀の母そば、
涙もて　吾はも願はゆ、
神々し　パフオスと汝の

神の廷　早も降り來て、
み光に咲み晴らかせ
吾が胸の、この惱ましさ。

おゝ女神アフロヂテー、
汝はも知る、かなし乙女の
汝が在す御座の前に
額つきて願ぎにしことの
幾そ度　數重ねしよ。

一日吾は　ゼフイロスよりも
迅やけき　汝が鳩鳥の、
汝が召せる　御車
羽搏きも　輕らに

大空を横ぎるとぞ見し。

まぼろしの現に切めて
青雲に　羽風驚らし、
降り來し　汝が御車を
眼に留めて吾はも仰ぎぬ。

行くなべに　あやにたふとき
キティラの神よ汝は
吾が望み唆り立てつも
微笑めるロに告げにき。
吾が望み　愈煽りつゝ
吾が惱み　增さん詭計か。

笑ましげに　汝は囁きぬ
美し乙女　サフォーよ汝は
何悶え何をか懊む、
理無しと、其をし覺らで。

沸り立つ汝が憧を
片思ひ　汝につれなき
若人の胸に求むと
涙して　汝はし思へど、

航路行く　途をし違へ
汝が歩み脱れし人は
慕ひ來ん　間もあらなくに。
香はしき汝が贈り物

情無く拒みし彼は
あなづれる　あはれ其戀
幾倍し　汝に還さん。

此上無くも秀で輝き
汝が戀を破りし敵は
立歸り　矛を伏せつも
汝にこそ戰き伏さめ
その一と目　乞ひ求めつゝ。

アフロヂテー、汝はも苦げにき
甘かりし其御詞の
成り出でん時こそ來ぬれ。
見ね、見ね、吾が苦しみ。

吾が悶え、怒み爲ずや。

斯くも吾を傷けたりし
戀しく惡き、彼の君ゆ
吾がために　仇し報ゐて、
人戀ふる　這の心しも
覺えしめ！

——無情き胸に。

その翌日彼女は竪琴に合はせて此詩を謳つた。歌詞といひ、音聲といひ、渾然とした階調といひ總ては喝采を喚ぶに充分であつた。人も吾も、急にサフォーが天の神々の惠みを享けたやうに感じ一旦口火を切つた詩情は燃えて、夫からといふもの、すら〳〵と流れ淀まぬ泉のやうに、努力も爲なければ推敲もせず、立所に幾つも幾つも即興の詩が生れる。ミューズの神は斯うして彼女に對するアフロヂテーの辛辣な苛みを償はうと欲したのであつた。

エフチーキオスの許に集る人々は孰れもサフォーの天才が突如として花咲いたのを見て驚嘆する。されば彼女の詩は長い研鑽の美果でも無ければ技巧の爲せる業でもなく、只もう自然と情熱とから生れ出づる娘であると云ふに盡きやう。自然が彼女を詩人に造り上げ、愛慾が心の機能を發達せしめたのであつた。其詩題は世の常の詩人や雄辯家に見るやうな構想を凝したものでは無く、――然ういつた空想の畫面は得て何處かに破綻の現はれるものだが、體驗した者の情熱の詞は、より眞により力強い響きが有つた。斯うして彼女の深酷な戀の不幸は天衣無縫な詩と成つて迸る。假令勝れた天才でも、眞に感じない事を表現する時、稍もすれば其光を消すが、月明かな渚傳ひに戀を囁く牧歌ほど世に美しく優しきは無く、背ける戀の闘はす詞ほど雄辯なものは復とあるまい。彼女の詩は卽ち是であつた。

第五節　凶報

詩作の興趣と歡待の平和な樂しさに、サフォーを領してゐる根强い失戀の苦しみも暫時は抑へられた如く、彼女は徐々ビチアの豫言を疑ひ初めて來たのであつたが、激烈な情火は眠れる火山のやうに、復もや凄じい勢を以て目醒め、穩かな彼女の營みの到底滅却し得ないものであらうとは什うして豫想し得られやう。――年老つたロードペは只、神々の尊崇すべき事や、神託の確實にして灼然な事を一人くど〳〵と彼女に語つてゐるのであつた。

サフォーが斯うして落付いた寂寞に慰めを得て、堪えがたい苦痛を忘れたやうに見えた頃にはフアオンは反對の風に吹き流されて青海原を彼方此方と漂つて居た。クレータ島やキオの浦の見える所迄來て居ながら、酷い暴風に再びキプロスの方へと押流され、既に其島の岸が見え出す。揖手は確りと舵を握れど、手に餘る風浪に弄ばれて船は恰も藁屑の北風に卷かれて舞ひ飛ぶやうに、目指す港の方には行かず、昔から數知れぬ難破で有名な、恐ろしい暗礁の一列が眼前に姿を現はして來る。泡立つ濤も驚愕畏懼して其處な魔所をば避けるかと見え、眞黑な礁岩の横腹は凄慘な死を物語る。皮肉にも氣味惡い程日はぎら〳〵と明かに、影暗い魔の海は青く輝いた空を反射し、烈風の唸り

怒濤の響は魂切るやうな舟人の阿鼻叫喚を吹き千切り、水夫等は礁の背を避けんと海老のやうに櫓櫂の上へと身を折り曲げる。――が、必死の努力も其甲斐無く、あはれ、あはれ、フアオンの船は見る間に岩の突角に打當つて粉微塵に破壊され、沈沒して果てたのであつた。――

間も無く浪の上には、悲しい船の破片が散ばり、怒濤に卷かれつゝ死と戰へる不幸な水夫や、風の隨々浮いた死骸が現はれそ。勝れて泳ぎ達者なクレータ島の水夫二人は、夫でも運好く、辛うじて板の破片に取り着いた。さも無くば彼等とて、みじめな同僚の例に洩れず、淺猿しい死骸を海に沈めた事であらう。わなゝきながら彼等二人は、命の綱の板切れを確かりと抱き締めながら死の恐怖に漂はされる。稍暫時、――風は落ちた。荒浪が幾らか凪いで危險の絶頂は脱したものゝ、更に生きた心地も無く、眞蒼な顏、血走つた眼を引釣らせつゝ溺死の境を脱出しやうと蹌く。――

危險を脱れた歡びは最初の彼等の感情であつた。併し次には、……暗礁の鼻に叩き付けられ、裂き碎かれた仲間の死骸を見て、ぼろ〳〵と只泣いた。陸に匐ひ上つて呆然と佇み、省みて殘酷な自然を恨み且呪ふばかりであつた。幾日か經て彼等は船を借り、浪靜かな航海を續け漸く故郷クレータの島へと着く。豫てエフチーキオスの命を受けて斥候に遣はされてゐた奴隷の一人は急いでフアオンの難破を報じた。

エフチーキオスは何とサフオーに語つて好いか殆んど途方に暮れもしたが、併し一方には、成程一時は然うと聞いた彼女の悲嘆も思ひ遣られるけれど、フアオンが既に亡いと成つたら、或は時と共に、彼女の傷心しい失戀の傷が反つて癒り易く斷念めが付くかも知れないと色々に考へ耽つて居るのであつた。

併し、――言ふに忍びない其報告を待つ迄も無く、偶然なことにサフオーは這の慘憺たる難破の次第を早くも聞き知る事と成つた。丁度其時彼女はロードペを連れて汀を散歩してゐたが、例に依つて海から眼も離さずに見詰めて居ると、折柄其處に上陸した二人の水夫を見付け、

若しやとフアオンの運命を問ひ訊ね、――さうして、圖らずも、事情を知らない彼等から造り飾りも無い言葉で恐ろしい遭難の詳細を聞かされたのである。

おゝ、其時のサフオーの悲嘆をば表はし得る力强い鐵筆が何處に在らう。戀ひ焦れる人の死を今目前に見るやうな凄慘な物語りを聞いた時、彼女の前途は眞暗に見えた。……彼女は失神して砂に倒れた。ロードペは聲を揚げて人を呼ぶ。正氣に還つた彼女は狂氣したやうに泣き叫ぶ。

「無い！　無い！　無い……嘘！　嘘！……其麼、……其麼事は無い！　嘘、嘘つ吐き！……地獄の使者！……其麼……フアオンが死んで終つたなどゝ、……誰に賴まれて妾を瞞すの……嘘よ！……

…嘘だと言つて頂だい、……！」

思ひ掛けない彼女の罵詈と物凄い苦悶の爲方に吃驚して水夫等は離れ去らうとする。すると彼女は止め度なく泣きながら彼等に追ひ縋つて、打つて變つたやうな悄れた聲で、

「ね、……聞かして！……フアオンは、……では、最う、……確かに、死んぢ……まつたのね？」

彼等は最早其疑ふ餘地の無い事を確かめ、恐しい沈沒の樣を事細かしく話すのであつた。彼女の啜り泣きは其物語りを中絶させて終つたが、災厄が愈々事實と解ると彼女はぴり〳〵と着物を裂き破り、足で渚を蹴飛ばしながら、泪を一杯溜めた眼で海を睨み、

「貪婪な力！　盲目な力！　何だつて、……何だつて、お前は、……見境も無くフアオンを自然の矜りの美しいフアオン噫フアオンを、……アフロヂテ！さまの一番尊い御製作を、……何だつて、何だつて奪つたの？……耻知らず！……返して下さい！……返して！……返して！　フアオンを妾に返して下さい！　殘忍な、海の神さま！　ポセードン！　彼の人を妾に返せ！……假令……噫、たとへ、悲しい姿だつて、……骸だけだつて、……せめて骸を、……浪に運ばして寄來して下さい！……噫、……噫、……什う爲う！　妾は什う爲う！　彼の人の墓を建てねばならないのか！……生きてあれば社を建てる値打の有る人、それに墓を、墓標を！……噫、彼の人の軀が浪に揉まれ、浪

に沈んで……！　悲しげな彼の人が三途の川椽に迷つて、迷つて、渡らうとしても渡して呉れない情知らずの舟人に拒まれて、黒い其岸に迷つて居やう。……おゝ！　神々さま！　這麼、……這麼妾の泪が解りません?!　彼の人の命の有る間に妾のものに出來なかつたら、……死んでから、死んでからは妾の人！　おゝ！　妾の尊い寶！　妾の泪で貴方の墓を浮かして見せるわ！……フアオン！貴方の靈が今も妾の傍に迷つて居たら、妾の失望を知つて下さい！　貴方無しに、妾、……生きては居られませんわ！　せめて死んだら妾達は、屹度、屹度一つ所に成れるわ！　おゝ、フアオン、……妾を受けて！……」

サフォーは矢庭に驅け出すと、汀の浪に身を投じた。老年のロードペは彼女を引留める事も、續いて身を投げる事も適はず、身を切るやうに泣き叫んだ。水夫は走り寄つて彼女を救ひ上げる——

ロードペは半死のサフオーを水夫に任かせてエフチーキオスに走り告げる。呪ふべき天よ！

第六節　不思議の再會

氣の毒なサフオーの有様は、感じの鈍い舟人をも動かし、共にロードベに手を貸して、時遲れぬ内にと彼女をエフチーキオスの宅に持運び、寢床の上に横へる。眼は空洞に半ば開いた儘、呼吸さへも切れ〴〵の苦しげな様子で、彼女の命は今や何人にも望み尠げに見えるのである。

すると其時、エフチーキオスは慌しく、這の光景に驚いて居る、も一人の舟人の手を曳いて驅け付けたが、這入つて來るなり夫を離してサフオーの側に寄り添ひ、氣付香水を彼女に遣つて、

「サフオー！……さ、確りなさい。……可憐さうなサフオー、さゝ、眼を開けて御覽なさい。貴女が死んだと思つて悲しんで居られる當のフアオンは此通り丁と生きて居るのだよ！……貴女の側に居るのだよ。……氣を確かに！　さあ其フアオンはな、アフロヂテーの新しい惠みに又一層綺麗に成つて此處に來て居るが見えない？……解らない？……確りして！　サフオー……！」

昵つと靜かに一同は憂慮を顏に表はしつゝ彼女を取卷き、何かしら氣の付く徵候が見えないかを注意する。——好い鹽梅に彼女は段々勢附いて來るかに見える。困難ながら呼吸の數も尠しづゝ增し、痺れた手足は展びると、軈てどんよりした其眼を力無いながらも見開いた。サフオーは然うし

て自分の周圍に集つてゐる人達の上に眼を向けたが、不圖、エフチーキオスの傍に、同情の籠つた眼容をして自分を見詰めて居るフアオンを見ると、自分は未だ夢を見てゐるのではないかと思ひ惑つた。おゝ、其眼！……フアオンの眼！……新しい戀の毒藥が又更に彼女の心に泌み込んで行つた。

彼女は未だ這の幸福を夢見心地に疑つて居る。エフチーキオスは一層彼女の側に身を寄せて、他の人達と共々、彼女を慰め、彼女の氣の確かに成るやうにと力を添へる。——周圍の話聲から彼女の五感の確かになつた事が解る。徐ろに死の眠りから醒めると等しく、懷かしい戀に醉つた彼女は

「呀つ！……フアオンは未だ生きて居ました……！」

と小さい愕きの聲を揚げる。フアオンは優しく彼女を援け起しながら、

「おゝ！　お氣が付かれましたか！　詩に惠まれたサフオー！……然うです、私は生きて居るのです。……貴女の怪しまれるのも尤もで、是こそ全く神の御惠みなのですよ。その事も追つて御話しますけれど、今は貴女の御身體が肝腎ですから……」

「有りがたう。……最う大丈夫ですの。お話し下さいな。貴方の危い御命を助かられた御話より妾に取つて樂しい事は御座いませんわ。……矢つ張り彼の女神さまの御力でせう？……他の不幸な人達の亡くなられた事が貴方の御身の上のやうに妾、聞きましたものですから……」

と言つて彼女は、身振りで以て、部屋の隅に居る二人の水夫を示すと、フアオンも見付けて立寄りざま彼等に抱きついて、

「おゝ、是あ！……君達も助かつて居て呉れたのか！……神の惠みは私だけだと思つて居たが、じや、私だけでは無かつたんだ！……迚も命の無い所を、全く天の惠みだつたなあ……！　何にしても不幸な仲間の内、別けて親しい君達二人と此處で逢ふとは！　だが、何といふ是は運命だらうなあ……」

彼等二人も勿論思ひ掛けない這の再會を狂喜した。サフオーは益々活氣附いて、

「最ふ妾、大分快くなりました。……什うして難破から御脱れに成つたかどうぞ話して聞かして下さい。」

エフチーキオスや、其處に集つた人達もサフオーに詞を添へるので、フアオンも其氣になつて徐ろに話し初める。

「難破する迄の事情は皆様も既に御承知のことですから重ねて申しませんが、船の沈んだ時は私も跪きました。力の限り游ぎましたが、着物の重みと浪の凄じさには、間も無く自分の努力も空しくなつて、あはや私は浪に呑まれやうとしました時、私を御惠み下さる力強い女神さまが御救ひに現

はれて下すつたのです。……泡立つ浪の上を例へば輕い雲の如くする〳〵と滑つて來られました。私は其様子、空色に輝いた眼、其微笑みの嬌かさ、自然の大暴れにも亂れない穩かな態度を見て、確かに女神さまだと解りますと、さあ其御出現に力づいて、如何にかして其御脚下迄泳ぎ着かうと努力を倍加したのです。……が御妾は燕のやうに輕く自由に浪の上をかすめて或時は高浪の頂に拜み、或時は屹立して向ふの見えない怒濤の底に御見受される。――見え隱れな御妾に心配しい〳〵私は、暫くは憂慮と希望との間に迷つて居たのです。

弱い人類を恣に弄ぶ事を好まれる女神は、尊い御慈悲を垂れられるにも其麼にして焦し迷はせて居たのでせうが、軈て風に卷き揚る纒ひ物の一つを取つてばつと私を絡まれたと思ひましたつけ。私はふわ〳〵と女神の手に引揚げられて輕々と空中に運ばれたのです。女神の手に御縋りして居れば心強いとはいふものゝ、伴らない所を申上げますと、浪から引離された空中は、又恐ろしいものでした。海水は、びしよ濡れになつた私の衣から垂れてゐます。私は斯うして廣々とし大空中を横ぎるのでしたが、美しいキテレア様は、例の物好きから、遽かに其纒ひ物を手離しました。私は海面に落ちました。其時私は惡戯好きの女神が空遠くホ、、と高らかに御笑ひになるのを明かに耳にしましたよ。